

橘南谿著述  
平出古刀祿標注

標註東西遊記

西遊記  
續西遊記

明治三十二年發刊



Handwritten text in cursive script (Caoshu) arranged vertically on the left side of the page. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to include characters like '菊' (chrysanthemum) and '石' (stone).

菊石



標註東西遊記序

旅行はどをかしまものはあらじ、岩が根のこしき山路をたどりては、樵夫ともの物語につかれをやすめ、荒浪のよする濱邊に漂ひては舟子等の歌に苦しさを忘る、都會に出で、は大厦高樓に寝ね、美酒佳肴に飽きて、一日の王侯となることもあれど、邊鄙に赴きては茅屋に雨露を凌ぎて松風の聲荒波の音に夢を驚かされ、麥飯に飢餓を支へても終日の疲勞を休むる能はざることあり、境遇日々に變りて見聞時々に同じからず、珍らしきを好み新たなるを喜ぶは人情の常なれば、たとひ苦しくつらきことはありとも、今日の人にして旅行を好まざる者はあらざるべし、されどいにしへは旅行をうきことの限りといへり、今にしてこれを思へば、夏の蟲の氷を疑ふが如き感なきにあらぬ、當時旅行のいかに困難なりしかを聞きたらんに、誰かこれをうべなはざらんや、さかしき山にも路なく、深き川にも橋のありたらばこそあれ、大方は人家もいとまばらにして宿驛も遙に相隔離ければ、行きくれて宿りすべき屋なきとさには、木の下蔭に宿り、或は草引き結びて眠らざるを得ざりしことも、その常なり

き且つまた猛獸毒蛇の憂へ、山賊海賊の懼れありしのみならず、飢を凌ぐべき  
 よすかだになきこともありしかば、米をも擔ひ甌をも持たではかきはざりけ  
 りとぞ。されば能因法師は都をば霞と、もに立ちしかと秋風を吹く白河の關  
 と詠み、紀の貫之朝臣は土佐より都に歸るにだに、五十日餘りを費したりき、そ  
 の困難想ふべし。旅はうきものといひしも宜なるかな。江戸時代となりては參  
 勤交替といふことありて、海内の諸侯皆な江戸に往來せしかば、山にも路を開  
 き、河にも渡しを設けしなと、いにしへにくらべてはこよなき便りを得しかと、  
 なほ山路はけばしくして歩行に難み、廣き河には橋もなかりしかば、少しく水  
 の増す時には、たやすく渡ること能はずして、徒に減水の時をまつのみなりき  
 とぞ。今にたゞこれを思へば、實に夢の如きかな。明治の大御代となりてよりは、  
 山にも平かなる路をつくりて車を通はしめ、河にも大いなる橋を渡して往來  
 の便を計れり、しかのみならず陸には一日に百里を走る汽車あり、海には風浪  
 の憂へなき汽船ありて、朝には上野の花を眺めて夕には松島の月を賞するこ  
 ともいとやすくなりぬ。唯往來の便り、此くの如くよろしくなりしのみならず、  
 到る處に旅舎の設けあれば、糧をもたらすの煩ひもなく、木蔭に宿り、木を枕と

するの困難もなし、されば人皆な旅行のたのしきを知りて、苦しさを知らず、變  
 遷は世の常といひながら、かくばかり古今差別の甚しきものはあらざるべし。  
 さて旅行のさまのうつろひかはれるにつけて、想ひいださるゝは、紀行の變遷  
 なりけり。貫之朝臣が土佐日記をかゝれしより、紀行といふもの代々を経てい  
 とさはに物せられたれど、大方は歌を交へ文を飾りて、その詞藻に誇り、或はお  
 のれ一人の心やりにせるのみ多かりし。今まこれを見れば、文學として面白  
 きと、且ついにしへの驛路のありさま、人情風俗政治などの片端を窺ふたより  
 とはなれど、他に讀者を益することもなし。然るに江戸時代となりてよりは、一  
 般に學問も開けしかば、實學に志し兼ねて作文に長けたりし者も多く出でた  
 りき。隨うてまた旅行を好み、紀行を書きたりし者も少からざりき。橋南谿の如  
 きは、その一人にして、然も拔群なるものなりき。

そも、南谿はもと醫を以てその家業とせしが、理學にも通じ、文學にも疎か  
 ならざりき。平生旅行を好み、陸奥のはてより筑紫のすみゝに至るまで、殆ど  
 足跡の到らざりしところなし。さて當時の旅行はいにしへの如く甚しき不便  
 もなかりしかと、なほ今の人々の夢にだにも想はざる困難ありき。南谿もその

旅行の間には幾度か生命をも失はんとせし危険をも犯したりき、かくて文學上の名勝佳區は云ふもさらなり、英雄豪傑の興敗せしところ、孝子順孫節婦義僕のいでし土地など、遍く探り、委しく尋ねて記るしたるのみかは、人情風俗の差別、氣候、産物等の異同に至るまで詳に考へ記るさすといふことなし、これに紀行文の一大變遷にあらずや、これを見る者は坐ながらにして海内を週遊するの思あるのみならず、よろづの智識をも得ること他にこれに比すべき紀行あるを知らず、その文章また平易着實にして明快周密なれば、いさゝか文法の疵瑕はあるにもせよ、今日普通文の標準とし模範とするにはこよなきものなり、宜なる哉、世人早くよりこれを寫し傳へて愛讀し、また板本となりてもひろく世に行はれたり。

今や文學大に開け、旅行また便利となりたれば、おのづからその紀行も新聞に雑誌に目も及ばぬ程いづれど、或は徒に貫之朝臣の餘風を慕ひて歌文にのみ心を用ひたるもの、或は學識の足らず穿鑿の精しからざるよりして見るべき價なきもの、或は行文の拙くして讀者を倦ましむるものなど多きが如き、いかにぞや。

今日の青年は幸にしてこの文運隆盛の御代に生れ、未曾有の教育を受けたるものなれば、南谿の紀行を見て古人の困難を犯し、こと用意の周到なりしことなどを追想して、名山大川を跋涉し、辛酸をなめ心膽を練り、或は僻地荒陬を廻りて人情風俗を察し、舊跡遺聞を探りて有益なる紀行を作り、以て世用を爲さんことを勉むべし、徒に文明の利器を利用して安逸のみ事とする者は、わに古人に對し、その良心に對して愧づかしからずや。

こゝに余が友平出古刀禰は尾張名古屋の産なるが、累世の醫家に生れながら文學に志篤く、彼れ常に南谿の醫家にして文學にも長じたりしことを想ひ、其名の餘り今の世に現はれざること惜み、このたびその紀行を校正して、頭註を加へて今様の活版に付し、ひろく學生をして實用的紀行文の標準を悟らしめ、世人をしては遍く各地の有様を知らしめ、萬の智識を得しめんとす、おのれまたこの紀行の文體をよみし、常に愛讀せるものから、その再び世に出づることを喜び、一言を書きそへて讀者の注意を乞はんとするのみ。

明治二十七年十二月

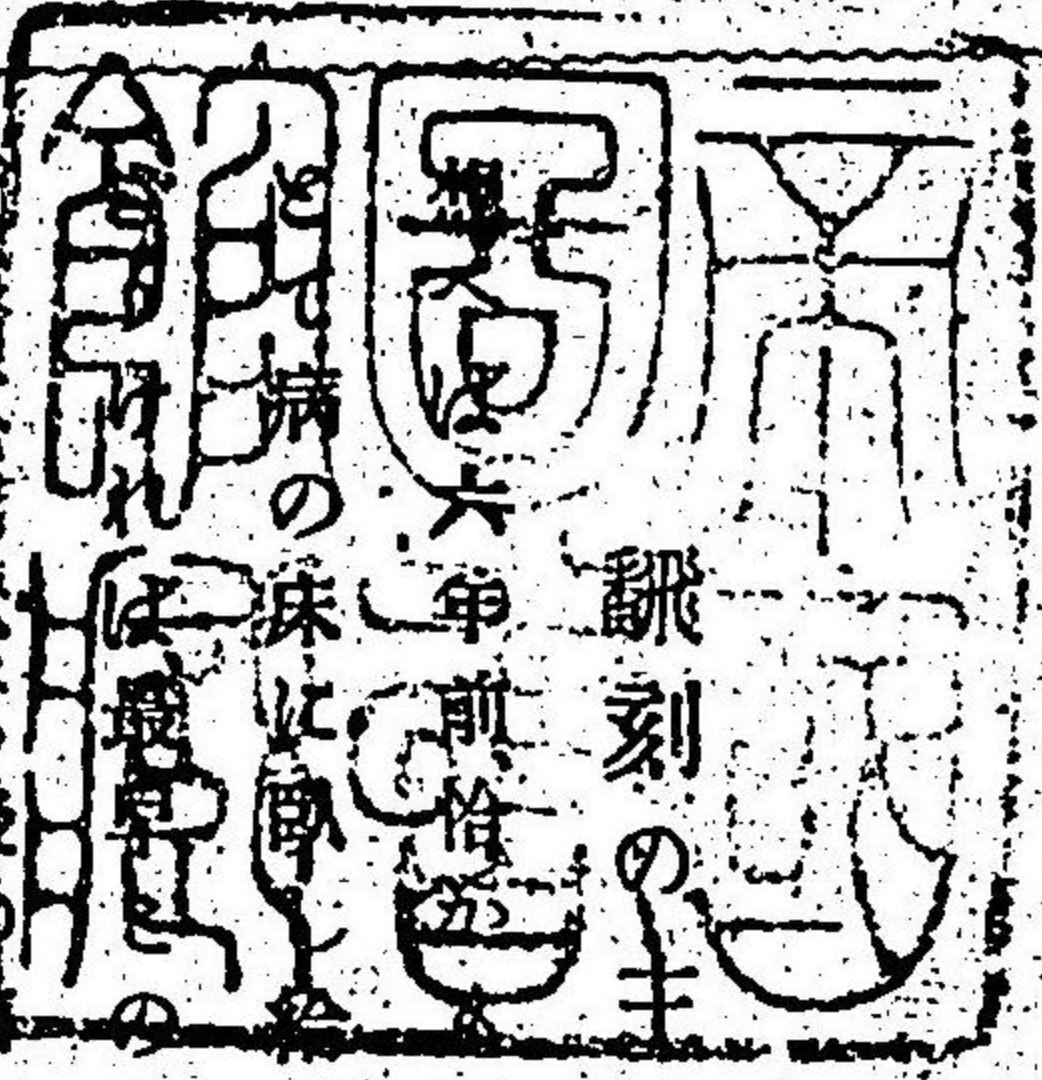
高津 鈇 三 郎

生涯自樂  
一書生  
短褐年年  
事遠征  
遮莫他鄉  
知己少  
青山流水  
懸相迎  
客中行  
南谿



標註東西遊記上篇

橘 南 谿 著述  
平出古刀禰 標註



翻刻の主旨

明治二十二年のことなり、先考一たび腹の心地例ならず  
ひけるより、日々に重りて、醫藥の効はかゝしうも見ぬ  
世に永く住むべからずと覺悟し給ひ、吾等兄弟をも枕邊  
の事などねもごろに諭し給ひき、その後、藥石も効あるべか  
らずとて服し給はず、日頃讀書を好み給へる性として、かゝる際までも種々の本  
とりよせて讀ませ給ひけるが、今は讀書の魂盡きたり、汝讀みさかすべしとの  
たまへば、われ承りて枕邊の本とりて讀みのこしたまへる所より讀めり、其折  
よめる本ころ、この東西遊記なれ、一ひらいただをばらざるに、父のおのが嗜め  
る本をば人に讀みさかせらるゝ程の、身の甲斐なさと歎き悔み給ふを、われも

慰むるに言葉なくして、哀しさを胸に迫り、涙いつしか頬のあたりをたふ、傍に侍ふて看護する人人も、顔をうむけて鼻うちかめり、かくて幾もなくて父はうせ給ひぬ、われらの頃までは此書を知らざるにあらねど、さまで深く思ふことゝてはなかりき、ざるになき父のいまはの際まで読み給へるといふこと肝に銘じて後は、只管その書なつかしく覺えて、明暮となく暇あるときは手に取ること多かり、読み讀みて、思ひあはすことあれば、上に注しなれどしける間、この書にいふべからざる妙趣あることをおぼね、はては南谿といふ人、かつて知れることあるやうに、其人の姿、言葉など、かくもあるべしと胸に浮ぶほほになれり、もこの東西遊記は、橋南谿が自ら遊歴せる國國の奇觀異聞を始め、孝子忠僕の善行に至るまで、何くれとなくしるして、或は褒め、或は誠しめれば、智育徳育の道にかなひ、剩さへ文章も平易簡潔にして、流麗なるにあらざれど、辭句皆眞摯を旨とし、意の赴く所に筆達して、いさゝかも晦澁不明の迹なく、實に我邦有数の能文といふべく、家庭に備へて婦女幼童に讀ましむるには、こよなき良書なりける、されどもこの書、寛政の古へに刊行せられたれば、世にうちたゑたるにはあらねど、また多からざれば、今の世、古き書どもの數々、翻刻せらる

ゝにつれて、此書も同じうは刊行せられて世に弘まれかしと思ふに、未だうの企ありとも聞かず、さるからにおのれ自ら其勞をとらばやと思ふも、この忙しき身の覺束なれど、なき父のいまはの際に望み、嗜み讀み給へることを思出せば、左にも右にも一日も早くこれを刊行して世に弘めばやと切に思ひ起ちぬ、さてこのたび刊行するには、文字の誤り、假名違ひの少からぬを訂正して、んと思ひしが、愚なる吾が恣に改刪すると、著者の本意を傷くるに似て、角を矯めて牛を殺す恐れなきにあらざれば、うのまゝになしつ、また籍中の挿畫も一二を除けば、要と思ふべきものなし、挿畫をはさまざれば印刷も容易ければ、要にあらぬを悉く省くことと定めしも、更にまた思ひ返すに、その畫もいたく心をいれて、蘆雪、吳春、素絢、應瑞など、當時の名家を選びてかゝせけるものを、流石に削り去ることの惜しく、父も蘆雪が畫ける正木の顔のいと面白きことよどのたまひけること、の耳の底に残りあれば、愈々これを削るに難んじ、悉くさしいることゝなせり、また讀者に南谿、其人の經歷性行を紹介せんとおもへど、如何にせん、そのこと多く傳はらず、また傳記の據るべきものも少し、僅かにこの書及び北窓瑣談、雜病紀聞、傷寒外傳、南谿詩文集なんどの、南谿自著の書の中に見

ぬたる逸事を拾ひ集めてやがてかれこれ考へあはせやう／＼に一篇を綴り  
なして次に附したれど、事の誤りは少からざるべく、逸事猶ほ餘りあるべし。こ  
の患は標註の上にも然り、もどその記事に思ひあたれること、同じことその他に  
見ぬたることあるは山川の地位、人物の小傳など、おのれの知れるを何くれと  
なく讀むがまゝに記しけるにて、預じゆ標註してんなど、思ひはかりてなし  
たるわざにあらず、畢竟自らの好事に閑餘の筆を弄したるなれば、精粗一様に  
整はず、遺漏もどより多し、剩さへ頭欄の紙白餘りなくして、能く掲げ盡さざり  
しことあれば、これを以て讀者を益せんこと或は難かるべし、さりとて今こ  
れを補正するに暇なくて、こゝに標註東西遊記と題して梓に上すこと、なし  
ぬ、其名實に違ふといふ譏は、吾が甘じて受くる所なれども、希ふは世間の人た  
ち、まづ標註を外にして、本文を熟讀玩味せられもせば、おのれに同好の友を得  
たる喜びあるのみならず、なき父を慰むる便ともなり、また文壇の幸となるこ  
と少からざるべし、あなかしこ。

明治廿七年一月

標註者識

### 再刊の辭

さきに己れこの書を刊行するに當りて標註の二字を冠すること、或は其實に  
適ふまじきにと、深く愧ぢらひつるに、殊の外に世に愛でられ、遠く書を寄せて  
斯舉を太く嘉し給へる方さへおはしき、かくて幾百冊となく求め去られて、今  
は残りなうなりたれば、この度更に再刊せざるを得ざるに至りし、こゝ望の外  
の喜なれ、剩さへ南谿子の遺族の伊勢の國におはして、逸事の一二を語り聞か  
せられ、其遺墨をさへ惠まるゝに至りしは、即ち本書の巻首に附したるもの、こ  
もまた望外の榮といふべし、さても此書の近き頃より高等女子師範學校、第一  
高等學校などにて、國語科の参考書に用ゐらるゝとさへ聞くに、吾が望はは  
ど／＼足りぬといふべく、今はせめてもこの度の刊本の上に、標註なんど更に  
増し加へて、讀者の彌々益せられんとをこそと思ひはかりつれども、身の忙し  
さに思のまゝならず、補ひつる所は少からざれども、當初の望には似るべくも  
あらず、さりとて、何時をか期せんと、心ならずも梓に上しぬ、己が望足りて、  
世に報ふるに足らざるころ、心苦しきことの限なれ。

明治三十一年五月

標註者識



空江一夜

靜無波

騷客漫吟

明月歌

輕掉若移

乘興去

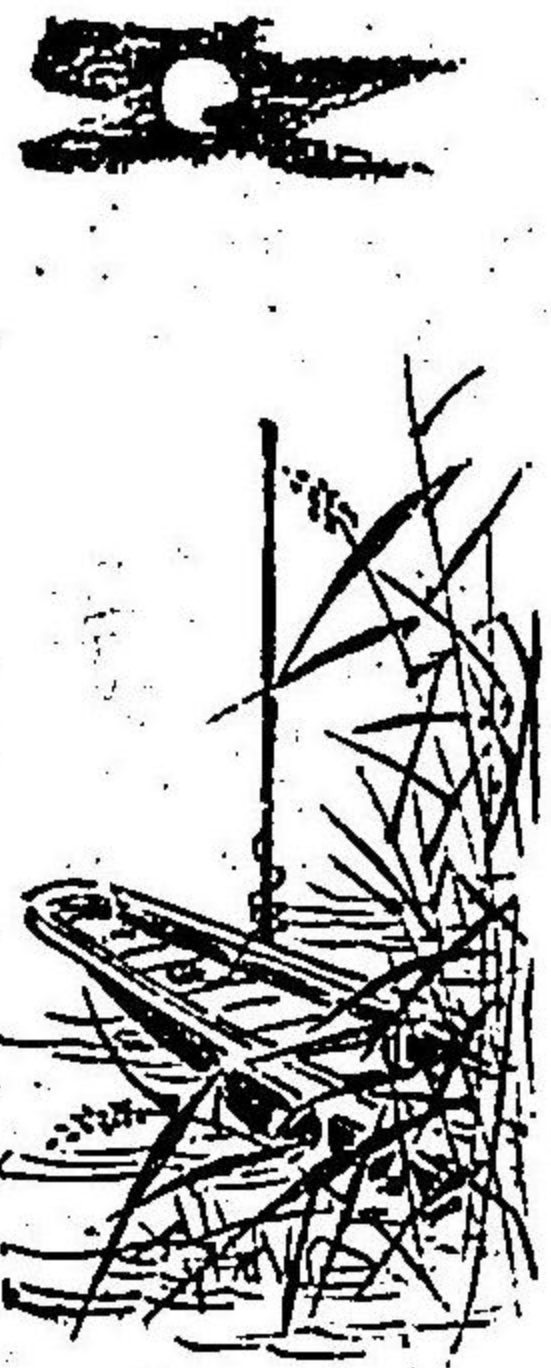
夜深恐又

泝銀河

長江旅

泊之作

南谿



### 橘南谿小傳

橘南谿諱は春暉、字は惠風、南谿は其號にして、又梅華仙史署して梅仙ともいふの號あり、本氏宮川氏にして後其妻伊賀師某の女の氏を冒しと聞く、宮川氏の先某近江國宮川村に住み、地を以て氏となし、淺井氏に仕へしに、大永元年番馬にて戦ひ死せ、其遺子三人流落して伊賀の西條村に居りぬ、仲子某伊勢の藤堂氏に仕ふ、これを宮川氏の祖なる、其子の代にや、寛文中、支藩久居の藤堂氏に仕へて、これに移りぬ、南谿は五世保長の五子なり、寶曆三年、今の久居町大字西鷹跡町六十番地の邸に生まれぬ。

南谿幼きころより物の哀れを知るといふ情いと深かりき、七八歳の頃なりける、ある夜、其父の傍に侍りけるに、父は孤燈を挑げて孟子を讀めり、彼れ其の見給ふ書不何事かか、げあると問ひけり、父はされば汝にも讀みさかすべしとて、羊を以て牛に代ふる章を講しきかせてけり、彼れは幼心にも堪へがたく、哀れさ胸に覺わて泣き出しぬ、かくて後は其哀れを忘るゝと能はず、また其哀れをしるせる書を忘るゝと能はざりき、されば折節父に請ひて孟子を聽くに、聽

き聴き、自ら讀みもする間に孟子七卷は心易く誦するほどになりぬ。かくて孟子より論語に進み、さては學問に志し、其藩の儒者佐野西山に就き、心のまゝに學びき。『平かなる地方壹町ばかりもある所に、紅葉のひまなく植ゑつめて、其中に菴結びて住みたるは、いかばかり嬉しかるらん』との優しき望は、彼が十歳の時の望なりき。而してその望は終生其念頭を去ることなかりき。多くの書を獵るにつきて、彼れの意中に追慕せしは、我には西行兼好、漢土には老子等、總じて厭生的の人ならざるはなし。就中兼好は彼れの最も意中の人なりき。故にそのいへる詞に『月は隈なく花は盛りあるをこのみ見るものか』はと、兼好は誠に風流の意いと深かるべく、つれづれ草の一書、其才氣の絶倫なるを見るべし、この法師とうち向ひて物語せば、人をして心醉せしむべし』といへり。

その父は彼れが十四五歳の時に失せぬ。されば家計の上よりも彼れをして讀書にのみ耽らしむべきにあらず、また彼れは孝養の心いと深くして、母の生計のことに苦心せんことを思ひ、遂に其職として醫たらんと志して醫術を學びぬ。その業畧ほ成りて、僻遠の地にては名をなすに足らざればとて、十九歳の春遂に故郷を去りて京師に上りぬ。されども老たる母を故郷に捨置んこと、心安

からずとて、幾もなくして母を迎へとりしも、いまだ日々の糊口に苦しむほどなれば、奴婢を置くに資なくして母子相對ひてくらしぬ。南翁の兄、家を嗣ぎて郷里にあるべし、何故に母を迎へしにや、疑らくは異腹の子にや。其母は貞順方正なる婦人なりき。彼れが鄙より出で、京洛の物珍しさに心浮れ、花よ月よと遊行にのみ傾き、折々は夜も早く寝ね、また朝遅く起きて、よしなき技藝に日を費し、徒なる雑談に月を重ねることのあるに、その時々母は温言を以て、汝が郷國を去り來りて、かく貧困に住居するは何の爲ぞや、我もまた汝が行末をも見ばやと、年老し後に墳墓の國に別れ來りて守り居るは、學問をも勤め、よき人にもなりて天下に名をも揚げよかしと思ふのみ、然るに汝、かくいたづらに年月を費して世の人並に遊び暮らすとは、始めの心は忘れたるにや、さらで父母の國を輕輕敷去りしを、其罪は何をもてつくなふことや、汝は心あらば能々とおもひ見るべし』など誠めぬ。折々の庭訓身にしみて、愼み勵みて、醫術の濫與を究め、殊に香川太沖の學流を汲みぬ。彼れ太沖を稱して曰く、漢土の醫は文質に勝り、皇國の醫は質、文に勝れり。文質兩ながら備りて、漢土に愧ぢざるは、特に香川太沖のみといへり。彼れ醫則を掲げて云へらく、『窮人身之理、察疾病之機、

達藥物之性、醫之能事畢矣」と是れ彼れが理想上の醫人なり。彼れ醫學を修めける餘暇には、また博く和漢の書に涉り、物に觸れ、情動きては詩を吟し、歌を詠し、俳諧をも作りぬ、いつしか同好の友を得て、彼が東西漫遊の志を促さしめたり、其友といふは、奥羽の端より筑紫の端まで、あらゆる奇勝を探りて、笈埃隨筆を著せる俳人五井塘雨これなり。塘雨が庵の門は常に鎖されて、肱笠雨に暫しの櫓をかるも、顔は笹蟹の絲にからまるはとなるを、彼れは親しみてこれと往來せり。塘雨が探り來れる東西の奇勝には、彼れ殆ど心醉せるが如し、彼れが漫遊の志こゝに於て勃々たり、この時其家計漸く豊ならんとす、彼れ素より富貴を好み、されども富貴に勝る無上の樂あり、彼れ曰へらく、「富貴は人の欲する所にて、余もこれを憎めるにはあらねど、もし唯世の中の樂みを論せば、身のよせも重からず、衣食の事は、いつれの境に居れるにも、人の惠ひばかりのさへありて、皆人のさそひあらざる富貴のみちは、少しもひけつゝ、須磨の秋、吉野の春、唯心にまかせて時におくれず、又思ふ人あれば千里の遠きをも必ず尋ね訪はん事こそ、いと興深からんとは、我のみ思ふかもしらす」といへり、故に漫遊は彼が無上の快樂たりしなり。

天明元年の母死せぬ、親を失ひし子の哀しみは孰れもかはらず、彼れはその哀しみの中にねもころに黒谷に葬りぬ、彼れいまだ妻を迎へざれば、子もあらず、既に兩親に別れてければ、今は孝養の絆も断れて身に繋るものなし、こゝに至りて其年既に西遊を思ひ立ちぬ、彼れが漫遊の素志は塘雨の如く、管に天下の奇勝を探らんため、のみにあらず、寧ろ諸國の風土氣候を親しく身に受け考へて、著す所の醫書にあやまり少きやうにあらしめ、普く世間の病者の益にもならんやうのことなり、なべて彼の漫遊の主旨は醫術修行にして、山水の明媚を探り、奇勝の地を踏むは其餘事にあり、しかるにまた障ることありて翌天明二年の秋まで空しく打過ごしき。

そもこの天明の初年といふは、光格天皇の初世にして、幕府には徳川家治將軍として、老中田沼意知恩寵を專にし、威權を恣にし、賄賂公行し、刑賞もどよりあたらず、享保の治漸く弛みて上下驕奢に耽り、諸藩の財政窘迫し、庶民の賦課彌々重く、物價騰貴し、商況振はず、就中細民の困窮日一日に深きに陥れるなり、世既に斯くの如くなるに、剩つさへ天變地災、年毎に夥しく、伊豆の大島、大隅の櫻島等の噴火を始め、地震、火災、洪水等各地に災し、氣候甚だ不順にして、三伏にも

憂さを覺ゆる程なりきされば凶作うち續きて殊に西國は飢饉の慘狀を見んとす従うて人心も甚だ穩ならずして野盜強盜夥しくなりて劫掠の噂まらくなり若し漫遊の時を選ばずその頃は便りあしきはなかるべし然るに彼れは其二年の秋思ひ立つまゝに門生文藏なる者を従へて鹿島立ちしぬ

留別平安諸子

寒驚非不省婆心在衛生一朝試方技千里爲此行青囊僅隨身艱險幾路程煙霞吾所怡山水慰旅情離別但可惜親朋在帝京  
これ彼れが當時の作ならざりしか

彼れまづ京畿を出で道を山陽にとれり播磨には曾根の松を觀備後には痲疾を療して弘法大師の御來降と崇められやがて三原より安藝周防を経て長門に至り赤間ヶ關より豊前の小倉に渡りそれより豊後を歴遊し南境に登りたる祖母が嶽に登り日向に下り霧島山に天の逆鋒を探り薩摩に逗留りける間に其年は暮れぬ明るる春の初め鹿兒島を立ちて大隅に遊び肥後に入り玖摩の城下に五十日許の間留まりやがて肥前の長崎に至りしは雲隠れの月に不如歸の聲を聞く頃なりき顯微鏡隣目鏡エレンキタール等聞くにつきて見る

につきて心を驚かす者のみ七月長崎を出立ちて雲仙が嶽に登りそれより島原に出で船に搭し天草島に渡りて不知火の奇觀を看九州全國廻り盡して四國に渡り伊豫に扶桑木を搜め得てやがて京師に還りしは其年の秋なりきかく西遊ををばりけるにまた東遊を思ひ立ちて天明四年の秋門生養軒といふを従へて出立ちぬ京城を離れてより道を東海にとれりまづ其心を惹きしは鎌倉なり古への人が大津の浦に比べしといふ繁盛も今はあれにあれて神社佛閣に留めたる昔の俤に懐古の情忍びあへず江戸より水戸に遊び筑波山に登りなぞして其年を暮らしやがて仙臺に到りしは其翌五年三月なりき未の松山鹽竈浦野田の玉川など名勝舊蹟を探り九月より翌六年三月に至るまで奥羽の北端さては北越の地を探りぬかゝる北邊に遊ぶ人大凡うは皆春の季より秋の半まで雪既に消ぬ霜いまだ降りざる間を選ぶなるを彼れは醫術修行の爲めなればとて殊更に朔風肌を劈き深雪征途を埋む時を選びしことなれば道々の艱難はいひもつくすべからず飛馬川の波浪尾國の雪羽州の鬼津輕の餓饉其他千辛萬苦身を危うすること數々なり三月の中旬越後より佐渡に渡らんとして颶風に遇ひて止み信濃の諏訪松本の邊に遊び川中島の古

戰場を吊ひて、更に越後より越中に入り、加賀を経て越前に來り、近江に廻りて小川村に中江藤樹の講堂をたづねて京に歸りぬ。かく西遊、東遊合せて五年、其他、南紀の歴遊等を併せて漫遊すること前後四度に及べり。その東遊を畢へて歸京せし後は、門を張りて醫を業とせり。又朝に仕へて尙藥に任せられ、石見介に補せられ、從六位下に叙せられぬ。名聲、京城に高くして、贊を執りて其門に入るもの少からざりき。彼れは好むで傷寒論を講じき。從うて其著書にも傷寒論に關はるもの尤も多かり。傷寒論分注、傷寒論通言、傷寒論外傳あり。其他、痘疹水鏡錄、痘疹玉環方、藥方小牋、國語律呂考等、寛政の初めより前後相踵いで著述せられたりき。彼れ曰へらく、「吾醫を學ぶと廿餘年、醫學に於ては和漢古今に譲らずと竊に獨り思ふ。其他の技藝、年若きより多端に渡りて、畢然とも何事も人並にも至れることなし。これは修業の功足らざるなるべし。未熟の藝にて時にふれ、よく出來たる時、人の稱美を得れば、虚なることは知りながら、何とやら嬉しき心地し。人の毀を聞いては、悦ばざる心地す。但醫學の事を他人評するには、よしと稱せられても嬉しくもあらず。惡敷うしられ、ても腹立つ心聊も起らず。これは自ら安心立命し居る故なり」といへり。彼れの

如き謙讓なる心を以て猶ほ斯言あるは、自ら信ずる所厚かりしを知るべし。彼れは我國の古典を研ぎ、歌を詠じて、少くとも所謂國學者流の偏僻あるべきに、能く和蘭の醫説には一揖を施せり。彼れ和蘭を評して、「細工の微妙なることは世界の内阿蘭陀に勝る國なし」といひ、また「天下の醫學大抵漢人長窮理、阿蘭人精實測、阿蘭人之辨臟腑筋骨鑿鑿可據、其論皆盡精妙無復餘蘊、觀解體新書而可見也……其實測之精多、和漢古今未曾有之說」といへり。これ彼れが遠く崎陽に遊びて「エレキテール」顯微鏡等に驚歎せし結果ならざるべからず。しかも彼れかの「エレキテール」に模して自ら發電器を造り試みぬ。この點に至れば西行、兼好輩の厭世者流を慕ふにも似ず。怪は何處までも其理を究めんとす。日常投ずる藥物にして、假りに奇驗あり、靈効ありといはば、これが所以の理を尋究せざれば休まず。徒に奇といひ、靈といふは自ら愧づる所となせり。故にいへらく「醫家先生の詞に奇妙といふことあり、苟も醫學する者はいふべからざることなり……この奇妙奇妙といふ詞によりて、醫學の筋終にかくるゝことに至る」といへり。また「北極星地を下るの高下によりて、地球の南北を知ることなり、地上にては眞直に貳拾五里程を隔つる時は、天にて壹度を違ふ故に、北極

星の度数を知れば、居ながら國の南北を知り又國の寒暖を知る、醫者も國々の氣候を知らざれば其國の陰陽變化を盡さず、故に疾病をも察すること能はず」として、西游東游の途すがら、北極星の度数を測らんとて、行旅に携帯し得べき、便利なる測量器を製りて携へありき、行くさき／＼にて測りぬ、其成績の三四を掲ぐれば、

大隅國佐多郡佐多岬……三二度弱

山城國京都……三二五度強

武藏國江戸……三六度強

越中國新川郡富山……三六度五分強

出羽國秋田郡秋田……四〇度五分

出羽國磐手郡澁民……四〇度七分

陸奥國津輕郡碓力關……四一度四分

陸奥國津輕郡青森……四一度七分

陸奥國津輕郡三馬屋……四二度分

また寛政の初め和泉國貝塚の人、岩橋善兵衛の望遠鏡を創製するや、彼れはこれを以て天體を測り究めぬ、其記事載せて、閑田次筆にあり、彼れまた音律に精通し、梵寺の鐘聲を聞き、其音調を覺れり、天王寺の鐘を聴きて古鐘にあらざることを知り、南長柄の鐘を見て、唐土北燕の物にして、其律、眞の黃鐘なるに感じ、又自ら黃鐘調の鐘を鑄さしめて、其發音を究めたり、之に至れば、彼れは宛

然理學者の如し

彼れは當時の醫學者の中に於ても有數の者にして、其著書も頗る樞要のもの多し、殊に我國の醫學史の上に於ても其名を記せざるべからざるは、彼れか解剖記事と脚氣に關する所説なり、抑も我國醫學的解剖は、寶曆四年山脇東洋に創まりて爾來これを學ぶもの間々これありしが、次いで有名なるは南谿が解剖とす、事は天明三年にありて、彼れが西游を竟へて歸京せし、後數旬にありしが、如し、南谿は罪人平二郎といふ者の刑屍を獲てこれを剖見しき、其圖記一卷世に傳ふ、今にして見れば、兒戲に類するものなるべけれど、當時にありて醫學界を益せしこと甚だ大いなるべし、或は云ふ、彼れは官醫の身を以て斯くの如き不淨の事をなしたりとて、忌諱に觸れて官位を褫はれ、終に伏見に移るの止むなきに至りたりと、蓋し當時斯事なきを保せざれば、確ならず、南谿文集に、祭平四年の作なり、蓋し追祭に關するものなり、今解體發蒙に據りて、天明三年とす。

脚氣に關する醫説は、梶原性全の頓醫抄、長田徳本の梅花無盡藏を始めとして、曲直瀬道三の醫學天正記には、治驗を掲げ、香川太冲の行餘醫言、後藤良山の校正病因考、永富獨嘯菴の漫遊雜記、皆これを論述せるも、未だ彼れの所説の如き創

見なし、彼れはまづ統計的に「脚氣は京都、江戸に多くして他國に病む者甚だ稀れなり」といひて、地方病なることを推考し、「脚氣は王侯貴人に稀れに、又雇夫、下賤、勞働の者に無く、唯江戸にては侯國の武士勤役に來り居る者は最多く、格別身を營まざる商賈にあり、京にても商賈の手代、或は終日坐して動ざる職人、または他邦より來り居る者、書生等に甚だ多し」と論じ、其原因を卑濕に歸して、除濕の法を創りぬ、其法は床下に幅三尺、深二尺許なる空堀を掘り、地形の低き方に水氣の下り去るやうに勾配を附け、其溝の中に茶椀程の石を數多入れ置けば、床下の水濕滴りぬけて濕氣の蒸し昇ること格別に少しといへり、また其療法に向つて轉地を緊要なる療法として唱道せり、脚氣に於ける轉地療法、無二の偉効あることは醫學者の確信する所なり、而してこの療法を始めて世に紹介せしは南嶺の人といふべし。

天明寛政の交、彼れは城南伏見に移り住めることありき、後また京都に還り住みしが如きも、其年月を知らず、按ずるに南嶺詩集に「伏水之梅溪余甚愛之、嘗來住二、今歲己未春、又養痾於此」とあり、己未は寛政十一年なり、然らば其己前に歸住せしに、其居宅は梅山に程近し、春暖の日毎に書生うち具してこれに遊び

ぬ、優游自適自ら和靖に比せり、畢竟梅華仙史の號これによれるか、また常に桃山の觀月臺を賞し、「諸州の名勝を見たれど、かしの如く明媚にして、しかも艶なる風景はなし」とて、折節は杖を曳けり、これより先妻を迎へて女子を設けぬ、四十に今一つ足らぬといふ齡に至りて始めて男子を設く、親の身の嬉しさは早く成長せよかし、やがてなにか教へん、なににすべき、我身ながらいと程遠きことまでも思ひとれるに、はては笑を催して

おのが身の老ゆくことは忘れられて

ひとゝなる子の末をまたるゝ

その子生長して後、春徳といひ、芳緒と稱し、桃仙と號せり。

「天下に漫遊すること前後四度にして都合五年餘、うれより京に歸りても、日夜治療に奔走し、教授に罷勞し、學問の暇なく、著述の功を缺けり、殊に幼少より甚多病にして、瘦たることは主家なき犬の如く、死に近き痾病患ふること四度、時疫傷寒各一度、其外、一月、二月、枕に臥す、輕病は毎年病ざる事もなし」といふは、これ彼れが當時の憾なりしに、この頃より不幸にも喘息に罹りて、月に三度も四度も發作して心を遣り身を働かすることは皆障となれり、さりながら彼れは

勉めて其業を勵み、餘ある暇には筆硯に親みて著述をなしぬ。寛政七年東西遊記を刊行す、これ嘗て彼れが歴遊せるうちに見聞せる奇事異聞の實記なり。その記事皆世人の意外に出るものの多きのみならず、その文章もなだらかに中には義人孝子のことさへ載せて、懇に説き諭す所あれば、普く文士の間にもてなされて、彼の文名江湖に噴噴たりき。彼れ言へらく「何事も趣を解すると解せざるとに其味はあることなり、譬へば杜鵑の聲おもしろしといふものにはあらねど、唯その鳴くおりの夜ふけ雨しめやかなる五月雨の空に、ほのかなる一聲他の音に比すべきものなし。故に昔より杜鵑の聲、鶯の初音よりも人人の待侘ることなり、此境を會せざれば詩も歌も通すべからず」といへり、而して彼れは能くこの趣を會得せり、東西遊記の文は唯ありのまゝを寫して、浮華の迹なし、讀み去り讀み來りて、謂ふ可らざる妙味を感ずる所以は、蓋し能くこの趣を解してこれを草せしによるのみ、彼れ詩あり。

答 人

子問 我所好、我有煙霞病、山水常探勝、不與世人匹、興來時言志、草々役紙筆、漫做白氏風、何守明人律、世人誇虛文、我獨重忠實、大志丈夫事、小技非所必、請看

楊子雲、草立背漢室。

彼れは飽くまで興學にはた忠實を旨としけり。寛政九年、東遊記續篇刊行せられ、翌十年、西游記續篇刊行せられぬ。かくて猶は東遊記三篇を世に出さんとし、また其間に醫書の著述世に出さざるもの巻を重ねたり。彼れ著述に心を勞すれば、宿痾愈々彼れを苦しめり、今は止むなく仕を辭して、薙髮す。時に四十四歳なりき。これより後は著述は素より、詩歌俳諧に至るまで、かりゆめにも思ひを費やし、筆硯にたづさはること、聊もあづからざるやうになしぬ。されども猶は多年の心勞を以て草し置ける醫書の稿本の半成りかゝりたるが、常に心に忘れ難く覺えて、見るにつきて憾みの種子となれば、銳意其稿五十卷を加茂川原に齎らし行きて、火をかけて焼きすて、消え残る一片の灰に心安じて、「我身の病息に沈めるをも陰陽の妙用を論し極めて、餘りに天地の秘を洩せる事を初めて知りて、この草稿を焼たる後は心にかゝる事なく、何となくのせやかにて、ながく其後は嚙さも漸く軽くなりぬ」といへり。その後、單に醫を以て業となして、只管餘生を養ふことを勉めぬ。されども暇あれば猶は帷を垂れて醫書を講じき。



彼れは文化三年四月十日を以て卒しぬ、齡五十三、私に諡して南谿院陽岳義明といふ、洛東黒谷金戒光明寺光一に云に葬りぬ、六子ありて長男は即ち春徳なり、近江の三谷樸に學び業を繼ぎて醫となる、次は要人として水口氏を嗣ぎ、春素また好素と稱し、同じく醫を業とす、長女は伶人東儀氏に嫁ぎしが、後剃髮して尼となり、清水の地藏堂に居りしと聞く、二女は九條家の士田村氏に嫁ぎしといへり、餘の二子は天せしかば、今にては男女さへ定かならず、南谿著述する所前に掲ぐるもの、外に、傷寒論文例、同字譯、本草通玄、五臟通言、解屍運力法、雜病紀聞、橋氏醫話、藥量考、讀産論、方意辨、度量考、辨意、漢語律呂考、北窓瑣談、薩州孝子傳、詩文集等ありき、彼れ常に老子を愛讀し、自らこれに註解を加へて一本となす、名けて老子和字解といふ、常に一生その『成而不恃、生而不有』といふ句を守り、予が生涯の趣向これにありとて、『この句を守れば其功にも誇らず、功に誇らざれば人の恨を買ふこともさし、自然に志も大になり、勤も怠らぬやうになるなり、この句の功德甚だ大なり、後世に同志の人あらば味へ考ふべし』といへり、彼れは能くこの語に養成せられて、またこの語の人たるを得たり。

### 東西遊記序

史遷か跡を追て、名山大川を探るは、丈夫のしわざなるへし、しかはあれど官ある人は身を意にまかせず、處士は路費にとほし、いかにともすへからすと、なむ謝肇淛かなけさはさることなり、はた是れにくはふるにいとかたきことなにかす、あるへき、まづ心剛に身健ならされは、あたはず、舊記をしらされは、勝地の感なし、文筆にともしければ、録すへからず、かく取あつむるとのかなはねはにや、こゝにはさる人もしるせる文もいとまれなり、むかし郡縣の政なりし代、國々の守掾などにてくたれりし人々、歌よみしたる所には、名所として今も聞ゆれど、時うつりて、ありしにもあらぬか多く、國々の風土記といへるも、大かたにはろひたれば、其由もまたしられず、中頃に能因、西行の兩法師など、ころけしかるさかいへも執行せられぬと聞ゆれど、記行こまやかならず、後には宗祇法師あれど、是も名たる所斗をあら、しるされたれば、其けしきさへ明らかならず、まして土風人情をや、はつかに熊野山中の小兒か米をしらす、越路の雪に妖怪のあらはれしなどいへる、たぐひのみは、僻境のおもひさをしるのよしに

はありける。こゝに此西東遊記は橋君子の著す所にして、其質かのかたきこと  
いもをかね備へて、危を犯し、險を凌ぎ、年月を重ね、實をもて録するところなり。  
其勇其志感ずるにあまりあり、はた仁義を基とせる物から、所々忠孝の人の  
行狀を記し、政の善惡をもおもはしむるは、一言半句の間にも人を勸るの微意  
みゆるなん、世に稀有なる書といふへし、さるにある人のいふ、此君子、人のため  
になるはよし、自かへりみるにはいかに、其山川跋涉の間、幾たひか死地に入ら  
れたりしは、王陽かにくむ所、命を失するものは巖墻のもとにたゞさるのいまし  
めにもたかへりと、予いふ、然りしかれども、志とてあるものは、またかゝらて  
は其志成へからず、孔夫子の宋に窘、陳蔡に厄し給ひしも、みちを天下に施しつ  
らん、の志によりてなり、佛徒にしては、玄奘三藏のとき、流砂の難を犯されけ  
るに、こゝ其願はなりけらし、今橋君も其身をわすれて、醫療の術を極め、ひろく  
世を救ひ、遠く後にはとこさんの志なれば、其間には北方の強もましるへけれ  
ど、其過はみつからしりて、門生の詩にも感悟せられたれば、他の口を入へから  
ず、およそ此筆記を得て、居ながら千里の外をしるは、又なきたまものならず  
や、まいておのれは若きより遠遊のねかひはありながら、其かたはしにも及ば

て、今はいたつらに頭の霜を重ね、闇の埋火をたのひのみなれば、わきて此記に  
心酔せりと、なんこたへ侍りきつひにこれをしるして、橋君によせ侍るは、序と  
もなりなましや。

閑田子蒿蹊

### 東西遊記

#### 凡例

一予醫學修行の爲に漫遊する事前後合せて五年、東西南北到らざる所なし。然るに此書唯東西遊記と名付るものは、京を日本の中央とし、二つに分ちて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一予が漫遊もと醫學の爲なれば、醫事にかゝれるとは雑談といへども別に記録して同志の人にも示す。唯此書は旅中見聞せる事を、筆のついでにしてせるものにして、強て其事の虚實を正さず、誤りしるせる事も多かるへし。見る人其杜撰をどがむるとなかれ。

一此書中にしるせる事、其事くにつて思ひ考ふることも多けれとも、むむと此書中には愚按を加へず、議論取捨は見る人の心にあるへし。

### 南 谿 誌

### 標註西遊記目錄

#### 壹の卷

- 一 槍垣女……………一頁 一 牛の生皮……………二頁
- 一 椶木の大蛇……………三頁 一 猪の狩倉の大蛇……………四頁
- 一 琵琶の妙手……………五頁 一 知らぬ火……………九頁
- 一 權馬……………一五頁 一 石敢當……………一八頁

#### 貳の卷

- 一 冷暖玉……………二〇頁 一 孔明の陣太鼓……………二四頁
- 一 飯野の風穴……………二五頁 一 康頼夫婦對面……………二九頁
- 一 鼉龍……………三二頁 一 十六日櫻……………三三頁
- 一 魂祭り……………三四頁 一 波り鶴……………三五頁
- 一 獺犬……………三七頁

#### 三の卷

- 一 長江の旅泊……………三九頁 一 山女……………四一頁

一 求麻川 ..... 四二頁 一 龍門の瀧 ..... 四五頁  
 一 山童 ..... 四七頁 一 玳瑁 ..... 四八頁  
 一 一足鳥 ..... 四九頁 一 麝香鼠 ..... 五二頁  
 一 壽夭 ..... 五三頁 一 神樂 ..... 五四頁  
 一 いろは ..... 五八頁

四の巻

一 篤實 ..... 六〇頁 一 仙人 ..... 六四頁  
 一 孝行 ..... 六六頁 一 流人 ..... 七一頁  
 一 阿蘇山 ..... 七四頁 一 仁斯至 ..... 七七頁  
 一 奴僕 ..... 八〇頁

五の巻

一 天の逆鋒 ..... 八五頁 一 目鏡橋 ..... 九三頁  
 一 家猪 ..... 九四頁 一 地獄 ..... 九五頁  
 一 東海氏の墓 ..... 九七頁 一 清正公 ..... 九八頁  
 一 山沙 ..... 一〇〇頁 一 與次兵衛か瀬 ..... 一〇二頁

一 景清か母 ..... 一〇三頁 一 卓子 ..... 一〇四頁

一 鐘乳穴 ..... 一〇六頁

標註西遊記目錄終

標註西遊記續篇目錄

一之卷

- 一 碑文……………一〇一頁 一吹上の濱……………一〇三頁
- 一 ヲガ島……………一〇六頁 一古朴……………一〇八頁
- 一 曾根松……………一〇九頁 一小田の木佛……………一一四頁
- 一 扶桑木……………一二四頁

二之卷

- 一 熊膽……………一二八頁 一鷓鴣……………一三〇頁
- 一 孟宗竹……………一三一頁 一五ヶ邑……………一三五頁
- 一 毀譽……………一三八頁 一流れ物……………一四〇頁
- 一 龍鏡を愛す……………一四一頁

三之卷

- 一 嬉し野……………一四九頁 一鼠島……………一五一頁
- 一 徐福……………一五二頁 一陽氣……………一五六頁

四之卷

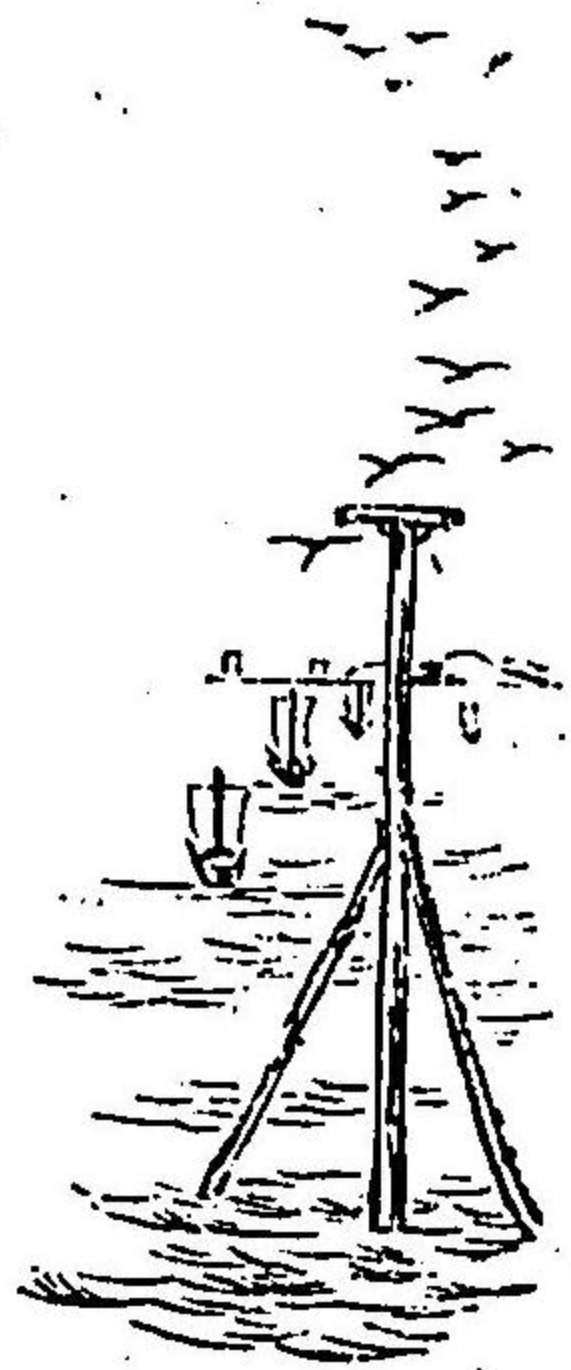
- 一 濁り酒……………一五七頁 一姥ヶ嶽……………一五八頁
- 一 牛合……………一五九頁 一餓饑……………一六二頁
- 一 隠戸の瀬戸……………一六六頁 一鍛冶祐定……………一六七頁
- 一 那智の瀑布……………一七〇頁 一桂林……………一七二頁
- 一 出来島……………一七三頁 一肥後の毒水……………一七五頁
- 一 豆腐怪……………一七八頁 一高麗の子孫……………一七九頁
- 一 龍の玉……………一八三頁 一那須……………一八七頁
- 一 海水増減……………一八八頁

五之卷

- 一 楓樹……………一九二頁 一唐畫の櫻……………一九二頁
- 一 綱引……………一九三頁 一産婦……………一九六頁
- 一 奇器……………一九九頁 一劔の舞……………二〇六頁

標註西遊記目錄續篇終

單身探勝  
氣殊雄  
一片布帆  
揚海風  
無限雲山  
迎我出  
丹霞紅葉  
夕陽中  
將遊霧嶋山解  
縹鹿城之作  
南谿



西遊記卷之壹

檜垣女

南谿子著

○天明癸卯 天明  
○三年 天明  
○國 田郡 岩戸  
○山 觀音寺 寶華  
○洞 觀音の石像 四  
○船 安座し本尊と  
○の 檜垣の保登船  
○事 薩日隅地理  
○考 詳に見ゆ  
○物 盛りに速ふ器  
○檜垣女 自作の像  
○南谿 著北窓瑣談  
○に 其圖を載せて云  
○垣 居の上人にて  
○の 女の圖見せたり  
○り 餘年前に衣紋  
○異 像にて袖長  
○後 方の袖長  
○開 物しれる人  
○其 詞の如く成語  
○ら 余は實に後世  
○偽 作ならざるもの  
○詳 ならざるもの  
○ら 人か 熊本の  
○時 習館 熊本の  
○藩 主細川重賢二年  
○臣 命細川重賢二年  
○所 命細川重賢二年

天明癸卯の春、肥後國岩戸の觀音の巖窟の中に、或人願ひの事有りて五百羅漢を石もて彫刻て安置せしに、其事やうく成就して、猶窟の額にも安置せばやど人とはかりしかど、たやすくもいたり通ふへき所ならねば、石工をふとといふ物に入れて、繩もて山の峰より釣り下して辛うして其額に至り、岩をゑりうがちたりしに、一所やはらかかりしかは、いふかしくて、くはしく見るに石の筐一つを埋たり、どりいたして人々集り開きみるに、内に一重の石筐有り、其蓋に檜垣女形自作といふ六字を彫付たり、蓋をひらけは、小き像を入れたり、像は陶器のやうにも見ゆ、わたくしには、からふへきに非ずとて、熊本の官府にもて出づすなはち時習館に下したまふ館の學士打集りて、其事を書記し、且其像を摹寫し、石にゑり紙に寫し、そこへもてはやしぬ、其頭予も熊本にありしに、人々より此物語を聞侍りしかは、其圖をこひ得て、都のつととはなしぬ、此檜垣の女







○琵琶法師琵琶を弾じて平家物語を語る盲人  
 ○喜多村信節云、一種盲人琵琶を鼓し地神を誦して地神を祭る、佛説地神經一卷あり、部俗の文字にして藏中になきものといへり、この覆被をなすものを今は琵琶法師と呼ぶ當道の替者は賤しめて部類を異にする者あり、古へびは法師といふはすべては彈て平家かたる者なふなり、賤きびは法師も古くありしなるべし、直幹申文の書卷に地上に鼓を敷て居りびはを彈て錢乞ふさまの盲人をかきたり(嬉遊笑覽卷六)  
 ○池田甚兵衛 北原東談に云、寛政

ちどもいふへし、只此二種あれども遊ふ人稀にして感ずる人も又稀れなり、俗間には絶てなし、九州には琵琶法師といふもの夥敷有りて琵琶を弾し、路頭に立て米をもらふ、其うた其律かまびすしくして聞に堪へず、又琵琶は地神經をひく三味線法師などのいやしき者によはひすへきものにあらずなど、おこかましくいひのしりて窺赦するも有り、薩摩大隅の二國もつとも多し、されど此二州なるは他國とは大に異なり、其形も平家琵琶などよりはちいさく、撥は黄楊木にて作り、甚大にして扇をひらけるかとし、年若き武士皆琵琶をもて遊ぶ、彼二州は名たゝる勇猛の風あるに裾高くかゝげ、長き刀を十文字に横たへたる荒おのこの夜なく、琵琶ひきありく其風情おもひやるへし、其調正しく其うた雅にして他の國の琵琶とは似もよらず、殊に大隅國には池田甚兵衛といふ人有りて當時第一の名人なるよし、夜ふけ月清きに獨り琵琶を弾すれば浦千鳥集り來ると常のとなりと聞に、其人ゆかしくて彼地に尋いたり見るに始羅郡の砂清き浦にはどりして茅の軒端物さひしく住なせり、かくといひ入るればとく迎へ入れて相見る、其人むとじにあまりて温潤の質なり、打つけに琵琶のぞみたれば、遠くたつね來りしにかんせしにや、又好める道ゆへにや、

十年戊午の年正月、大隅國の人池田甚兵衛上京して、余の家逗留し、余が爲めに木の下の琵琶を寫して新に琵琶一面を作り附らる、始て都に登り造りたりとて其琵琶の銘を美耶古と名付し、余の家を賣す  
 ○始羅郡 は始羅郡なり  
 ○但馬守 は平經正のことなり、經正は平經盛の子にして皇后宮亮但馬守となり、正四位下に進む、竹生島辨財天の社前に琵琶を彈せしこ平家物語に載せたり  
 ○竹生島 近江の琵琶湖中の一島にして周囲二十六町餘、中に都久夫須摩神社あり、所謂辨財天の祠なり

いなめる色もなく木の下といふ名器を取出して、ひとつふたつ彈せり、其たへなる事はさらにもいはず、誠にいにしへ但馬守など堪能の名を得て水神も感せしなどいふを、今の京都の琵琶に思ひくらべてはいふかしく疑しかりけるか、今日此國の琵琶を聞てはしめて水神の感せしも理りなりと覺へ、年ころのうたかひは皆はれにき、京都のむかしの聲は皆此あたりに傳り残りて、今にてはかへつて京都はむかしの聲たへたりどころしらるれ、又過し年江州竹生島に詣でし時、經正の彈玉ひし琵琶の撥ありとて見侍りしか、水牛にて造り、本のかたはくりて末は三味線の撥のとく廣さ縦に貳三寸には過さりし、此國の撥とは天壤の相違なり、竹生島にあるは後世の偽物なるへしやとをもふ、予もあまりめつらしさに撥壹つ求得て都のつとに持歸り、人に見すれば皆目を驚せり、又鹿兒島にありし時、森本見流なる人の家に招かれ、種々馳走の上賓生といへる法師をよびて琵琶をひかせり、遠近五倫花の香、小町玉章似我、墨繪、老曾の森、鴛鴦の夢などいふうた數く、ひけり、先其うたの名も雅にして其章もまた古めかし、其音のひさきは春の鳥の霞の中に囀るかとかく、谷の清水の岩ほにむせふに似たり、其しらべ高きは冬の嵐の枯残る松に渡るかとし、京都などにて

○琵琶行 白氏文  
 集卷十二に載す  
 ○伊東大友 共に  
 九州の豪族にして  
 伊東氏は源頼朝伊  
 東祐時を兒湯郡都  
 於郷の守護せし  
 より其子孫この地  
 の豪族となれり  
 天正の頃島津氏に  
 合併せらる、大友  
 氏は源頼朝大友能  
 直を豊後の守護と  
 せしよりこの地の  
 豪族となる、其裔  
 大友義鎮に至りて  
 其勢愈熾となり、  
 其子義統島津氏と  
 戦つて大に敗らる  
 ○繁手 琵琶の手  
 の細密やかなるこ  
 とあり  
 ○しらぬ火 中島  
 廣足の不知火考あ  
 り、この章と對照  
 すべし  
 ○筑紫の海 筑紫  
 前筑後肥後の三州  
 に亘る内海なり、



聞つる平家琵琶などには似もよらす、彼白樂天か琵琶行はしめて思ひ合せり、  
 又崩といふものあり、是は薩州のむかし伊東大友など、合戦の事を語るにて、  
 其聲もはげしく琵琶の手も繁手なり、はしめのうたとは格別に異なるものな  
 り、もつとも是は新ら敷聞ゆはしめのうた誠にめづらしく覺へて只京都に此  
 聲無き事の口おしければ、予も一つふたつ習ひ歸りて、京都にも傳へんとおも  
 ひしかど、誠にむつかしく、たやすく習ひ得へくもあらねは、残り多かりしをも  
 だしぬ、此夜の雅興すてかたくて別に琵琶行一篇を作りて日記にしるせり、又  
 彼うたの章をも書寫して歸りぬ、のぼりての世の事に心あらん人は、彼琵琶京  
 都にも傳へよかしと思ふのみ。

しらぬ火

筑紫の海に出るしらぬ火は例年七月晦日の夜なり、むかしより世に名高き事  
 にて、今も九州の地にては諸國より此夜は集り來りて見る事なり、京都の人に  
 見る事のすくなきは、盆後のゆへなるへし、京より九州に下る人々も多くは皆  
 商人の類なれば、盆前に京都へ歸るやふにのほり來り、又下る時も京都にて盆



○鱧 天草の近海  
此魚の名産なり  
○惣象 前に見ゆ  
○熊本 肥後國飽田郡に屬す、細川氏の城市、今市たり  
○宇土、八代 前に見ゆ  
○日奈久 肥後國  
○鼠島、大島、三つ島 肥後國志界  
○八代郡(八代郡)島嶼多し、三つ島(八代南西大小三つ)大島(城西同ヶ大山)ノ如シ島中宏々入江馬冷多シト云所ニシテあり、鼠島のこゝは標編三の巻に詳なり  
○鼠島 明ならず

る。右の方は波打際所廣く、砂子の清き事霜を置くがとくなれば、いざや此所に  
て船しばしといへば、やがて渚に船さし付て碇おろす。船頭いふは此濱邊には  
ちいさき蛸多し、おり立て取り玉へといふに、潮は淺し砂は清し、皆々おりて蛸  
見ありく。田舎には珍らしからぬ事も、京都に住る身はいと心あぐさめり。船頭  
は例の銚打かたげつゝ、船さし行しか、程さく二尺に近き鱧壹つ突得て歸れり。  
取あへず料理て煮る鮮けくして味の美なるとさらにもいはずや、時移りぬ  
れは船さし出していそぐに、暮近きに天草の惣象といふ所にいたる。此所は少  
し民家あり、多くは漁夫なり。此村にあかりて、しらぬ火見る所の案内を頼みし  
に、百姓一人心よううけあひて、いたくけかれぬ。進一枚携へ、先に立てのぼる。東  
の海の岸にさし出たる山あり、高さ七八丁もや有らん。此あたりにての高山な  
るか此峯よろしと進打敷て座す。真向ふに肥後國有りて唯一望につくす。宇土  
熊本は少し左に見へたり。右に日奈久、向ふに八代、其間の海上わたり五六里に  
過ぎす。南北は入海數十里にして、其限り見へず。案内の人指さして右なるは鼠  
島なり。左は大島なり。それは三つの島、これは幾島と數く、おしゆげに海上三  
里ばかりに、いとちいさく島く、見ゆ。しらぬ火はいづれに出るやと問ふに、島

○松ぞもあかして  
割松なごを燃やして  
明させしなり  
○夜陰 深夜のこ  
○小夜風 夜風さ  
いふに同じ  
○八ッ 今の午前  
二時の頃  
○菊阿古涼の諸國  
里人談卷三に云、  
豊後國宮古郡甲浦  
の後の森より挑灯  
の如き火初更のこ  
ろより出る。また  
松山よりひさつた  
火いて、空中にて  
行合ひ、戦ふこと  
くにして少時捨あ  
ひて後出たる所の  
山森に入るなり。  
四五月八九月にか  
ならずあり、これ  
を筑紫のまらぬ火  
といふなり、その  
かみよりありて來  
歴まれず、日本第  
一の妙火なり、今  
筑紫のまらぬ火

々見ゆるあたりといふ。初の程は人里も遠くいど物凄き島山なりしか、追々に  
知らぬ火見物の人々出來りて數十人に及ふ。皆此近國より二日路三日路をも  
來りて見物する人々なり。程なく海の面もや、夕煙引渡して人顔もさだかな  
らねは、所々松ぞもあかして酒など取出し、思ひく、小唄、淨留理、太鼓、三味  
線、或は謠狂言など各藝を盡して戯れ遊ぶ。夜陰の事なれば誰とはしれず、殊に  
諸方より集りたる事なれば遠慮はなし、彼座に登り、此進に連り、隔なくむつび  
かたろふ事、有馬、但馬など温泉の場、の交のとし、今年は例よりは殘暑も強けれ  
ど、かゝる海邊の高山に殊に空は心よく晴たり。小夜風をもひろに吹ていと涼  
しければ夜の更るもしらすは、や夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし。今  
年はしめて見る人は今宵はいかなる事う知らぬ火は出ざるや、但しはそらと  
なりやなど口々にいふ。予もあやしみ居たりしか、八ッ近きころに遙向ふに波を  
離れて赤き色の火壹つ見ゆ。暫して其火左右にわかれて三つになるやうに見へし  
が、うれより追々に出る程に、海上竟り四五里はかりか間に百千の數をしらす、  
明かなるあり、幽なるあり、滅るあり、燃る有、高き有、低き有、誠に甚見事にして目  
ををせろかせり。其火の色皆赤くして、燈燈の火を遠くのそむかとし、たどへは

○大阪の天神祭  
大阪の天神祭は、  
天満天神の御祭に  
して七月廿五日祭  
禮を執行す。大阪  
第一の殷合なり。

○火の前、火の後  
景行紀云、十七年  
五月壬辰朔、從二  
北一發、船到二火  
國、於是日、夜、  
岸、遙見、知、著、  
皇詔、扶沙者、一  
直指、二火處、一  
火往、之、即得、  
著、火、處、一、何、  
也、火、國、對、何、  
代、縣、對、亦、入、  
其、火、是、誰、人、  
主、然、而、不、得、  
火、之、故、名、其、國、  
曰、火、國、一、又、高、  
田、與、清、の、國、名、考、火、  
國、を、い、ふ、條、に、云、  
知、二、在、何、世、一、然、而、  
火、の、國、名、始、見、二、神、  
功、紀、一、肥、後、國、之、名、  
見、二、千、餘、明、紀、一、  
依、三、其、取、二、好、字、一、也、

○權馬、栗田寛云、  
權馬、に、見、當、ら、ず、  
揚、馬、の、説、に、は、あ、  
ら、る、形、似、た、る、に、  
さ、る、心、得、た、る、に、  
あ、ら、ん、揚、馬、の、字、  
は、昔、鏡、寛、元、四、年、  
八、月、十、五、日、の、條、  
也、云、く、將、軍、家、放、  
出、之、儀、一、云、云、十、  
六、日、の、條、に、同、馬、  
六、日、也、揚、馬、と、  
射、手、十、人、云、云、  
文、治、五、年、四、月、三、  
日、の、條、に、云、權、  
二、品、御、參、宮、馬、長、  
十、騎、流、鏑、馬、十、五、  
騎、流、鏑、馬、三、番、さ、  
り、に、ア、ゲ、ム、長、の、  
三、月、三、日、の、條、に、  
阿、宮、法、會、云、云、  
時、流、鏑、馬、十、騎、  
撰、流、鏑、馬、十、騎、  
て、六、番、さ、り、假、  
名、に、ア、ゲ、ム、長、の、  
あ、り、に、ア、ゲ、ム、長、  
は、こ、の、ア、ゲ、ム、長、  
の、こ、の、邊、に、遠、れ、  
す、い、の、邊、に、遠、れ、  
す、い、の、邊、に、遠、れ、  
す、い、の、邊、に、遠、れ、

○大坂の天神祭りを夥數集て見に異ならず、實に諸國より來り見るもいたつらならず。所の人に問ふに年によりて多きとも少き事も定らずと云。今年はずぐれて多く出たるも予か幸ひといふへし。廣き海中に出る事なれば天草に限らず。肥後地よりも、何れの浦にても皆よくみゆるなり。しかれどもいかなるわけにや。高山にのほる程多く見事に見ゆるとて、此山なども群集せるなり。此夜は此あたりの者海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、おろれみて渡海の船を禁んず。獵船といへども此一夜は乗る事なし。過し年肥後の士ひそかに小舟に乗りて彼火の出る所にいたりみるに、只其火前後に遠くありて我船近くは一つもみへさりしとぞ。予も今宵まのあたり見しかど、いかなる火といふ事をしるへからず。むかしの人の知らぬ火と名付置しももつとも、の事と覺ゆし。唐土には祇江の神燈と是に似たる事もありとぞ。扱夜明るまでかくのとくにし、旭出れば火の光り漸く、に薄く成り行て星ととも、消滅す。むかし火の前の肥後と改られしとぞ。又和歌の言葉などにもしらぬ火の筑紫など書り。九州に遊ん人はかならず此折を考て行へきとなり。

權馬

薩州日州の邊は都遠ければ、却て古代の風残れる事多し。諸所の神社に權馬といふとあり。權馬といふ名目東鑑にも見へたりとぞ。其權馬といふ事いかなる事と所の人に問ふに、何にても心願ある人、其思ひ崇ふ所の神社に權馬を奉るといふ。其式小荷駄馬、野飼馬を不撰數十百疋取集め、鞍あぶみ皆具して其上に幣を切かけ、口取の者、馬一疋に三人程つゝ、付て、皆白衣に禪かけ、神樂の太鼓を相圖に其馬を一度に追立、鳥井前より拜殿を廻る事三遍、數十百の馬、數百人の口取いやが上に折重り、我先にと一同に押廻る。其間神樂を頻りに奉る太鼓の響、人馬の聲、夥敷して一村に震ふ事なり。此事済て流鏑馬を始む、いといさましめて古風なる事なり。其流鏑馬、競馬などといふ事も近世上方には稀なる事なり。此邊には諸神社皆あり。殊更日向の宮崎郡下北方村にある神武天皇の宮に行ふ流鏑馬、競馬は最嚴重なり。其地方七八丁計平地にして古松森々と生ひ茂り、無双の境内なり。宮居は中央に東向に立玉ふ。馬場は宮居の南北に開きて幅十五六間計、長貳百間に餘れり。北より南へ向ひて乗る事なり。例年九月廿七



物を行へり、その  
こゝを記せるもの  
林春齊の犬追物御  
覽記あり

○石敢當 石敢當  
の石本は帝國博物  
館にも蔵せられ集  
古十種の中にもみ  
ゆ、桂林、漢口、五  
代劉智遠、晉、押  
衛、帝出奔、遇、手、衝  
州、智遠、道、三、力、士  
石敢當、神、三、織  
入、石敢當、格、圍、而  
死、智遠、格、圍、而  
左、右、石敢當、生、平  
凡、橋、路、衝、要、之、處、  
必、以、石、刻、其、形、  
民、居、其、下、以、避、  
曰、鎮、安、年、一、武  
臣、鎮、安、年、一、武  
路、三、又、口、埋、泥、

塗百戰身、洞挂承  
陪、問、三、葉、一、玉、關  
守、禦、老、三、紅、塵、  
見、驚、英、雄、來、往、人、  
此、說、ニ、テ、明、ナ、リ、  
等、の、書、に、も、問、々、  
卷、上、(、與、田、好、話、  
鮮、人、南、時、等、の、問、  
答、)ニ、云、徐、氏、筆、  
一、以、爲、石、敢、當、事、  
一、石、氏、而、所、製、  
一、以、爲、三、人、姓、名、  
一、貴、國、亦、堅、此、石、  
一、碑、一、邪、(、仙、樓、)元、  
一、繼、の、號、)石、敢、當、二、  
一、說、古、猶、未、詳、解、邦、  
一、無、三、此、事、僕、何、答、  
一、龍、淵、(、朝、鮮、書、記、室、  
一、成、大、中、の、號、)

たる事なり。中土には土地狭く牧といふものもなく、野飼の馬も稀にて、かゝる  
兵馬訓練もなし。人皆かしこけれども年々柔弱の風に移るとなるに、邊土は物  
事れろかなる代りには、又かく古風なる事もありて、治世は武を不忘、聖人の教  
にもかなへるわさも多かりけり。

### 石敢當

薩州鹿兒島城下町々の行當り、或は辻街などには、必其高さ三四尺斗なる石碑  
あり、石敢當といふ文字を彫付たり。いかなるゆへると所の人に問ふに、昔より  
致し來れる事にて、いかあるゆへといふ事を知らずといふ。後に輟耕録を見し  
に此事出たり、其文曰、今人家正門、適當巷陌橋道之衝、立一小石將軍、或植一小石  
碑、飾其上曰石敢當云。薩州は日本の極西南に在りて、唐土に近く、むかしは船  
の往來も自由なりしかば、彼地にてかやうの事を見及ひ來りて、此地に作り置  
しにや、又田畠の中に石にて衣冠の像を彫りて居へたり。田夫に問へば、田の神  
なりといふ。是も彼の輟耕録に見へたる石將軍の類にして、日本の衣冠の像に  
作りたるものにて、皆他國にては見ざる物なり。伊勢赤どには、石を將基の駒の

形に作りて山神と彫付て村里の出口には必あり。是も他國にはあまり多く見  
ざるものなり。石敢當は京高辻天滿宮の社前に昔はありしといひし人あり、今  
はなし。

### 西遊記卷之一終

標註西遊記卷之壹

石敢當









ゆ、また伊勢國邊のあたりにもある由きく

けしに、其走る事風のとくすみやかにして、逸物の獵犬なりしかど、追付かねて見へしが、どある山さわにいたり鹿犬どもに見うしきひ、いかに尋れどもさうに見へず、聲のかきり犬を呼しかど、ついにかへり來らず、大右衛門大に怪しみ、日暮てまて草をわけて、たつねさかせしかど、たつね得ずして、むなしく家に歸りぬ。年久敷飼置し寵愛の犬なれば、行衛しれすとて扱置へきにもあらず、殊に又大右衛門こそ鹿に犬をとられしと人に指さしれんと、口おしきわさなりとおもひめぐらすに、其夜もいね得ず、明日をおそしと再び飯野にいたりて、又たつね求めども、いつくをうれといふへきたよりもなければ、唯茫然としてあきれ居たりしかど、つくつくとおもへば、此見渡し廣き野原にて見うしなふへきやうやあらん、唯いふかしきは此風穴の中より、鹿の迹入りしにしたかいて、我犬の追ひ入りしならん、さあらはいかなるあやしき事かありて、我犬の害にあひしもはかり難しいで、此穴に入りて實否を見と、けんものと思ひ、いそぎ家に歸り、繩よ松明よと、しきりに穴に入るべき用意をなす。妻子朋友此体を見て大に驚き、むかしより底のしれさる彼風穴、いかなる變事あらんもはかりかたし、纒に一疋の犬のために此身を輕んずる事ひが事なりと、口々に諫め、妻子な



とは泣沈みて留しかど、大右衛門さらに聞入れず、皆く〜にいとまこひをなし、  
 て、彼風穴におもむきぬ。せひなくも皆々従ひ行ぬ。大右衛門は腰に細引の綱を  
 付、覺ある一腰を帯し、左の手に松明をともし、もし穴の底より此綱を引かは、  
 急に上に引あぐべしと約束して、つひに穴の中に入にける。すぐさまに下る  
 所も有り、又斜に行所も有りて、やゝ深く下る程に、地やはらかにて綿のとく、平  
 なる所にいたり付ぬ。松明を以てこれを見れば、木葉落入りて年久敷なり、朽た  
 るか積りて、かくやはらかなるなりけり。此所より奥は穴少し細く成りて、左右  
 にわかれたり。いつれの方にか入るへきと、地に耳を付て聞試るに、左の方の穴  
 の底と聞へて、かすかに犬の鳴やうに聞ゆ。さらはとて左の穴に入る。其深き事  
 限りなし。漸々に入るにしたかひて、犬の聲たしかに聞ゆるにぞ、悦ひいさみて  
 いそぎ下る程に、其犬大右衛門か駈に飛付けり。是我主人の來るを知て力を得  
 て悦へるなり。其所に落付て見るに、我犬は恙なし、其地しはらく平にして、向ふ  
 には大河流れり。怪敷ものあらは出來れど、怒りのしりしかど、答ふるものも  
 無れば、久敷居るにもあらずとて、犬を抱、やう〜に匂ひのぼる。千辛萬苦して、  
 やう〜もとの二道にわかれたる木葉ふりしきし所まで歸り上りぬ。此所よ

りは道急にしてのほりかたければ、下け置し綱に犬をからめ付て、其綱を下よ  
 り引動かせしかば、上には待もうけたる事なれば、いろき手ん手に綱をたぐり  
 あげしに、犬ばかりを引あげたり。驚きあやしめど、此犬かく上り來るからは、大  
 右衛門も恙なしとさとりて、又綱を下しやりぬ。今あげたりし犬又しきりに穴  
 に飛入らんとするを、人々繩もてさひしくからめ付て入れず。此犬主人のいま  
 だ上り來らざるを以て氣遣ひて、又穴の内に入らんとせしなり。大右衛門も綱  
 の下り來るを見て、みづから腰をからみて引動かせしに、人々悦ひいそぎ引あ  
 けて、再び死せるもの、よみかへれる心地して、恙なかりしを悦あへり。鹿の行  
 末はつゐにしれす。うたかふらくは此穴の内住所なれば、逃入りしを、犬の追ひ  
 入りしにや、大河より奥は犬も翼なければいたり得ずして、残りりと見へたり。  
 犬よくものいはば、其時のやうすもしるへきにと、人々おしみあへり。すべて薩  
 州領の人はかくのとく死生をかへり見す、勇猛の氣諸國に勝れたり。

康頼夫婦對面

○宮内正八幡 今

大隅國宮内正八幡は、大社にして、宮殿いと美々敷靈驗もいちしるしくて、たう

標註西遊記卷之二

康頼夫婦對面

二十九



予か長崎に遊し頃は龍龍既に死せし跡にて見ざりき。本草綱目には、だりやう長一丈に及ふものは、氣を吐て雲を起し雨を致すといへり。さも有ぬへく覺ゆ。

十六日櫻

伊豫國松山の城下に北の山越といふ所あり。此所に十六日櫻とて、毎年正月十六日には此さくら満開して見事なり。松山より花見とて貴賤群集す。寒氣面をろぎ餘雪梢を封する頃に、此さくらのみ花香めでたく咲出れば、遠近の人どもにもてはやして、殊に其名高し。過し年、先太守より和歌の御師範、京都の冷泉家へ此花を贈り玉ひし事あり。其時冷泉殿より御返事の御和歌あり。

十六日さくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく驚くばかりの初花櫻の花になん。

賞翫の辭

さゑのころ	雪かど見れば	年々に	む月半に
さくといふ	初花櫻	はつ春の	柳の木のみ
うれもまだ	色別るむる	ころにはや	若葉催し

はころふを 散さぬ風の たよりもて 心有人に

見せはやと 折こせはこそ けふ見ろめつれ

反歌

初春の初花櫻めつらしき、都の梅のさかりにる見る

猶此外に都鄙の詩人、歌人、俳人など、見る人々に吟詠して賞翫す。予か彼國に遊ひしは四月の頃なりしかは、花の時におくれて見ざりき。残り多き事なり。彼國の人に此櫻の由來を聞に、むかし山越の里に老人有けるか、年殊に老て其上重き病にふし、頼みすくなくなりけるに、只此谷の櫻に先立て花をを見すして死になん事のみをなげきて、今一たひ花を見て死しなは、浮世に思ひのこす事もあらじなど、せちに聞へければ、其子かなしみなげきて、此櫻の木の本に行て、何とぞ我父の死し給はさる前に、花を咲せ給はれど、誠の心をつくして天地にいのり願ひけるに、其孝心鬼神もかんし給ひけん、一夜の間に花咲亂れ、わたかも三月の頃のとくなりけり。此祈りける日、正月十六日なりければ、其後は今の世にいたるまでも、猶正月十六日に咲けるありとぞ、其由來も又正しかりぬ。又伊勢國白子といふに、子安の觀音とて名高き寺あり。其寺内に不斷櫻とて常に花

○十六日櫻 愛媛縣松山にあり。毎年正月十六日に開花す。此花は、冷泉殿より御返事の御和歌あり。十六日さくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく驚くばかりの初花櫻の花になん。

○不斷櫻 伊勢國白子にあり。毎年正月十六日に開花す。此花は、冷泉殿より御返事の御和歌あり。十六日さくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく驚くばかりの初花櫻の花になん。

○不斷櫻 伊勢國白子にあり。毎年正月十六日に開花す。此花は、冷泉殿より御返事の御和歌あり。十六日さくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく驚くばかりの初花櫻の花になん。







すれども、犬同士咬合ふ事無く、互に助合て山を働くなり。是向ふに猪鹿といふ敵あるゆへに、犬ども皆一致の味方に成りて中よき事とぞ。是に依ていふに、むかし朝鮮御陣の時、彼地にては日本人いかなる者も皆一致に成りて相互に助け合ひ至極親しかりしとぞ。向ふに異國人の敵あるゆへに、日本人同士は格別に親しみ厚く成りける事尤の事なり。一家の中にも親子兄弟夫婦等の中あしく争ひ怒る事は内證とにて、畢竟は榮耀我儘など、いふへきにや、もし盜賊にても入らば、いかなる中惡敷家内にも一致に成りて防ぐへし。此故に詩經にも兄弟かきせめけども、外には其わなとりをふせくとも見へて、他人の親しきよりは中惡敷骨肉の方厚かるへし。此所を心をひろめて考へ辨へば、おのつから友愛弟順の道にも叶ひて、親しきより以て疎に及ぶの教をも知るへし。人畜の別なく同種の親しみ、同根の愛は天地自然の道なり。

○詩經小雅に云、兄弟鬩于牆、外禦其侮。一、あり、務は侮なり

西遊記卷之二終

西遊記卷之三

長江の旅泊

○大村は肥前國東彼杵郡に屬し、大村氏の城市なり  
○長江は長興なるべし、長興は肥前國西彼杵郡に屬し、綱浦に望む

肥前國大村の御城下をかなたこなた見物し終り、うれより小船をかり海に浮んで長江といふ所に渡りぬる船の内よりは、や夜に入りぬれば、案内も知らぬ旅の空に、夜に入りて宿を求めんもおほつかなしといへば、船頭のしるべの家有りどて、川の岸なる所へ送り入れぬ。いと貧しくいふせきふせ屋なりしかども、一夜の宿りあるしの妻心よくもてなすに嬉しくて、手洗ひ足らゝぎなどして打くつろぎ、夕の食なども取したためて、やすらひたるに、其家南おもてにして、しかも大なる川を前に受て、海つらさへ遠く打のろめは、風景のおもしろきに、六月二十日頃の月海上にさし出て、さゝ波のきら／＼しきは、こがねをちらすかどく、浪風また涼しくて限りなき興に入り居たるに、此家の子の十一二はかりなるが他の家の子に頭打れたりどて、こなたの父親又さきの子の頭を強く打ぬ。さきの父親又怒りてこなたの子をうてば、後にはたがひに親と親とのいさかひと成りて打合しに、こなたの親力強く打勝て歸りぬ。しばらく有りてさ

さの家の近きあたりのおのことも大勢集り来て、打負たる意趣をばらさんと、  
 纒つむぎにせまき家の庭にほに込入りぬ。こなたにも又近きあたりより若きもの大勢救  
 ひ来りて、はじめは詞賦ことばたてに其かまひすしき事いはんかたなし。しばしがほは  
 田舎人のいさかひ又めずらしと傍かたわらに見居たりしが、次第しだいに大勢集り来て、纒の  
 家に數十百人こみ入りたれば、予か居たりし所も奪はれて座し居つへくもあ  
 らず。兩方たがひに怒りの、しりて棒庖丁ぼうぼうていの類を携へ来り、既に打かゝりぬれ  
 は、ゆへも無きにろば杖つゑに打れ疵付ん事のおろろしくて、いろぎ走り出たるに、  
 案内は知らず立入るへき所も有らず、喧嘩けんわはますくはけしく、すべきやうも  
 無くて、かなたこなた立まひ居たりしに、年老たる者壹人出来て旅の人不慮の  
 事にあひて力なくもおはすらん、むかふに見ゆるは我舟なれば、いろぎ彼舟に  
 乗り玉ひて休足し玉へと、ねんごろにいひて、多葉粉たははこの火などもてなし呉らる  
 らに、力を得て乗りうつりたり。獵船りつせんと見へていとちいさく、管くだ少しふきかけた  
 り。月はくまなくすみ、小夜風すゞしく吹渡りて、さし捨たるたななし小舟、引沙  
 にゆらめきて行末もさだめぬに、宿りとめたるはいと心ほろけれど、又風景の  
 おもしろさに心なくさみて、出るまゝに詩歌數く書付く、陸には猶いさかい

○切無し小舟  
舟  
切なき小舟なり

やまで大勢打合ひぬれど、川中にへたり居ればあやうくもあらず、されど夢  
 むすぶへくもあらぬは、夜もすがら月と喧嘩とをながめ居たるが、明方近き程  
 には露おさるひて風いとひやゝかに、ふすま戀しう思ひしかど、すべきやうも  
 なくて管引かづきて臥ぬれと目もあはず、どかうする間に夏の夜のみしかき、  
 明やすきならひなれば、山かつら引渡し、鳥の聲花やかなれば、草鞋引むすびて  
 食もせず、舟より不立ぬ、誠に旅路のならひあはれにも又おかしかりき。

山女

日向國ひなたくに肥領ひりょうの山中にて、近き年菟道弓うさぢまゆみにてあやしきものを取たり。總身女の  
 形にして色殊の外に白く、黒き髪長くして赤裸あはだかなり。人に似て人にあらず、獵人  
 も是を見て大に驚きあやしみに人に尋けるに、山の神なりといふに、後のたゝ  
 りもおそろしく取すてもせず、其まゝにして捨置ぬ。見る人も無くて腐り果け  
 るか、何のたゝりも無かりしとなり。又人のいひけるは、是は山女といふものに  
 て、深山にはまゝ有るものといへり。總て彼邊にては菟道弓といふものを作り  
 て、獸を取る事なり。けもの、通ふ道をウヂといふ、其道を考へ知りて、其所へ弓

○妖鬼は那珂郡  
に屬し、も伊東  
氏の藩地なり

○昌東翁の諸國周  
遊山女奇談卷三  
に、山中、山男、山女  
の山中、山男、山女  
木様の皮、山の者  
割りて、その如く編  
み綴り、色を白く身  
纏ふ、は丈も低く、  
男より、は丈も低く、  
瘦たる、たなりな

○九州天狗の沙汰  
○花月紫の月山  
○曲に住み紫の月山  
○龍ふし七歳月の時  
○天狗の七歳月の時  
○行方知れざりしれ  
○を其父の寺に求め  
○め、清水寺にて再  
○り、昔より彦作と  
○は、天狗の住む山に  
○傳へたれば九州に  
○も天狗の沙汰す  
○なきにもあらざる

○求麻川は九州第一の急流なり源遠く那須椎葉山五ヶ村邊より出て四  
○十里はかりも流れたり殊に大河にて求麻郡の真中をつらぬき求麻の人吉の  
○城下を過て八代に至り肥後の海に入る予か歸路には相良の御舟にて此急流  
○を下りぬ船はもとより輕し人も纒に予と僕と貳人に船人三人都合五人乗な  
○れば、しほに飛かごとく八代まで十六里の川を纒二時に下り着たり其頃は  
○三月のすゑなれば春水殊に多きに人吉御城下青井の宮の前より船に乗れば  
○送別の人々おびたしく打集り名残り恨いふもさらなり高橋雨森右田の三  
○士は猶船に乗り移りて酒肴など携へ船を解はもとよりの急流見送りの人々

○人吉 肥後國球  
○磨郡に屬す相良  
○氏の城地なり  
○す 渡 球磨郡に屬

をしかけ置糸を踏は弓發して貫く機關なり狼猪なども皆此弓にて多く取得  
ると、誠(まこと)に邊國には種々の怪敷ものも有けり但し九州には天狗の沙汰甚稀  
なり薩州鹿兒島邊にはたへてきかず四國には天狗多しといふ伊勢の邊には  
別而多し皆高山には是有る様子なりかゝるたぐひも國々の風土によりて多  
少あるか。

### 求麻川

肥後國求麻川は九州第一の急流なり源遠く那須椎葉山五ヶ村邊より出て四  
十里はかりも流れたり殊に大河にて求麻郡の真中をつらぬき求麻の人吉の  
城下を過て八代に至り肥後の海に入る予か歸路には相良の御舟にて此急流  
を下りぬ船はもとより輕し人も纒に予と僕と貳人に船人三人都合五人乗な  
れば、しほに飛かごとく八代まで十六里の川を纒二時に下り着たり其頃は  
三月のすゑなれば春水殊に多きに人吉御城下青井の宮の前より船に乗れば  
送別の人々おびたしく打集り名残り恨いふもさらなり高橋雨森右田の三  
士は猶船に乗り移りて酒肴など携へ船を解はもとよりの急流見送りの人々

は霞の中に入りて招く扇もはや見うしなひぬ盃壹つふたつめぐらす間に渡  
りど云所まで下りぬ人々はつきぬ名残りなり歸りの陸路も遠ければ此所より  
上り給へどすゝむるにいつくまでといふ限りもなければ人々も襟をうるは  
して上りぬ予もしはし船を離れて又酒壹つふたつみて別る是より下も水  
逆巻落て殊にすみやかなり船はいとちいさく細く作りて首尾に梶を付たり  
是は眞逆様に大岩に流れかゝりたる時あどばかりの梶にては船の廻る事遅  
きゆへに先きにも梶を付たるとなり常に先の梶を第一に動し居て岩角を避  
思ふ方に船をめぐらす又中程に楫を持て壹人立ち、是は舟を前後左右に動か  
す爲なり此三人の船頭しばらくも油断せず舟を操る浪殊に逆巻所にいたり  
ては船の兩方に高さ板を立つ、是は浪の舟中へ入らざるやうとなり十六里の  
間に四五ヶ所はいたつて艱難の所ありて浪の高き事山のとく怒れる岩角浪  
の間におひたしく時出つかゝる所にては領主などの通行の時は瀬越しど  
て、其前後四五町或は八九丁はかりも船を離れて山に登り此險惡の瀬を越し  
終りて又船に乗り玉ふとなり予はいと珍らしく覺へぬれば興に乗して其瀬  
をも船に乗りなから下りぬるか其目さましき事筆の及ふへきにあらず渡り

○井手 肥後國志  
○分日 加藤忠廣  
○領分 日政磨川  
○拜瀬 碓手掛  
○ナ割 水車掛  
○田郷 中敷里  
○地チ 築里谷太  
○井手 此處なるか

○嘉久藤 日向  
○踏解 郡にあり

より下つ方は兩山けはしく時て峯は頭の上に臨み流れ殊にせまりて細く怪巖峨々として屏風をたゝめるかとかく壁を付たるかとかく龍の騰るがとかく獅子の踞るかとかく或は雜樹影茂れる中に入るかとかくすれば松杉森々たる岸に臨む或は山吹の散かゝりたる躑躅の咲るるひたる山櫻の己か梢とあらはれ出たる千景萬色眸をめぐらすにしたがひ兩山唯走るかとかくにして李太白か輕舟既過萬重山と詠せしかゝる境にもおもひ出らる彼巫峽の急流は唐土第一にして舟の下れる事疾鳥迅雲も可ばすといふもいかで是には過ん予も興に入りて一絶句を作る(別に記行有り)程なく八代の井手といふ里に着ぬ誠に舟中の心よき事今も忘れかたし日向より求麻に入りしも兼て聞つる急流を船して下るへき爲なりけるか日頃の望たりていと嬉し求麻の地は極深山の中にて廣大の平地なり別に一世界のとく仙境ともいふへし他國に出入る路日向の嘉久藤口と此求麻川筋と二道のみなり此川の傍に山路有れども絶險にて殊に細しされは相良侯にも東都御參勤の時も此川を船にて下らるゝとなり家中の面々も皆船なり誠に數百里の海上をへて東武に出る事なれば家中の人々も其妻子親友など此川はたに出で見送りの時殊にわはれなる事なり其時に船の纜を解やいな陸より船の中の人に水をかくる事なり船の人々笠をへだてゝ水を防ぐ此まきれに急流の事なれば數十町下り過て涙をろゝくひまなくはや見送りの人顔を見うしなふ事なり予が發足の時も其とくなりさ誠につきぬわかれに落くる涙せきかねて取る手さへはなちかねたるに水をろゝきて船を飛す陸地の別れに異にして物いひかはすひまもなく速にてよけれど又更に心にほそくあはれなり

龍門の瀧

○那智山の瀧 續  
○四の巻に詳なり  
○養見の瀧 下野  
○日光山字 淨に  
○あり 高サ十丈  
○幅二間  
○加治木 は大隅  
○國始 羅郡に屬し  
○鹿兒島 灣に望めり  
○龍門瀧 始羅  
○那加治木 郷に屬し  
○にあり 深を瀧邊郷  
○の山中に 登り綱掛

瀧は紀州那智山の瀧天下第一其次に日光山の裏見のたきといふ那智のたきは日本のみならず唐土にても是程の瀧はなきよしなり其外は中國九州四國の間に少しの瀧はあれども大なる瀧はたへてなし那智日光の二つのたきは予いまた見されは論する事あたはず只隅州加治木の北に龍門の瀧と名付るあり昔唐人加治木の湊に入船せし頃甚此瀧を愛して常々此所に遊ひ唐土の龍門の瀧を見る心地せりとて此瀧をも龍門の瀧と名付けるとる幅五六間高さ二十間斗とも見へたりしが其地の人に聞ば高さ五十間に幅十間ありと

川よりなりて海に入る。三尺幅七間、高八丈に四條に分れて時落つ。藤原の地、理落つ。考に云、龍門、遼東の懸崖より東北に流る。許、水所より合流す。山中、所より合流す。水、具、壯、大、に、して、其、勢、少、く、三、筋、に分れて、水、田、に、注、ぐ、故、に、水、四、筋、に分れて、水、其、勢、少、く、三、筋、に分れて、水、下、り、此、瀑、布、左、右、上、又、水、田、な、く、前、面、陽、谷、な、り、往、古、唐、人、此、氣、な、り、彼、方、の、龍、門、を、見、て、似、たり、と、稱、せ、り、よ、し、瀧、の、名、と、稱、し、土、人、傳、成、

○山、わ、る、諸、國、周、遊、奇、談、卷、三、に、云、雪、前、中、津、領、の、山、股、に、牛、馬、通、ひ、か、た、き、所、に、山、男、さ、い、ふ、も、



み、是は只仰山にいふなるへし、然れども誠に見事の瀧にして數丁の外に響き、予か遊しときは晝の八つ過の事なりしか、瀧の中より虹數十條起り、錦を織れるがごとく、殊に見事なり、瀧壺尤深し、此中に大なる龜久敷住るよし、甲のわたり四五尺斗なり、此地の人は毎度見る事ありとぞ、予漫遊の間に見たる瀧にては是を第一とす、然れども格別の邊土なれば、其名をたにしる人おし、たしむへし、其後又肥後國求麻の山中にてかなめの瀧といふを見たり、龍門の瀧よりは小なれども、又見事の瀧なり、瀧の上より十間餘の材木を流し、落すに、瀧壺甚深くして、其材木眞逆様に瀧壺に入るに、とくく瀧壺に沈み入りて、じはらくしてやうく、に再び浮上るといふ、されは瀧壺の深さ何十間といふ底をしりかたしとなり、誠にさも有ぬへく見ゆる瀧なりき。

山 童

九州極西南の深山に俗に山わるといふものあり、薩州にても聞しに彼國の山の寺といふ所にも山わろ多しとぞ、其形大なる猿のとくにして常に人の如く立て歩行く、毛の色甚黒し、此寺おとには毎度來りて食物を盗みくらふ、然れど





予か遊ひしは三月なりしが折よくておびたくしく居たり又此靈泉も奇妙の水にてもし是を汲得て飲時は萬病を癒し長生不老なりといふ。さも有ぬへしとも覺ゆ。

### 麝香鼠

薩州鹿兒島城下に麝香鼠といふものあり。多く水屋のもと床の下などに住て、其形鼠に似て其糞甚臭く、少しじやかうの匂ひに似たり、故に麝香鼠といふ。食物をむさぼり器をやぶらうこなふ事常の鼠より甚し。膳碗飯ひつなどに此鼠一たひ入る時は、其匂ひ留りて幾度洗ひ清むれども去らず。此鼠又座近く出る時は、其には匂ひ鼻を穿てたへかたき程なり。其鳴聲甚大にして雀の聲に似たり。るれゆゑ中山傳信録には琉球の鼠は雀の聲ありと書置り。此鼠ももとは琉球の船より渡り來り、今にては城下町々家々に甚多き事と成れりといふ。長崎にも唐船より渡り來りて町家にも多くあり、されと薩州程は多からず。其外の國にてはたれて無き鼠なり。一説に阿蘭陀人は此鼠を以て煉り合せ、じやかうを造る法ありといふ。誠に秘法あらは麝香にもなるへき程の強きにはひある鼠なり。

### 壽天

予諸國をめぐり試るに、山中の人は長命なり、海邊の人は短命なり、京都の人は癪癪のとき腫物類は甚稀なり、長崎には甚多くして、京都の三双倍五双倍ともいふへし。其由來を考ふるに食物の事にあり。山中の人は魚肉なければ常に芋大根の類のみを食す。もし年始節旬其外祝ひ日といへども、富る者も纒に鹽肴乾物には不過、其上に高山深谷に登り下りて耕作に身を勞し、纒に麥飯に飯をしのぐ。魚食にして身を働く故に、長命にて無病なり。海邊の人は魚肉に飽満て、飯のかわりにも魚を食し、船の出入有りて諸國の運送よろしければ、飯は米自由なるゆへに貧しき者もつひに麥飯などは食せず。其上に山阪の働の苦勞は無く、船にて往來やすらかにして魚鹽の利ゆたかなれば、自然と身を安くして美しよくにくらす故、病身にして短命なり。猶又山中は人の往來不自由にして淋敷質朴なれば、買女遊里も無く、濕毒傳染の憂もなし。海邊は何方にて諸國の通路よければ、賑に華麗にて遊女あらさる所も無く、人とに濕毒をうつり、且

○印度にてはこの麝香鼠の糞をなしたる酒造の邊を走ると其臭氣の爲めに酒は穢されたり。酒をこれに糞つると酒に匂ひがたふ。○シエルトンはそは預れて栓に其臭氣のつきてありしもりなるべしといへり。○琉球の鼠中山傳信録卷六に云、島有三鼠、麝香、蟻、虎、作聲如鼠、冬夏皆然。

○東岡舎筆記に三河國實飯郡水泉村の満平なる者長七十年に生れて享白髮を賜ひて寛政八年米を賜ひて、其妻は百九十四歳、其子百七十三歳、其孫百五十三歳、其曾孫も亦百五十三歳、其孫多しといふ。○濕毒は梅毒なり、に歐洲にもなり、しに紀元一千四百



九十三年コロムブ  
ス始めての病時  
受の全來りての延  
より西全に支那を  
東に全船支那に廣  
中洋船長崎に永祿  
染せしめ長崎に傳  
廣く邦内へ延近の  
地に至るまで餘の  
所少は梅舟のなき

○塘雨 續俳家  
人談卷上云塘  
五井といふ人號

は其の依さるるを  
知るは常の門を  
行たり記す者して  
名埃隨筆二卷の  
日記この書より大  
なる識なり一に  
○赤江川 肥後源  
遊川といふ一に  
ありて一を肥後の  
球磨郡諸谷に發  
原山下諸谷郡石  
珂郡別府村福那  
村の間に流るる島  
拾五里を流るる島  
拾問三町貳貳

又鹽風に濕氣を受けて内外より病を作り養ひ心氣を勞し腎をつからし、いかなる壯實の生れ付と云ども、短命病身ならざる事あたわす、是の山中と海邊の壽天の遠ひの根本なり、長崎は天下第一に魚肉たくさんにて、野菜の類よりも下直なる程なれば、人皆日々魚肉に逢ひて飽滿、且又唐人のいんしよくを見習ひ、何のにくにても油あげになし、厚味にして食す、其上金銀の通利格別に宜敷、人皆歡樂にして世を渡る、其故に日夜只飲食のみを樂として身を働さず、氣血をめぐらす事なし、是皆腫物の類の多き根本なり、京都は人皆家業を專一に、つとめ身を働さず海無き國あれば、魚肉格別高料にして卑賤の者は求めかたし、故に他國に違ひ常に飽食なり、癪疔の類すくなきゆゑなり、然れども、繁華の地ゆへ濕毒の憂は日々に多く、貴賤おしなへて病さるる者無きに似たり、もし保養をよくせば京の地の長壽を得べき所なり。

神

樂

○塘雨 余に少し先達て日向國宮崎郡中村に遊ひしに、其地に増右衛門とて齡既に百歳に及び、性質律義にて物に怒らず、柔和にして人に愛せらるる、

老人あり、或時塘雨か旅宿に來り物語りしけるは、某近年の事は、反而忘れかちなるか、前年の時の事はよく覺ゆたり、今より四五十年前までは、此宮崎郡一圓に公領にてありしかば、年々に年貢の米を此地より直に江戸に積事なりしに、我も度々其船に乗りて渡海せり、此所の赤江川の淺口より舟を出し、寅卯の方向に向ひ針を立て走るに、土佐阿波紀伊伊勢の方を左に見なして、沖遠く乗るに、遠洲灘も只一乗りに打過て、大阪へ到る日數にては、心安く江戸に入る事なり、勿論右の方は國あるへしとも思はれず、只針先を大事と乘る事、然るに或年のつものどく漙を出して馳し所に、土佐國清水か又は、蹉跎の岬かとも思ふあたりに、小島を見付て、是非かく船をかけたらし、か數日風も直らず、彼島に掛り居たりしかば、水やある用意すべしと、人々船より島に上り尋廻りけるに、此島に住よしもなく見へて、只草木茫々たり、其中に小き社壹つあり、近日に祭りにてもや有けん、拜殿に太鼓貳つ残り、人々煙草のみて拜殿に休み居けるか、此太鼓を見て、壹人の云やう、此頃數日の舟懸りにいと、退屈せり、此所に幸の太鼓あり、いさや神樂舞して遊んには、神も見ゆるし給ひてんとて、手ん手に竹を切て、笛とし、藥鍮の蓋を以て銅拍手とし、紙をぬりて鳥帽子とし、浴衣手拭、それぞ

れに狩衣ゆふだすきの學びをなし、彼太鼓を打立て、なまりたる田舎聲を一調子はり上て、大勢一同にうたひはやし、誰見るへき所ならねは、耻憚る事なく、心一はいのたのしみをなして、前後をも忘れ、次第に高聲に成りけるに、其音陸地までも聞へやしけん、所の庄やなどおぼしき者ども、小舟に棹さし來りて、大に怒り云や、汝等は知らずや、此島には昔より荒き神のましく、常に漁人の舟さへも寄せず、まして一草一木にてもかすめ取れば、大に祟り有りて、近在郷までの大難儀に及ぶ事なり、それゆへに所の人といへども、月次の祭りの外には此島に渡る事なし、汝等は何所の者共なりや、かゝる無禮を仕出して、神前をけかし、神威を輕しめ奉るにやと怒り罵りければ、皆く肝をつぶし、左様の事とは存せず、船がりの退屈のあまり、太鼓を見付しより、ふと興に乗せし我先にと船をさして逃入り、猶此島を遠く離れて沖かゝりし居けり。さるにてもいまた風も直らねば、其夜も其所に懸り居けるが翌朝早朝にきのふ來りし船と見へて、猶其外にも數艘漕連れ出來る。こは又いかなる事をか云ひ出して、谷めに來りけるやらんと、皆く恐れ、こゑをも立てず、船底にすくみ居けるが、

彼船よりよやくと呼起せば、こわく答へて一人出迎へたるに、先きの役人ともおぼしき者、其所の者共を大勢引連れ來りて、船をつなき寄せ、きのふの荒々敷けしきには似もやらず、いんぎんに會釋し、扱々きのふは卒爾なる事申て、各を驚し參らせしなり、近頃御わびを申事、猶るれに付て、此上御苦勞を頼申度事ころあれ、其子細は昨夜所の者共一同に夢中に、此神の示現を蒙り奉りしなり、けふは思ひもよらず珍らしき神樂舞を見物して、面白く慰みけるを、汝等來り妨げて興をさまし、猶彼等をも叱り驚かしける奇怪さよ、早く彼船に行て彼等に安心なさしめよとの御告ありしなり、左あれば、此後猶神の御谷めも斗りかたし、何とぞ各きのふの失禮はおゆるし有りて、猶神慮をもなくさめ奉らん爲に、今一度まげて神樂して給はるへしと、ひたすらに頼むに、船の者共も今更空恥かしく、段々辭退すれども、聞入れねば、せひなく又々いざなはれつ、彼島に上りて、眞顔に成りて、神樂舞をはしめければ、所の者共大に悦び、老若男女つゞひ來り、謹で見物し、事終りければ、酒肴なせ設けて、丁寧にもてなされ、猶其上に味噌、鹽水、薪なども運ひ送れり、其翌日は風も直りければ、帆を巻いて馳たりしに、紀の路の海も、遠州灘も、一瞬の間に無難に江戸に着たり、老人數度の回

船にかゝる神感のいちしるしく又おかしき事はあらざりしと始終りくはしく語れり。

いろは

○難波津淺香山  
古今集の序に云  
御始なり歌は帝  
の言の葉は采女  
戯ふりよみて  
父のふた歌は  
習ふ人の始に  
○手習の始に  
彦の有の儘に  
古今集の序に  
まの歌をてな

うはしめ  
台記久安四年  
の條字治影御  
唐君執定ひし  
はなならひし  
給ふ事元仁元  
又東鑑元仁元  
月の手習は長  
の時習は長  
ひし事習は  
じめは手習  
さだまり何事  
なすし見ゆる  
かたしむるは  
○源氏物語若  
の巻に云は給  
りにも思ひ給  
へさせ給へる  
聞かせ給へる  
はづなだに  
なくねんば  
ならざんば

我友塘雨日向の國の片田舎に宿りし夜、どもし火の下によりつゝ手帳取出し、ひるの事とも書し居寄りて御客人に頼申度事ころ候へ、今見受候へは物よく書給へるにこそ、悴とも今は十二三歳にも及び候ひぬれど家貧しく朝な夕な、煙立へきいとなみに、我身のいとまさへなければ、物敷へき手たてもなく、殊更近きあたり手よくかく人稀なれば、けふよあすよと此年月いたつらにこそ打過候へ、かくて有へき事にもあらず覺へ候へは、御客人の物よく書給ふころいとゆかしけれ、何とぞ悴とも手本書て得させ給へど、いとわりなく云に、殊勝の志ある人かな、うれしがしも手よく書といふにもあらず候へど、子供衆の手習ふはしめ程の事は書ても參らすべしといひて、いろは四十八字を筆ゆるやかに書と、のへて出しければ、あると見て是はむつかしの事を書給ふもの

かな、恥かしき事なから悴共はいまだ筆取せめし事も候はねば、けふ手習ふはしめに候へは、先ツ難波津淺香山こそ書て得させ給へかし、其後に予いろはといふものをも手習ひ得へき事も候べしといふに、塘雨驚き、今にては天下皆小兒の手習ふはしめにいろはとて、此わたりにはいまだいろはといふものを知り給はずや、誠に源氏物語などにこそ難波津淺香山を手習ふ初とせる事見へしかと、今にてはいとむつかしく覺ゆるを、扱も昔めきたる事を望み給ふ人かなとて、則二首の歌を書てわたへつれば、これる悴とも手に叶ひぬへけれとて、一しほに悦びける、塘雨京に歸りての後、此事を余にも語りて、邊土田舎にころかゝるふるめかしく昔覺へしことも有つれ、いろは書出して、そゝろに心恥かしく覺へしと、毎度いひて興しぬ、誠にかゝる所こそ延喜天曆の遺民ともいふへく、洩季輕薄姦佞の風を露しらするは、玉洞丹丘も外にてはあらずと知られぬいと風流にも、また淳朴にもありし事なり。

西遊記卷之三終

西遊記卷之四

篤實

備後國を通し時百姓とみへし年老し男二人と道連に成り山の名里の風俗  
 など尋問ひて行たりしに我野服を着し方頂巾を戴たきしを怪しみていか  
 なる人にていつくよりいつくへ行給ふにやと問ふに都方の醫者なるか醫術  
 修行の爲に諸國に遊歴するなりと答へしかば扱も頼もしき御人や我等が住  
 里は向ふの山の奥なるか親しき家の女房に奇妙の難病ありて早二九年に成  
 り近きあたりに住候へは聞もいふせく其家にもいろくど醫療盡さるると  
 もなければ露はかりのしるしもなく今は早命だにあやうく見へ候ひぬかく  
 山深き片田舎にて名高き醫師も候はずあはれ都近くも有ならばなど親類の  
 者は歎き居候ひぬけふははからすも京都の御醫と承候へは親類共が常く  
 詞も思ひ出し候ひてあはれにも候へは何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて  
 彼等か心をもなぐさめたまはらばやと誠の心言葉に出て又餘義もなく見へ  
 たりしかは余も此道修行の事なればいとやすき事なりとうけがひて彼者共

○尾道備後國御  
 今郡の中なれども  
 調郡に属す甲奴郡  
 調郡に属す甲奴郡  
 及び世羅郡に同  
 名あり  
 ○この病は淋病  
 より尿道狭窄を起  
 し膀胱結石にても  
 生ぜしものによこ  
 覺ゆ

のしりへに従て尾の道の二三里斗こなたより右の方に分入る鹿狼の通ふと  
 き細道を谷に下り峯にのぼりてゆけどもゆけども程遠きに日陰もや傾き  
 腹餓足つかるれば僕腹立て程もしれぬいたつら事とつぶやくどかふなだめ  
 て行はせにやうくに至り着ぬとある山あいのいと淋しき人里なり本郷と  
 いふ所なりと其家に入れば病者は五十斗なる女にて其夫を六兵衛と云案内  
 のものしかくの由をいへは家内皆驚き悦ひ去年の冬より淋病の心地なり  
 しが次第に強く露はかり落る便事に其痛忍びかた内よりは頻に通じの心  
 さざして腹裂る心地して其くるしみたどへんかた無し日々月に病ひとつの  
 り春の頃よりは一しほにて横に臥ば下ばらひとしほさくるがとく立ばくる  
 しく坐すれば堪がたしうれゆへ晝夜只火燧のやぐらに兩手をつかへ立なが  
 らうつむきて居る事のみ少し心やすらかなるやうなれば春以來は片時も坐  
 せず臥さず只晝夜食事にも眠るにも此通りなり其くるしみ中くいふもお  
 ろかなり近き頃は殊にあしければ命の限りも遠からじと一日も早く臨終を  
 のみ待侍るなり命の事はたすかるべくも思ひ侍らねど都の人と承ればゆか  
 しくころ候へ何とて一日なりとも此くるしみをたすけ給はりて横にふして

○三原 備後國御調郡尾道の西にあ  
り  
○六條 京都六條  
なり

やすらかに臨終を得さしめ給は、上も無き御恵と涙を流せるさまげに見る  
さへあはれなり。晝夜立てうつふし居れば足は柱のつく腫氣ありて、顔も亦眼  
ぶちはれ、額も浮きて活たる人のとくにもあらず。肛門は牡丹花のつく長さ五  
六寸もぬけたり、一しきりく、腹はり来る時のくるしみの聲隣を動し、聞者す  
ら堪かねたり。病體は誠にかくのとく危く甚しけれど、其脈に見所有ければ、い  
そぎ薬を與へ、猶且薬湯を以て腰より漬し、種々の療術を用ひしかば、大小用の  
通利出来て、初て横さまに臥とを得たり。猶品く、の療治をくはへ、此以後に用  
る薬方を委敷書しるし、猶用ひかた杯迄もくはしく傳へ置て、其家を辭して數  
里の深山をわけ出て、三原の城下へ着ぬ。三原にて此物語をせしに扱もあやう  
き事なりき、御心に誠有ぬれば、こゝ佛神の助けも有りて、まことの事に逢ひ給ふ  
ならめ、多くはかくのとき事は盜賊のいつわる事にて、旅する人を人なき深山  
に連行、さし殺して金銀衣類を奪ふ事珍らしからず。此後はかならず楚忽のふ  
るまいし給ふべからずといひけるに、初て心付て恙なかりし事の嬉しかり  
き。了れより諸國をめぐり、二とせをへて京へ歸り居たりしに、或日六條の旅宿  
のあるしたすね來り、一兩年以前九州へたもむき給ひし御醫者はこなたなり

○下に市の字つけ  
たる御醫師  
すふこと未だ思ひ得  
ず

○東寺 京都九條  
大宮の西にあり  
教王護國寺を稱  
す、眞言宗にして  
弘法大師の開基な  
り

やと問ふ、いかなる用と聞けば、備後國より六兵衛といふ百姓一人のばり來  
り、下に市の字の付たる御醫師を聞及ばずや、何と尋くれば、去々年しかく  
の事にて高恩にあひぬれば、御禮のため來りたり、其御名は聞ざりしかども、  
荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ、手がかりも無き尋よふかなど存  
候へども、其志の殊勝にも候へば、先試に標札をみめぐりて市の字を見當候へ  
ば、御尋申なりといふに、其事ありといへば、則歸りて、其次の日、彼六兵衛同道  
して來りつゝ、備後疊をみつから持て禮物とし、扱も過し年は不思議の御縁に  
て妻なる者御療治に逢ひ命は無きものと覺悟致し居候もしを、其日よりしる  
しを得仰置れし日限のとくに、かゝる難病平癒して再ひ常體の人となれる事、  
殊に近所の者の行逢ひより始りて御名さへ承らす候へば、弘法大師の來らせ  
玉ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ、京を尋たりとて逢奉るへしとは  
はからず候へども、命たすかりし御高恩、一言の御禮を申さるる心の中も安か  
らず、もし逢奉る事なくば、東寺にても参り候て、弘法大師様御禮申かへるへ  
しと存し極めて参り候ひしなり、先は尋當りて日頃の本望に叶ひ候なりとて、  
信實顔色にあらはれたり、予も嬉しく、しばしもてなしなぐさめて歸しやり

ぬ都近くの者ならましかば百里に餘れる海山をいかではるく尋來るべき邊土の民の篤實なる事感ずるにも猶あまらあり。

仙人

ねはよるの人皆才徳の事に限らずもし長生を得んと欲せば深山に入り飲食を断ち思慮をやめ淫事を断じ衣服を除きて性命を養ふ時は下凡の人といへとも二三百歳の壽は保つへし當時霧島山に獨りの仙人有り其名を雲居官藏といふもとは武士にて平瀬甚兵衛といひしか聊不平の事ありて官録を捨て世をのがれ此山奥に隠れて人にまみへず其後數十年へて霧島山に住るといふを親屬の方へも聞へ甥の得能武左衛門といふ人ばるくと霧島山に尋入り數日尋もとめてやうくめぐり逢たり其形木の葉の衣に髮髻おのづからに生ひ茂り人のとくには見へずされ武左衛門も厚く心にかけて尋入りたる事なれば言葉をかけて近付寄り今一たび世に歸り人の交りもあれがしど理をせめていひしかとさらけがう色なくはや世を逃れて幾年かへぬ近き頃は仙術もや成就して姓名も雲居官藏と改めたりよるなからにも世

○霧島山 日向國國語部南にありて大隅國嶽の二峯に分れ東嶽西嶽嶽高くて直立四十八丈六尺あり山中に池多あり山に池多あり

○人吉 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○肥後 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○木多 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○吉野 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○白木 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○白木 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり  
○白木 肥後國本郡に屬し城に相長侯の城地なり

の人に相見る事我道の妨げなりまして再び世に出ん事思ひも寄らず此後はいかなる事ありとも尋來る事なかれとて走り去り武左衛門も是非なく別れ歸りぬ其後は山深く住居てほのかにも人にまみゆる事を嫌へりまして言葉をかはす事などはさらに無し山に入りて後今また既に百何十年といふ上に成れりされを行歩健にて老たるとも若きとも知らず彼邊にては人皆仙人なりと敬ひ飛行自在其外種々の奇妙多しといへども其事は知らず誠にさりしや山は天下の名山にして高き事雲に聳へ麓のめぐり三拾六里中に藥艸奇玉多く大なる池數十又火燃る谷有り仙術修練の地是に過たる所有へからず手も此山中に三日在りしが百分が一も見つくさず一月はかりも籠りて見めぐらば猶奇所を尋得へく残り多かりしかといまた仙骨を得ずむなく歸りぬ又肥後國球磨郡の人吉の城下より十里ばかり奥にたら木といふ所あり此所に吉村専兵衛といふ百姓あり年六十斗の時家業不如意にて世の中うとましくふと仙術に志して此たら木の山奥に入れり城下だに深山のおくにて他所より見れば仙境のとき地なるに又うれより十里もおく誠に人倫も稀なる地なるを猶避逃れて深山に入れり飲食は木の實などを食せし只寒氣には堪

百歳に過らざるは  
 やむに思ふは  
 如く深山に住るは  
 人好まざるは  
 さに好まずるは  
 里人専ら必す  
 丈人の師に事す  
 く天の通に事す  
 くを道に事す  
 しかば希に事す  
 出し白馬の山  
 出た白馬の山  
 猶ほ白馬の山  
 同放言に事す  
 看すの一言し

〇去る酉  
 年なるべし  
 安永六

かたかりしにや、冬に至れば里に出て、綿入を一ツつゝもらへり、春に成り暖氣  
 を得れば脱捨て裸体に成り、一年に一度つゝ衣類の爲に里に出しか、近き頃に  
 至りては仙術も追々に成就せしにや、衣類も無くて住けり、山に入りて後予か  
 球磨に遊びし年まで凡四十年餘といへり。是も近來は不思議の仙術多く、殊に  
 百歳に餘れる行歩健にて飛が如し、九州に此二仙人有り、中國邊にてはたへて  
 無き事なり。京都白川の山中には白幽先生ありしか、今は若州の山中に移れり  
 といふ、仙術の事もろこしのみに限らず、廣き天下には種々の異人も多かりき。

孝

行

孝子太郎八、並妹万龜は薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の百姓治右衛門か  
 子なり。太郎八當年十四歳、まん龜は十二歳なり、幼少の時よりふたりとも孝心  
 にして生れ付柔和に、兩親の事かりそめにもわするゝ事なかりし。去る酉の九  
 月、兄太郎八は九歳、妹万龜は七ツのとき、其母産後いまだ日數たゞざりしに、時  
 節の事なれば稻取入のため、田へ出て働しに、血の道の病ひさしおこり、うれよ  
 りいろく養生せしかども、さらに心よからず、今年まで六ヶ年か間床に付、世



んく病ひにつかれ起臥さへ自身にはならざるにふたりの子ども幼少な  
 から常に母の側に付きそひおきふしの手つたひより食物の事にいたるまで  
 こまやかに氣をつけ母の不自由になきやうにこしらへ病中の事なれば母に  
 心をつかはせ又は腹立せてはあしかるへしとてたどへいかやらの無理なる  
 事有りてもあいつとのみきげんよく返事してすこしも母の氣にさかはぬ  
 やうにせり元來小百姓の事なれば少しはかりの田島なるか太郎八幼少なが  
 ら耕作の事をもつとめける留主のとは妹にいひふくめて氣を付けさせける  
 妹もまたかいふ敷心をつくし其孝養兄にねとらず太郎八も夕方早く歸り  
 先づ其まゝにて母のそばへ寄りそひ手を握り顔をなで其日の母の氣色くは  
 しく尋ね又我田地のやうす其日にありし事どもかたり聞せ粟の穂又はから  
 芋などを出して母に見せどかくして覺ぬす時を移しつひに夕飯をもわすれ  
 し事多かりしとなり夏の夜など百姓のわら屋殊に蚊屋の中一しはあつけれ  
 ば母も不便におもひ再三太郎八に蚊屋の外へ出て夕飯たべよといへど嘸し  
 すまざる間は飯もくはずはなししまいて夕飯をくひ又蚊屋の中へ入りてそ  
 ばに付うひしづかに母を扇ぎ心よくせけんはなしなせして其身も打くつろ

○今年 には天明  
 二年なり

きたるようすを見すれば母も太郎八とはなしするにて病ひの苦をわすれし  
 どぞ扱眠る前には兄弟の小供我耳を母の顔へよせて右と左にうひふし万一  
 夜中寐入たる間に母の氣分にてあしくよび起す時ははやく目のさむるや  
 うに心得してぞふしける又冬など寒き夜はみづから帯をとき母の足をふと  
 ころに入れ抱きてあたゝめもし又母氣分あしくいたみなどさし起りくるし  
 む時には兄弟打より背中をさすり手に取付みづから薬を口にふくみ母に飲  
 せ泣かなしみおさな心の氣遣ふ様子かたはらより見るには其病人よりもか  
 へつて兄弟の子共の方あはれにてあたりの者共もちからをそへて介抱して  
 そ遣しける母のかくのとき子共のいかうにて貧しき中にもつゝに不如意  
 の事を覺ぬす病中に六ヶ年の月日を送りしに其病日々に重りて今年五月  
 ひなしく成りぬ兄弟の子供の歎き中くいはんかたなしさてあるへきにあ  
 らねは親類打より葬送の事をいとなみしにふたりの子供かなしみなげきて  
 今生にての母の顔をみる事是までなれば葬送の期を一日なりともべたし  
 とて晝夜母の尸の側をはなれず泣沈しかば此体を見聞人々涙を流さるは  
 なし去年八月十八日郡奉行得能左平次とかや勤農の爲に村方巡行の時小山



田村の道のかたはらに十二三才の小兒草を刈て居たるを見て、ねんころにいひなぐさめて通られければ、跡に従ひし庄屋三島喜左衛門、此小兒は當村の太郎八と申ものにて、しかくの孝子なりと、つぶさに語りければ、得能氏感心有りて、其夜の旅宿にて又此事を尋られけるに、宿の女房よく知り居て、くはしく物語りしける。其次第庄屋の申所に、すこしも相違なければ、其夜近邊の百姓を召集めて此事を開糺されしに、孝行いよく相違なかりしかば、翌日得能氏自身太郎八か家にいたり、其やうすを見分し、又其父母に尋ねどもに露たかはさりければ、早速こまやかに書付て、大守へ言上ありしに、大守も奇特におぼしめし、御はうびとして兄太郎八に米二十五俵、いもど万龜にせに五貫文をぞたまひける。はゝもそのころやまひやゝおもり居けれども、あまりありかたさに人々にたすけられて、おきあがり、たまものをいたゞきしとぞ。右御はうびたまひけるとき、近むらの百姓馬數十疋におわせ、太郎八かいへにはこびきたりしかば、これが孝子への御はうびなりと、遠近の人々たちつとひ、はめうら山ざるはなし。得のう氏よりも錢壹貫文をあたへられしかば、庄屋むらやく人、其はか近かさあたりのてらくまで、おもひくゝにそれくゝのものをあたへおくり

○あづさのちりば  
めつ子南特に  
州孝子傳といふ書  
を著して天明三年  
六月京都の書肆伊  
勢屋源兵衛より出  
板せり、其書の奥  
書に  
天明二年壬寅九  
月、旅館於鹿兒島  
橋本町、諸  
ごあり

ぬどくのう氏くわんせんのためにとて、そのほとりの男女にめいじて、太郎八がいへにゆきて、よるこびをいわしめ、また上よりのたまものをはいけんせしめらる。このことついに國中にかくれなく、人みな兄弟の子とも孝行をしやうびし、兄を孝太郎とよび、いもどをお孝と名付ける。われきんねん醫とゆつしゆぎやうのため、諸國にあそび、薩摩の國にしばし返りうの折ふし、増田熊すけなる人、此のことを稱歎せらるゝを聞はれば、人の子の手本ともなれかし、かつは國守の御仁せいのおまねきをあはぎたてまつり、また得能氏仁慈のこゝろふかきをかんにじうの言上書のうつしをこひもどめて、ありしまゝをかきしるし、あづさにちりはめぬ。嗚呼わかには、にも去年おくれぬ。世上の人々、父母そんじやうの内、孝しんおこたりたまふべからず。

流人

つかさ位高きも、其程くゝに付て、國の政家の政に寢食のいとまなく、又は世のそしり、人のねたみを受る事もすくなからず、家富るものは其資うしなはしど、彼を恐れ、是をあやぶみ、又出入る人の求に應しかねて、はては人の恨み身一つ

にあつまる事多かる富貴は皆人のほつする所にて予も是をにくめるにはあらねど、もし唯世の中のたのしみを論せば、身のよせも重からで寶もたず、衣食の事はいつれの境に居れるにも、人の恵むはかりのさへありて、皆人のきそひあらそふ富貴のみちは、少しうむけつゝ、須摩の秋吉野の春、只心にまかせて時におくれず、又思ふ人あれば千里の遠きをも必尋ね訪ん事ころ、いと興深からんとは我のみ思ふかもしらす、されど又同じ事いひし人なきにもあらず、薩州にて親しく交りし友人、長谷川藤兵衛といふ人は、文雅の人なるが、近きころ小琉球の奉行にて、彼地に三とせまて住ぬれば、めつらしきことも多かるへしと尋しに、海山の氣色のことやうなるは、いふもさらなるか、又殊にあわれなりし事のありしとて語られしは、彼島に何某とて流人あり、もとは京都の大寺院家なりしか、おほやけの罪を犯せる事のありしにや、三十年はかり前つかた國の守へおほやけの命下りて、此島へ送り來りしなり、此人ふみの道に廣く、詩作り歌よみ、其外糸竹の遊ひ、茶道のわざまでかしこきに、此島に來りてのちは漁夫樵者の外は誰かたらふ者もなく、夜ごとの月のいろにのみ都の空を思ひ出て、かはかぬ袖に明しくらすに、薩摩より此島に在番のため五人づゝの武士交代して渡れるを、人らしとて待かねて語れるのみなり、廣き島に言葉のかよふ程あるは、わづか五人の薩摩おのこ、其淋しさ思ひやりぬべし、うれゆへ長谷川氏の在番の時は、親にもあへる氣しきして、殊に悦び睦び、夜る盡る行かい、別れの時などは、中くいわんかたなくあはれなりしとぞ、此長谷川といふ人も、薩摩侯の伏見の館の下役人たりしが、文學のきこへありとて召寄せられし人なり、都近くのゆかりの人にて、殊に文雅の事このめれば、彼人のよろこひさもあるべし、彼人筆の上手にて、月花の折々には誰聞事もあらざるに、獨りしらべて興をやり、又常には庭に築山をつくり、みづから木を刻みて、堂塔の形をうつし、是は都東山なり、こなたなるは北山なり、比叡なり、愛宕なり、此堂は清水なり、大佛なり、此屋しるは祇園なり、北野なり、此中央なるは大内なりなど、こまかにうつし作りて、物しらぬ、嬰乙女などにさしめして語りきかせ、都にある心のみならず、さをはらしぬるとぞ、其心の内おもひやりぬべし、又ある時、長谷川に語られしは、扱も世の中のと、しみといふは、富るにもあらず、貴きにもあらず、唯いつれの國にもあれ、おもふ所にさはりなくて、いたり遊ひ、山水の風景に心をばなれば、又思ふ事もあらじと涙くみて聞へし、長谷川も此こと葉身にし

士交代して渡れるを、人らしとて待かねて語れるのみなり、廣き島に言葉のかよふ程あるは、わづか五人の薩摩おのこ、其淋しさ思ひやりぬべし、うれゆへ長谷川氏の在番の時は、親にもあへる氣しきして、殊に悦び睦び、夜る盡る行かい、別れの時などは、中くいわんかたなくあはれなりしとぞ、此長谷川といふ人も、薩摩侯の伏見の館の下役人たりしが、文學のきこへありとて召寄せられし人なり、都近くのゆかりの人にて、殊に文雅の事このめれば、彼人のよろこひさもあるべし、彼人筆の上手にて、月花の折々には誰聞事もあらざるに、獨りしらべて興をやり、又常には庭に築山をつくり、みづから木を刻みて、堂塔の形をうつし、是は都東山なり、こなたなるは北山なり、比叡なり、愛宕なり、此堂は清水なり、大佛なり、此屋しるは祇園なり、北野なり、此中央なるは大内なりなど、こまかにうつし作りて、物しらぬ、嬰乙女などにさしめして語りきかせ、都にある心のみならず、さをはらしぬるとぞ、其心の内おもひやりぬべし、又ある時、長谷川に語られしは、扱も世の中のと、しみといふは、富るにもあらず、貴きにもあらず、唯いつれの國にもあれ、おもふ所にさはりなくて、いたり遊ひ、山水の風景に心をばなれば、又思ふ事もあらじと涙くみて聞へし、長谷川も此こと葉身にし

みて耳に残れりと、又予に傳へ語られきげにかの人は身の上なれば一しほに其歎息も多かるべけれ、又世の中廣き人々も世事のわづらひにこながれて、井の中に一生を終ふるは罪なきさすらへの身ともいふべし、君父のつとめに任せる人は其道重ければいかゞはせん、只予かとき逸民は彼人の言葉にも感ずる事多ければ書しるしぬ。

阿蘇山

○阿蘇山 肥後國阿蘇郡にあり、高嶽御嶽、檜尾嶽、根子嶽、往生嶽、五嶽あり、就中高嶽最高にして高サ海面より六千二百五十尺あり

今よひは阿蘇の大宮司のもとに一すくして、あすこそは峯にのぼらんと心ざせしに、晝過る頃より風の色少しあしうみゆれば、あすにありて雨ふり登山の縁をうしなはん事もやと思ひめぐらすに、心あはたしう成り來て、今よりも思へど道なし、すぐさんとはいなければ、山の北の麓の的石といふ里に入りて、あないの人を頼みて山の北おもてより登る。木こりのみ行かへは、道いと細くけはし、絶頂に至り付は日既にくれば、てぬ晝參詣多き時に商ふためと、旅人あぞの行くれたるか宿る爲に茅屋あり、唯むしろもてかこひたるはかりにて、床とてもなし、此内に入りて宿る。名高き峯に登りつめて、空もいと近う星探るべき程なるに、夜あらしの吹わたる音も物すこくて、一山人倫たぬ、四方寂ばくたるに、夜ふくるまで目もあはず、又もゆるあたりも程遠からで、地震ひ山動く、世にある心地にはあらず、夜あけぬればきのふおもひしにはとなりて、山かづら引渡せる間に、朝日の影いと花やかなり、夜半のわびしさ引かへて心いさめり、とく起出てもゆるどころにいたる。大なる穴あり、是をみかきいふ、中のみかき、北のみかき、法性崎と名付く。都合三が所なり、當時さかんにもゆるは法性崎なり、たとへはふいこの口のことし、黒煙天を覆ひ、時々火出て、其音のおびたしき事、只今此山みぢんに碎る心地す、其勢ひは筆に書つくすべくもあらず、しばし見居たれど我身も山ともにくだけざるべき心地して、あくまでもみつくしかたし、少し下れば大なる堂あり、内に額あり、壽安鎮國山と書り、是はもろこしの帝より、むかし此山の靈異なる事を傳へ聞給ひて、此五字をもて山を封じ給ひしなり、堂は傾き損したり、人はもとより住べき所にあらず、むかしは是より下つかたに寺院多くありしといふ、すべて絶頂は海濱のことくにして、硫黄の氣にて白くみへ、石は皆金くろの如くにして土砂ある事なし、しばし下れば土見へ草ありて、はじめて世界の景色あり、西の方にはるかに雲仙たけ

○阿蘇神社 今國幣中社にして、一宮建紫雲命、二宮阿蘇津姫命、三宮速瀧玉命を祭る、孝養天皇の世に創建せしといへり、九比咩御子神以下、九神を合祀せり

下れば土見へ草ありて、はじめて世界の景色あり、西の方にはるかに雲仙たけ



のことくころ思ひ居玉ふへけれ、そこには中心に思ふ事をあからさまに云いたしたまふは、すなほなるともいふへきにや、おこかましき申事ながら我おもふ所をくわしく語り聞せ申べし、しばしのいとまをかきて心静に咄し玉へ、又聊の益にもなるへき事も有りぬへきか、それ仁といふ事は大にしていふ時は、天下を安んじ人民を救ふ事なれども、手近くいふ時には禽獸のとく我身勝手にはせずして、人の爲に成るやうにする事を仁とはいふなり、故に論語にも吾欲仁則仁斯至とはの給ひしなり、その詞のことく天下國家を治身にならされは仁は行はれぬものならば、いか程仁を欲するとも、斯に至る事はあるへからず、匹夫にても仁を行ふ道われはころ、孔子もかくはの玉ひしなり、わか醫を行ふも、即仁を行ふなり、若治療を求る人ありて其疾苦を救へは、人の爲に成る、もし又治療を求る人あくても、醫學を修行する即仁を行ふなり、醫學上達して精妙に至れば、人に教しへて、其人々に世間の人の疾苦を救はしむ、もし従ひ學ぶ人なくは書物にあらはして、後世末代の人に告げおしへて、後世の人民の疾苦を救はしむ、しかれば我醫術を行ふも、又机にかゝりて醫書を修行するも、見臺によりて醫書を講ずるも、誠を盡して眞實にさへすれば、是みな仁を行ふなり、

醫業のみにかきらす、神主の神明に祈請して人の福徳を祈るも、坊主の佛道を弘通して人を善道に導くも、武士の其君に忠勤して其國を安んじ人民を安堵せしむるも、商人の商賈を出精して家を富し親屬をやすんし出入の者を恵むも、職人の其業に勤めて家内のものを養ふも、皆何れも仁を行ふといふべし、然ればころ、何人にもわれ、其人其身の分へに付て誠を盡しつとめ行へは、其しるし忽あらはれて、其人に屬する人の安堵する事なり、いかなる人にても人の爲に成事は、其身に付てあるものゆへに、是を仁斯至とはいふなり、其人々の身の分に付て、いかやうにも誠は盡さるゝものぞ、論語にも又君子思不出其位とも、教玉ひて、我身の分より外の事は思ひ志すまじき事なり、うこのとく仁は我等とき匹夫にては行はれずと思へは、仁を行んど欲すれば、我分より外の望出來て、終には悪人ともなりぬへし、此所手近き事なれども、大儒先生もかく手近く人々の分上に付て説聞せ玉ふ事なれば、學問の益多からず、醫者も人の疾苦を眞實に救んと志せば、人また其恩義をかんじて家富み名もあらはる、武士も君の爲と志して勤むれば、其忠顯れて祿も増し位もすゝむ、商賈も先祖よりの家の爲家風の爲、一類親屬の爲にもと志して、其業を出精すれば、其誠通し

て利徳を得、家富み身も安し、今の世の輕薄風なるは、鬻は美服を着し、人の上席に坐する事を志して醫となり、武士は祿を増し位を昇らん事をこころざして奉公をなし、商賈は身一分の榮耀安樂をこころざして金銀を貪る、皆仁の道に違ふか故にわざはひを蒙るもの多し、そこにも此所をよく心を得て仁をうしなひ玉ふべからずといへば、一座みな歎服して、今日より志をあらため人の爲を先とし、我身の事を後にすべしとて退きぬ。

奴

僕

日向邊の農民富有なる者は一生買切りにしたる奴僕を多くもてり、いかなる事かと問に、米良五箇、其外此近國の山中より出る奴僕の親たる者へ鹽一俵米五升許をあたへて、其子を一生ふつつに買切る事あり、山中の者は賑なる地へ出る事を面目たのしみとして、親たるものも子の出世する事のやうに覺へ、子たる者も悦す、み出て出る事なり、かくのごとくして一生を買切りたる奴僕は、たとへ打殺しても其主人の心任にして、親もどより豈言のうらみいふ事なし、男女どもに此通りの奉公人甚多し、田地多く持たる農民は多く召かへ置ゆ

○一生買切 往昔  
○米良 日向國  
○五箇 肥後國八  
○日向邊 日向國  
○農民 日向國  
○富有 日向國  
○鹽 日向國

右の太生年三  
十二の太生年三  
十の太生年三  
候に明の太生年三  
は明の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三

右の太生年三  
十二の太生年三  
十の太生年三  
候に明の太生年三  
は明の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三  
は候の太生年三  
む候の太生年三  
じ候の太生年三

へに、其者ども私に通して出生する子をもふかくは禁せず、主人よりも厚く世話して養ひそだつるなり、これを庭の子といひて、普代相傳の奴僕にて、わけて其家を我家とこゝろへ居て、眞實忠勤をつくす事なり、主人家の娘を嫁せしむる時には、かならず此婢女を添てつかわすなり、もし其奴僕主人の氣にそむく時は、主人のこゝろ次第に賣拂事なり、一生を託せる家の事なれば、其主人家を實にわか家と心得、大切に忠を盡すゆへ、主人もまた我子のこゝろ覺へて恩愛ふかし、まことに主従の心厚くみゆ、今上方にては人を賣買事はさびしき御制禁にて、世の中にもおろろしき事のやうにおぼへたるは、人を賣買といふ事は遊女ならではないき事にて、其上其買出すといふは、其親に納得して買たるにはあらず、人の子をかどはかしたる者なれば、その親に歎きかなしむ事ゆへ、御制さんとはなれるならん、日向邊の人の賣買は、これには似も寄り、其親も悦ひ、其子も悦ぶ事なり、上方のこゝろ賣買ふべき事ならねば、夜中に幼き子を捨て、折あしく人なれば、狗猫の食となるのあはれなるには、はるかに勝れり、また上方の主従といふは、名ばかりにて、近來は主の方より反而、奴僕のさげんをとりてめしつかひ、奴婢よりは反而、主人を目下にみて、つとめてやると心得、春

○元禄十二年三月  
又正徳元年五月の  
高札に人賣買堅く  
停止す但し男女  
の下の人は永年  
或は下人召置事  
は相對し任すへき  
事

○元文六年の改律  
には下人に作法  
の發申付候主人は  
品により違島

秋の出代時をまぢかね、半年くにて主従あたらしくなり、其前の主人に在る内より先のあり附どころを約束し置て、出たるあとにては、主人家の事をそしり笑ふ事、隣敵のとし、奴婢かくのごときの心ゆへ、主人も召遣ふ内は随分おもてむきは、奴婢のきげんをとりて、逃さらざるやうにすれども、内心はわか家の奴婢をかたきのとく思ひいるなり、かくのごとくなるゆへ、主従の恩義年く薄くなり、君臣の禮もみたれて、唯金銀のいきをひにて、無理に人をふくせしめ、いゝ事になれば、月々年々に忠孝よりも禮儀よりも金銀を尊く覺ゆる風俗になり、ゆくなり、武家はかく別なれども、三都の町家はたとへ其奴婢いかやうの無禮不法をなしても、殺す事は扱置、こぶし一つを與ふる事もならず、もし怒りに乗して打たゝきなどする時は、公邊殊の外むつかしくなりて、其主人なんぎを蒙り、ついには家をも破る程に至る、此ゆへにいかなる無禮不法ありても、主人は身を思ひ、家をおもひて、奴婢に屈し居り、奴婢は此事を知り、いゝゆへ、主人を恐るゝ事なく、いかやうの事をなしても、其家を追出さるゝはかりにて、其隣家に奉公しても、前の主人よりさしかもふ事ならず、主人家は笑ひそしられ、て、家の悪聲を世間に弘むるばかりなり、名は君臣なれども、畢竟は寄合の傍輩

○舜水先生  
は、明の浙江餘姚  
の、明の國難を避  
け、我が國に歸化  
す、水戸光圀に化  
す、聘して、常明の  
を著し、居る、復  
を著し、年四月十七  
天和二年八月十七  
日に、私に、文藝  
○朱舜水が日本の  
士人の禮義正しき  
を、北見の禮義正し  
た、北見の禮義正し  
た、北見の禮義正し

同様の交りゆへ、主人のいせい年々に薄くなり、奴婢の心月々につものりゆく、それゆへ奉公はらくなる事になりて、百姓たるもの、子も皆々都會へ出るやうになり、田地を耕す苦勞をまぬかれんとするゆへ、田地年々に荒れ、都會の遊民は月々多くなり、世けん自然に困窮にも及び、奴婢の給銀もむかしとは以の外に高料になりて、其働は前の十分一にも不及事あり、かくのごとく君臣の禮儀下々より亂れ來れるゆへ、おのつから中人已上にも其風うつり及びて、禮義廉恥の風義薄くなれるならんか、何分にも君臣の禮は嚴重にて、殺活の權柄をも司とる事にあらざれば、風儀の厚くなる事はあらし、明の亡人舜水先生常陸にいられし時、纔に百石二百石の侍にて、一人召つかへる奴僕も、其主を敬するをみて、大に感心し、我明朝も君臣の禮義かくのごとく正しくは、かくのごとく義を知る人の少くて、むなしくほろびはすまじきものをとて、なみだをながされしとぞ、明末などは主従の禮はなほだみだりにして、家來たる者、主人より先に立て歩行し、主人と同席し、主人と同食し、畢竟傍輩のごとくありしとぞ、我邦武家の君臣の禮正しきをみば、舜水の歎息せられしも、まことなり、かゝる事も思ひ合しては、日向邊の主従の恩義厚きはうらやましき事なり、東國にて甲

州上州の邊かくのこくにて、富有の農民は家の子といふものを多くかへ居  
れり、何ごとにも付ても古風淳朴なることは田舎にのみ残り。

西遊記卷之四終

西遊記卷之五

天の逆録

○この一章安積長  
齊、山川物産之奇  
記、如、列、層、其、中  
霧、島、山、尤、神、往、讀  
之、不、勝、神、往、讀  
因、譯、三、國、字、爲、三、國  
文、一、以、充、二、神、往、讀  
與、三、同、好、者、共、爲、一  
也、漢、文、に、譯、せ、し  
も、の、あり、但、し、識  
者、以、て、原文、に、考、れ  
○北、窓、環、讀、卷、之、二  
に、云、霧、島、山、を、い、ふ、一  
は、霧、島、山、を、い、ふ、一  
又、一、は、霧、島、山、を、い、ふ、一  
ふ、山、あり、て、越、豊、後  
道、なり、日、向、へ、越、豊、後  
に、所、の、霧、島、山、を、い、ふ、一  
今、の、霧、島、山、を、い、ふ、一  
諸、書、に、多、く、霧、島、山、  
是、は、彼、地、に、多、く、霧、島、山、  
故、なり、昔、斯、り、日

むかしあめつちいまだひらけざりし時、冊諾二柱の御神、天の浮橋の上より霧  
のうみを詠め下し給ふに、島のごとくにみゆるものあり、二柱の御神、天のどぼ  
こを以て、是をさぐりみ給ふに、國なりければ、則此どころに跡をたれ給ふ。是霧  
島山と名づくる由來にして、其録を逆しまに下し給ひしが、今に至り、其まゝに  
此山の絶頂にたちて有るを、天の逆録といふ。誠に神代の舊物にして、奇絶の品、  
又外に是を比すべきものなし。人々皆珍らしと尊びて拜せんことを希ふとい  
へども、此霧島山格別の高山にして、殊に火もへ風動き、其外種々の神變、不思儀  
怪異、珍奇多く、登るもの不時に紛失する事、毎度の事ゆへに、薩州の人といへ  
ども、恐れて絶頂に至る者、すくなし。予久敷この逆録の事、聞居て、ゆかしく思ひ  
居つれば、鹿兒島逗留の時、節志を起して登らんとす。然るに山中、奇怪多しと聞  
けは、召連し、僕などは、凡庸の者なれば、もし恐れて紛失なせは、悪かるべしと  
思案して、旅宿へ集會の人の中にて、撰みしに、旅宿の近きあたりに、年若き勇壯





さうさ、眞に神造  
らざる、其の及ば  
ず、折たる、故土  
に及ひ、存せし、  
火に、陽燄の、出  
て、石炭の、赤土  
よ、天の、逆、名  
人は、稱する、さ

く佛神のとき事もあり、あるひは足下より虹たちのぼり、たて横にたなひきて、  
織りなせるがごとくなる事もあり、又天地ともに金色になる事もあり、其外奇  
怪ふしぎなかくいふもおろかなり、静に是を考ふるに、是皆谷一面の猛火に  
よりに、又陰氣もあつまり、火の上に雨るゝぎ雲霧覆ふがゆへに、水火相激  
して、震動雷電し、又水火蒸蒸によりて種々の形みゆるなり、又硫黄燄硝の氣あ  
るうへ、うれに水をうゝぎたるゆへ、種々の匂ひもいづる事なり、又折く一陣  
の風ふき来る事あり、此ときは先達教しへて急にうつ臥に倒れふさしむ、旬旬  
にならされは、風の爲に此身をどられて、猛火のうちに舞ひ落るなり、折ふしは  
風の爲に取らるゝものあるゆへに、此山にては紛失する人多しといふなり、予  
も殊に此かせを恐れて少しの風にも急にうつふしになり、地に取付て風には  
なたれざるやうにせり、しはしにて又忽に風もやみ、天はるゝ事もあるなり、須  
臾の變幻定りある事なし、此とこるに取かゝりしより、さしも勇氣の若もの大  
に恐れ、足戦ぎて立事あたはず、われと先達と前後より介抱して、いろくど恥  
しめ勵し、しばしが程は引行しかば、後には目見へず顔色變せしかば、いかんと  
もしがたく、はとんど難儀に及ひしに、先達いふやうけふは山も格別にあらし、

殊にかゝる人引具し行ん事いかにも叶ふべからず、登山も是迄なり、これより  
下山すべしといへば、力及ばず、本意なくそれより下りに向ふ、扱夫より纒に十  
丁ばかりを下れば、天氣晴朗にして風おもむろに、四方の眺望初のごとし、しば  
らく休息して、焼飯など食し、こゝろを鎮めしかば、若ものもけしき常のごとく  
にして、さきにはいかにして、かばかりは恐ろしかりつるにやと、三人打わらふ  
程なり、われつらくおもふに、かゝる事のありて妨げにもなるべからんかど  
て、凡庸の人を同道せさりしなり、然るに今若ものが爲に、予までも絶頂をきわ  
めずして、是より下山せん事生涯のいこんなるべし、何とぞして一人なりとも  
登りたきものをとおもひめぐらして、先達にこれより絶頂までは道程いかほ  
ど有ると問に、馬の背越の長さ八丁、それを過て急にのほるところ十丁ばかり  
もやあらんといふ、うれなれば、纒の道なり、紛れ道やあると問に、兩方は谷なれ  
ば、紛るべき道なしと答ふ、さらばあまり残念なれば、予は獨歩して絶頂に登る  
べし、此とこるに若ものを守り居て、われか下り来るをまらくれよ、これより下  
は案内なくて、は一步もすゝめかたければ、かへすゝも頼なりといひすて、  
といひるをもさか、足をはかりにのぼりしに、件の馬の脊こえに至れば、天地

○西遊記に云く、  
岩を千代に建置せし  
ひ千代に建置せし  
の千代に建置せし  
神代に建置せし  
ふ代に建置せし  
事代に建置せし  
見代に建置せし  
行代に建置せし  
同代に建置せし  
州代に建置せし  
秘代に建置せし  
り代に建置せし  
録代に建置せし  
ひ代に建置せし  
さ代に建置せし  
し代に建置せし  
選代に建置せし  
鍛代に建置せし  
を代に建置せし  
山代に建置せし  
人代に建置せし

ものなり、これ  
一覽するに、  
嶺山の峯に、  
離れ七里、  
からし穴、  
かたし、  
新に作り、  
さし、  
より、  
り、  
て、  
○鹿兒島、  
二、  
商、  
神、  
周、  
一、  
無、  
款、  
而、  
干、  
出、  
疾、  
固、  
日、  
家、  
去、

標註西遊記卷之五 天の逆鋒 九十  
たちまち變じて初のとし先達がおしへに任せ折くはうつふしになりて風をさけ千辛万苦して馬の背越八丁が間走りぬけたるに先達かいひしとくそれよりは真直に登る所あり此どころにいたれば天地又常のとくにして奇性なし只いさを限りに登る程にづゐに絶頂にいたれり絶頂は尖りて纒の地面に天の逆鋒あり是を見得しときうれし何にかたとへん逆鋒のありさま全體は唐金のとくにみへたれども風霜にさらせるものあれば青く鏽てしかどしれかたし長さ一丈餘ばかりふとさ大なる竹程にてさかさまに地中にたち其石突の端の所に南面に鬼面のこときものみゆ是も風霜にされたれば鼻目しかどは見へがたし土中に入りたる先きの方は何程深く入りたるやしるべからず只絶頂に此鋒一本のみにて外に堂宇等のときもの一つもなし神代の舊物なりや其程はしらすといへども實に三百年五百年位の近きものとは見へず天下の奇品なりもし銘なども有るやとくわしく見しかども見へずしばらく此絶頂に徘徊するに天氣晴明にして四方目の及ふ限りみへ渡り其心地よき事今に忘れがたしされどもかゝる所は久敷留るべきにあらざればいそぎ下りたるに馬の脊越にいたれば又初のとく天地晦冥して怪異益はなは

だしことく筆に盡すべきにあらす殊に山上の有さまは人間に洩さざる山法なり恙なく馬の背越をこへてひた下りに下るに遙の下に先達若ものかすかに見へて大さ豆のごとし嬉しくていろぐほごに下るとはなしにすべり落て須臾の間に二人の前に着ぬ恙なかりし事のみどもに悦ひ其夜くれ過る頃宮居の傍の坊にかへりぬ元來急峻なる山なれば百五十丁の間なれども下りには甚速にて暫時に下る事なり今度の登山暴虎馮河の勇なかりしかどももし馬の背より下り来らば生涯のいこんなるべからんものをよくも絶頂を極めたりぬ宮居より左右に分れて西のみね東の峯といふ有登る所は東の峯なり東西唯二峯のみなれば登りかゝりてより絶頂に至るまで唯一筋に登る事なり他國の高山は多くは登る所もあり又下る所もあるものなるに此山のみ水筋にも従がはす唯登りにのぼるのみなりふと杯の登りに似たりといふべし山の高き事思ひやるへしかく二峯東西に對し聳へたるゆへに昔より高千穂の二上嶽といふ神書にいふ所の山是なり別に今世の人の高千穂の峯といふ山此國にあれども甚の小山にして神書にしるせる山にあらす高千穂の峯といふは此霧島山なる事種々の慥なる證據あり此山に登るものはおの

づから知るべし。白石先生をばしめ諸先哲唯今世に稱する所の高千穂を神代の舊跡といわれしは、身其地に遊ばざるゆへに眞跡をしらざるなり。二神垂跡の義、天の逆鋒の義など皆予ふかく考ふる所有りて、一説あれども、こと長ければ別にしるして此書に畧す。西の峯も高さは東の峯におとらず雲間に登へぬれども、神跡にあらざるゆへに、世の人のぼる事なし。唯此山の高く、しかも廣く大なる事無量なり。麓のめぐり三十六里、山の中に大なる池五六十もあり、中にも大波の池、紫の池などは、めぐり三里もありて、潮水のことしとゆふ。此山には、蜻蛉多く住て池の邊最多く、樵者といへども池の邊には行事なし、もし池近くを通る時には無言にて通るとなり。人語のひびきを聞けば大蛇かならず出て人をのむといふ。又野馬といふものありて、形馬のときと髪長くして地に引きおそろしき姿の獸なれども、人を害する事はなしとなり。わが山にのぼりし時も、初めに案内のもの此事をいひても、もし見給ふとも驚き給ふべからずといひし、予ももし見ば珍らしからべしと思ひしかども、折悪敷て出ざりき。其外種々の毒蛇、悪獸、大蜘蛛、大蝦蟇等夥しとなり。是は南國ゆへ、かゝる高山深谷なれども、雪封する事なく、常に暖氣なるうへに、格別に廣くて、人跡かよわざる幽僻のこゝろ多きゆへに、萬物生しやすく、冬も盤せずして、かゝるものども多しと見へたり。北國にも越中立山などは高く廣き事、霧島におとらされども、四時雪封して、生類は住事なりかたきゆへ、毒蛇、猛獸ある事なし。只鳥獸草木の種類の多きは天下此きり島山に勝るところは、あらしと予覺ゆ。又山中に温泉の湧所も數十か所あり、硫黄のいづる谷もあり、水精は馬の脊越邊の谷底に、日かけにかゝやきて遙に鏡のとき、或は月出のときみゆるもの所々に有り、其大なる事思ひやるべし。しかれども絶嶮のところにて行かたく、殊には其邊神變ふしき多き邊なれば、砂一粒といへども山神のいかりに觸るゝととる人なし。又黒尊とて千丈の黒岩谷そこよりはへぬきたるあり、奇絶言語に及ばず、其外いろくの珍奇いひつくすへからず。此山中に一月も二月もありて、みめぐらば面白き事限りあるべからず。されども中へ仙骨をゑされは叶ひがたき事なり。すべて天下の高山は役の小角、釋の泰澄などの開山多きに、此霧しまやまのみ佛法のいまだ手を付さる所にして、只開山は伊諾、伊冊の二神とやいふべき誠に珍敷き山なり。

○役小角は大倭  
葛木上郡の人は  
通し、年三十八  
に佛氏を好み、二  
家に棄て、葛城山  
に籠り、松衣を食  
ひ、猿蓑を衣て、  
神を役せり。朝廷  
其妖衆を感ひ、豆  
に流す。後赦され  
る。

目鏡橋

○目鏡橋 長崎土  
産に云、目鏡橋  
酒屋街にあり、  
永十一年、興福寺  
持唐僧如定、始築  
長崎石橋の始也  
慶安元年、平戸氏  
夢安、其形人重好  
せり、以て目鏡橋  
たるを待たり

○廣島 沼田郡  
城なり、淺野氏  
に屬す、今に於  
も廣島は豚を畜  
へる家多し

○雲仙嶽 一高に  
泉、肥前國雲仙  
郡、原村にあり、  
あり、肥前國雲仙  
郡、原村にあり、  
三、方、見、海、中、に、差、出、て、  
に、立、見、其、地、山、の、間、  
登、立、見、其、地、山、の、間、  
の、登、立、見、其、地、山、の、間、  
行、取、所、あり、  
浴、取、所、あり、  
火、出、見、其、地、山、の、間、  
大、並、往、古、見、其、地、山、の、間、  
支、丹、耶、蘇、一、今、一、寺、  
依、丹、耶、蘇、一、今、一、寺、  
乘、院、され、今、一、寺、

長崎の橋は、すへて唐風の作りやうなり。兩岸より切石を疊上て、橋杭おしにか  
け渡せる石橋なり。他國の石橋といふは一枚石にてかけたるものなるに、長崎  
の石橋は小さき石を切りて石がきの如く疊て兩方より合せたるなり。長き橋は  
ふた筋に水を通ずるなり。是を目かね橋といふ。唐繪にゑがく所の橋は大かた  
此風なり。下より水溢るれば崩るゝ事もあれども、上よりいか程重き物をのす  
るといへども、動き破るゝ事なしといふ。誠に大河にはなるまじけれと、長崎の  
川は大かた京都の堀川程の大きなり。万代不壞の橋なり。もとは唐人來りて作  
れりといふ。彼地は柔らかなる石たたくさんなるゆへにや、京などにては此と  
き橋を作らば破損の憂なくしてよかるへきものを。

家

猪

安藝國廣島の城下、其繁華美麗なる事、大坂より西にてはならぬ地なし。其町に  
ぶた多し。形牛の小さきか如く肥ふくれて、色黒く毛はげて、ふつゝかなるもの  
なり。京などに犬のある如く家々町々の軒下に多し。他國にては珍らしき物な  
り。長崎にもあれどもすくなし。是は彼地食物のやうにするゆゑに多からずと

豊の唐土などには多く飼うたて、食用にする事なり。琉球にも多しといふ。又  
長崎にたましくやぎといふ獸あり。其形羊に似て色黒く毛ながきものなり。薩  
州鹿兒島にも是あり。隅州の内にはやぎの牧ありて多く育てりといふ。何の用  
になすものにや知らず。打見たる所は唐めきて、おもしろきものなり。南都町々  
軒下に鹿猿多く人になれたるか如く、國々土地々にて禽獸にもかわりあり。

地

獄

肥前國雲仙が嶽は西國の名山なり。山のふもと皆海にて、纔に北の方ばかり縷  
のごとく陸に連れり。高さ三里只一峯に秀て、甚見事なる山なり。唐船などの  
長崎へ渡るにも、大洋の中にて此雲仙が嶽を目當とする。予も長崎より歸  
る時に、千々輪灘を船に乗り、此山の麓の千々輪といふ村に付て一宿す。此里は  
天草一揆の時、賊徒の中に名高かりし千々輪五郎左衛門が在所なり。此千々輪  
より山に登る道、峻険水なくして、誠に難所の山なり。やうく盡過るころに絶  
頂に登り付く。絶頂は平地にて民家あるところに見へ、田畑も多く、折しも稻心よ  
く實り、其中に幅三間ばかりの川ながれたり。天外の一小世界にして、實に地上



より大通師爲者三  
 壇、小道、同爲者三  
 壇、目、葬、其、他、親、族、  
 右、準、次、第、ナ、ス、ト  
 云、光、緒、日、月、海、上、  
 ニ、映、華、麗、成、ル、處、  
 後、は、金、銀、勿、論、石、迄、  
 賊、ノ、爲、奪、去、ラ、レ、  
 能、孫、大、荒、蕪、シ、テ、  
 舊、存、ス、ル、耳、ヲ、  
 ○山、の、牛、腹、を、穿、ち、  
 て、墓、所、を、穿、ち、  
 九州、に、少、く、す、風、は

費銀五十貫目いりしといふ其後猶心に飽たらず二三十年か程は常く石工をやとひはか普請せしと云ふれよりして長崎の諺に手間いりて埒の明ざる事を東海の墓普請といふ此人は唐土より明の亂をさけて日本に渡れる人なり大福有の人なり今にいたり其子孫東海徳十郎と名のりて唐人の通事なり長崎に遊ぶ人は必此はかをみるべき事なり目を驚す事なり又近き頃まで京にありて明樂の師範せし鉅野氏の先祖のはかも長崎の西山といふ所に有り其製東海氏の墓のことしされど大に劣れり石碑のごとき物に明故伯賦故九府君魏墓道如此はり付たり前の石階に衍瑞東南の四字を大字にゑりたり又其一段下に椿林鐘秀の四字大字を横に彫たり此はか小なりといへども世上のはかにくらべては大國の君の墓所といふとも及ぶ所にあらず其はか唐人の墓は大かた大にして美麗なり

清正公

肥後の國熊もどに加藤清正の靈を祭りて清正公の社といふ熊本にては別ての大社にて一國の尊敬はなはたし宮居のありさまより社頭の木立まで神さ

○清正公の社  
 錦山神社といひ熊  
 本市京町にあり  
 社格縣社なり



○關帝堂 京都府  
如堂の傍芝薬師  
いふ寺中に萬葉  
り又國花川葉記  
なる大都屋川の邊  
關羽の廟ありさい

○櫻島 は大隅  
中に鹿兒島嶺の  
十餘里に南北二  
東一里、西二里、  
あり安永八年乙亥  
○安永八年乙亥  
九月、中州薩州鹿  
島邊の時として

鳴動す、いかなる  
事なす、人怪し  
前に廿九日、鹿  
の東南にあり、島  
の東、南、西、北、  
出、天地も裂くる  
土、木、大石、崩れ  
侍、爲めに、村々  
又、た、海に、失し  
石、降、日、間、日  
を、見、漸、日、光  
底、の、鳴、れ、く、只  
な、越、へ、ても、く、月  
り、馬、も、止、ま、り  
人、馬、も、止、ま、り  
せ、り、も、止、ま、り  
て、固、り、も、止、ま、り  
落、つ、る、も、止、ま、り  
て、固、り、も、止、ま、り  
浮、り、も、止、ま、り  
第、一、も、止、ま、り  
り、に、も、止、ま、り  
は、海、も、止、ま、り  
て、り、も、止、ま、り  
小、島、も、止、ま、り  
と、に、も、止、ま、り  
府、の、前、も、止、ま、り

びたれば、年ふるく祭り來れる事とる思はる誠にて天正のむかし天下大に亂れ  
英雄豪傑さそひ起り武勇の大將かすくありし中に今の世にいたるまで神  
靈をわがめ縁もなき人の祭りたふとむは只此清正一人なり誠に清正の人と  
かり義を先としていつはりを行はす勇にして頗る仁慈の心あり其頃の武士  
の中にては殊にすぐれて予見へし誠に人心の義に感ずるは和漢とも同じ事  
にて唐土にては人多き中に關羽のみ今に神と祭り諸國とも尊ふとむあま  
日本に地まで關帝堂といふものを建て、長崎邊の人は甚尊信する事なり清  
正も其事跡は異なれども其勇敢義烈の氣象關羽の風あれば人心の歸する所  
ありて後世までも其神を祭れるにや

山 沙

安永年間薩摩の櫻島山大に焼て後山上より大水溢れ出て田地民家大に損せ  
り所の人これを山沙といふ抑此櫻島といふは海中にありて麓のめぐり七里  
山の色黒く一峯に笠て比叡山ニツはかりも重ねたるごとくに高しふもとの  
めぐりに人家田地ありて富饒の所あり其峯の焼たりし事は希代の珍事にて

くわしき事は別巻にしるせり其焼漸鎮りて人々も再び活たる心地して悦あ  
へる所に或日又山の峯震動しておびたしすはや又焼上るかと見る程に山  
の峯より雪をとけるがごとき物真逆様に落來る何事かといふ程こそあれ大  
水山を砕き石を飛ばし樹木を抜てまくり落る其水先きに當る所は人家田地の  
差別なく只一刻の間に大海へ突出せりさばかりの嶮岨なる高山の峰より海  
を切り落せるかごとき大水真さかさまに落來る事なれば其勢ひの急なる事  
たとへんものなし人馬ともに逃るいとまもなくしかと見定めたる者もあし  
どかや手も其地に渡りし時其跡をみたりしに其水すとは大なる谷となり其  
傍の田地の中或は小たかき岡の上などにも大さ貳丈三丈あるひは五丈六丈  
にも及へる石ながれ残りかゝる大石の事なれば人力に動かす事もあたは  
ず田畑などもさまたげられながら其まゝに捨置り是を見るにもまことにか  
かる大石の水の爲になかれ下れる事其時の水勢思ひやられたり今も櫻島の  
小兒のうたふ歌をさけば島のおたけかどろく鳴るる村丈はよにげ山沙が  
來るとうたへり其ときのおそろしかりけん事みるかことくなり  
すべて高山大やけの後には多くは大水溢れいづる事あるものなり天明癸





○景清の塚日向の國にあり世の人皆しる所なり然るにいかなる故にや景清か母は球磨の人吉の城下より五六里程東の切幡村に祭れり此所に景清が娘のはかも有り切幡の神社とて一村の神に祭れり此村はなはた盲人を忌む坐頭たる者は他所よりもいり來る事ならずもし是をおかして入る時はたちまち大なる祟りありて難儀に及ふとなり世にいふごとく惡七兵衛景きよ後に盲人に成りしゆへにや

卓子

近きころ上方にも唐めきたる事を好み弄ぶ人卓子食といふ料りをして一ツ器に飲食をもりて主客數人みづからの箸をつけて遠慮なく食する事なり誠に隔意なく打和し奔走給仕の煩はしき事もなく間約にて酒も獻酬のむつかしき事なく各盞にひかへて心任せにのみ食ふと風流の宴會にて面白事なり寺院にも黄檗宗などの寺には不茶とは精進なから卓子料理をするとなり是日本にてはめづらしきことに思ひて至て心易き朋友中ならでは行ひがたき事なるに唐土にては世間常のとなりとぞるれゆへに長崎に來れる唐人日本

彼は食卓料理の野ま  
町弘の得たれど野ま  
なくつ江月なる久  
げせにありはなるべ  
浮世小路の百川茂  
左衛門初め食卓  
大料理したるなり  
大平にそは初るべ  
くしたるをいへり  
命は近ごろまで存

の常々貧家といへども膳椀みな別々にひかへておのれが箸にては香の物一ツもとらざるを見て大に感心し扱も日本は禮義正しき國なり家内のしたしき中にてさへ日夜飲食の事にかくのごとく禮をみださず貧家といへども膳椀を別々に備へたるは唐土なぞにてはおもひもよらざる事といへるとそ誠には是を聞ては日本の風義正しきをよるこふへき事なり禮儀正しき中にてたま々上方のごとく卓子料理も打和してよけれども此事常に成りてはいとみだりかはしき事なるへし唐人の感心するも尤の事なりすへて是に限らず日本の正數事は唐人なぞの不及事多し日本の内にては數百千里をへだてたる所の文通にもいかなる秘みつの事にては又金銀を贈ることにては紙一重の封しにて糊付にしたる籠畧のものにてはいさゝかの間違なく届く事を唐人開いていと不審がりて驚くこととぞ日本にはいか成横著無頼のわるものにては馬かた船頭のごとき下賤のものにては封したる状をみだりに開くことは決してなき事なり金銀にて錠をおろしたる器よりも糊づけに封したる状は堅きなり是等の事常に成り心付されはこそあれ唐人なぞより見は驚て感心すへき事なり近き頃長崎の官に下向し給ひし御人唐人館阿蘭陀館

○黒す 黒衣を著  
航一覽に見ゆ

○カピタン  
語Capteinの訛なり

巡見のときに阿蘭陀館内はさつはりと掃除し無用の雜人一人も出居る事なく、黒す又ろすなをいふ下賤のものはいづかたにおしこめ置し事にや、壹人も目にかゝらず唯カピタン以下の役人たるものばかり出迎て、禮義嚴重にて尾籠の事聊もなかりしに、唐人館にては唐人の雜人大勢道の左右に出で行列を見物し、あるひは立かゝりて行列の中迄も押入り、あるいは木にのぼり堀に攀て、高聲にわらひのしり、いかように制しても一向聞入れず、無禮至極なりしかは、こなたよりきびしく咎め給ひしに、猶承知せずして彼國にては乾隆帝南巡の時だにも行れつ近く立つとひて見物せり、天子にてさへかくのこどくし、それ以下の人の事さして無禮にはあらずと答へ居けるとる、天子の巡幸に左様なる事上下和順にして美事なりといへども、法度のみたりなる事は思ひやるべし、すべでの事に唐土は文弱の風氣にて、下賤のものには法度の嚴肅なることは行れかたきならはしと聞ゆかへつて阿蘭陀などは法度正しきといふへし、朝鮮人などにては、來朝の時、下賤のものども道中筋にても尾籠なるふるまひするにても、其國のふうき思ひやりぬへし。

鐘乳穴

○鐘乳穴 備中國  
阿蘭陀郡上水田村  
井戸にあり、北高  
町を距る、洞、高  
五里なり、市二火、  
サ三火、市二火、  
奥に入ること一町  
許、但谷に草を此  
處の流谷に投すれ  
ば、半里を距てた  
水田村殿洞に流  
れ出づといへり  
○松山 備中國上  
房郡の城、市も  
板倉氏の城、市も  
す、今高梁町と稱  
す  
○雲根志第三編  
留に云、又備中國  
いふ、又備中國  
明神あり、鐘乳  
窟あり、鐘乳の  
鐘乳、此洞の穴  
鐘乳、此洞の穴  
鬼の豆、此洞の  
鬼の豆、此洞の  
り、菅蔭石、皆  
のなす、皆鐘乳  
の、硝炭石、皆  
中一見、硝炭石  
乳の、松明の燃  
る、松明の燃  
乳の、石の、破  
ば、石の、破  
す、み、有て、竹  
あ、らす、生、物  
なり、は

備中國水田領の山中に、俗にかねちと稱する洞あり、かねちとは鐘乳といふ事なり、其洞あなの中に鐘乳石の多くあれば、名付しなり、松山城下よりは七八里をへだてたり、其穴入り口はなはた大にして、暫く入れは行當りて石壁あり、その石壁に小きあなあり、其小きあなをくゞり入れは、甚大に、ひろきとろに至る、此所は少しの日光もなく、暗黒はなはたしき所なり、案内の者松明を多くともし入ることなり、其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし、此所に上より鐘乳石夥敷下り居る、又御釜の臺、魚の棚などいふ所あり、皆自然の石にて、其形をなせり、段々奥の方に入り行くに、又行當りに石壁あり、其石壁の上に横さまに小穴あり、やうく匍匐してくゞり入る程の小あななり、其あなをやうやうにしてぬけ出れば、又廣き所に至る、此所は二段になりて、高き所あり、又低き所あり、遙に瀧の音聞ゆ、松明をふり立て、だんくゞりに進みゆくに、切岸のとき懸崖あり、其がけをやうくにしてつたひ下れば、瀧の流れの川ありて、水足首をひたす斗なり、其川を渡り越へて、猶すゝみゆけは、又ゆき當りて石壁あり、其壁上に、又小穴あり、それをくゞり扱れば、又廣き所あり、此所は初の二ヶ所よりは、大に狭くして、幾に五六疊とふはかりと見ゆ、又其向ふの壁石に小穴あり、是

鬼の豆は大さ豆粒  
ばかりにて薄黒き  
まんまるなる鏡乳  
なり、善藤石にて人  
さ指ばかりにて人  
形の姿なり

○郡上は美濃國  
郡上郡に屬す

○多賀は近江國  
犬上郡に屬す

標註西遊記卷之五 鐘乳穴 百八  
よりおくへ、ついに恐れて入りたる者なし。其奥はいかなる所なりや、いまた知  
る人なし。余か友喜菴先年此地に遊びて其近邊の案内知れる老人を郷導とし  
て、其穴に入りしに郷導の老人も若き頃より此穴の案内者して數人を案内せ  
しかども、かの二段目の懸崖を下りし事はなく、語りも傳ざりしに、喜菴好事の  
癖にて膽勇あり、かねて文字の力もある人なれば、しいてすゝみて三段目の廣  
き所までは入りしに、猶其奥を探らんとすゝみしに、嚮導の老人大におそれて  
松明の用意少ければ、万一穴の中にて松明盡なば、再び人間に歸る事叶ふべか  
らず、猶この奥にはいかなるものか住居らんもはかりがたき所なれば、速に  
で給へどて先に立て逃しければ、喜菴も力なく出て歸れり。此事を記に作り、書  
にも圖して余に示せり。余は道のつもり悪敷て其地にいたり得ざりし、残念な  
りき、いとめづら敷洞穴なり。又美濃國郡上の山中にも天馬の窟とて甚ふかく、  
奇異の洞穴ありて、數十丁奥までも至られ、其奥に石馬ありといへり。先年其洞  
中の圖をみたりし事のありし、また近江國多賀の山中にも鐘乳石多くある穴  
ありといへり。昔にて富士の人あな、伊豆國の伊藤か崎のほらあななど、名高き  
穴なれども、今にては埋れけるにや、入りたる人ある事をさかす。唐土にては説

○説鈴の清の吳震  
方の編せし書な  
り  
○説鈴の中に本文  
に見ゆるが如きと  
見當らず、観音の  
へし、漢語、觀音  
深州の部に、觀音  
中行、五百餘里、  
都、行、七、日、可  
窮、其、境、從、少、人  
指、方、君、曾、遊、明、有  
余、有、好、奇、之、癖、因  
而、入、之、長、行、九、日  
中、始、得、其、口、乃、日  
半、始、得、其、口、乃、日  
地、方、之、東、五、里、即  
次、中、矣、再、五、里、即  
迹、之、中、矣、再、五、里、即  
集、第、八、冊、に、収、む

鈴といふ書に出たる雲南にある洞穴、ふかさ五百里と見へたり、錢塘の人其洞  
あなの限りを極めて行ぬけて又地上に出たる事を載たり、五百里といへば、た  
どへ六丁壹里にしても、日本道五六十里あるへし、數日の鋸を携へ、穴の中に數  
日夜をへてをくにいたること、さみやうの事なり。唐土人も好事の癖ありて、其  
限りをさわめたるも希有の人なり。世界の氣かよひかたく陰陽の化なき穴中  
なれば、魑魅魍魎其外大蛇毒ひしの類も生あるものは住がたきゆへにや、反て  
奥深き穴中に恐ろしきもの、居たる事は聞へず、されど暗黒の穴ふかく入る  
は心細きかぎりなるべし。

### 西遊記卷之五終

標註西遊記卷之五

鐘乳穴

一近來江戸書林より此方橋南谿先生作の西遊記續編をひそかに奪ひ、其上、本書にも無之虚談  
 數々を書加へ、此方作の様取成し、板行し賣弘、猶其外にも東西遊記拾遺等といふものを  
 追々作り出し候様に書記し有之候、是等皆僞せものに候間讀人信用有へからず候、此方作  
 は西遊記前編目録四十  
五ヶ條同續編目録三十  
八ヶ條東遊記前編目録三十  
七ヶ條同後編目録四十  
一ヶ條都合四部限りにて、此外  
 に此方作の東西遊記は無之候、僞せ本實談らしく見へ候故此段わけて斷り置ものなり。

右は本書の出版元京都勝村治右衛門等より本書の表紙裏に貼付け世に弘めしものなり、その僞書といふは寛政十年九月江戸  
 本石町二丁目西村源六、通新石町中村善藏、同所遠州屋清左衛門の三書林の名を以て版行せしものにして諸國奇談西遊記後  
 篇と題して五卷あり、その目録を掲ぐれば

壹の卷	背葉笈	唐書の櫻	池山氏の物語	嬉し野
貳の卷	隠月の瀬戸	文運	方言	姥ヶ嶽
参の卷	濁酒	尾上の鐘	網引	産婦
四の卷	扶桑木	同略記	海水増減	董其昌
五の卷	小田の木佛	肥後の毒水	武者修行	愚痴
	龍鐘を愛	高麗の子孫	吹上の濱	熊膽
	五ヶ村	學心和尚	那須	孟宗竹
			六親の和	鍛冶祐定

この中本書に見えたるは記事も尋ね同しく、文も大同小異なり、小中村清和氏の語に、東西遊記も紀行體にてありしを、  
 中に面白き節節を抄出し、それ／＼題を設けて今の本の如くしたるものなれば、その實はこの書も僞作にあらず、おのがし  
 ゃ抄出の節を異にせる故、かゝる二様の書を出せるなるへしと語られぬ、さもあらんか、猶ほ虚實を確めし上にて更に本編  
 に混れたるを増刊することあるべし。

西遊記續篇卷之一

碑文

○日本にも古より  
 碑文あること墓  
 のみに限らず、山  
 城國宇治橋上、山  
 野國群馬郡山名村  
 觀音堂碑、伊豫國  
 道後湯湯の等あり

○泰平年表に云、  
 寶永四年十月四日  
 未刻東海道大地震  
 震地破裂海邊波  
 人多死

○深川洲崎辨天社  
 の前にたてたる碑  
 はこれに似たり  
 その文に云

唐土には墓碑のみにかぎらず、橋普請堤普請、其外堂塔古戰場など多く石碑を  
 建て、其事を千歳の後までも記し残せる事多し。日本も近年は別して其事多く  
 ありて、皆文人の文筆を振舞ふことなり。然るに唐土は文字の國なれば、名文奇  
 句もありて、其手柄多けれど、日本は漢文にては俗に通じがたく、しるもの少し。  
 只風流文雅の慰ばかりとなれば、漢文もよけれど、有益の事を専に主意とす  
 る碑には、世俗通用の文や勝るべき。余熊野海邊の長島といふ所に遊びしに、佛  
 光寺といふ禪宗の寺あり、其寺に石碑あり、碑面に津浪流死塔と題せり、裏に手  
 跡も俗様にて文も俗に聞ゆやすく、寶永四年丁亥年十月四日未刻大地震して  
 津浪よせきたり、長島の町家近在皆／＼潮溢れ流死のものおびたし、以後大  
 地震の時は其心得して山上へも逃登るべき様との文なり、いと實體にて殊勝  
 のものなり、誠に此碑のごときは後世を救ふべき仁慈有益の碑といふべし、こ

此所寛政三年波  
あつた時流れた  
死すも少く  
らたかりた  
流は離れ  
いふべからず  
船に限り西は  
船長門前に東  
船長門前に東  
長門前八十五  
間に家八十五  
ひにくる地に  
也をかるいもの

れら漢文にては益少かりぬべし諸國にて碑をも多くみつれども長島の碑の  
ごときはめづらしくいと殊勝に覺ゆし其津浪の事其あたりにてたづねしに  
あまりふるき事にてもなければ語り傳へて今におそれあへりるれより段々  
浦々にて尋るに津浪よせたりし浦もあり又さのみ高くのぼり來らざる湊も  
あり同じ南面の熊野の浦にてかく違ひあるはいかなるゆへぞ其地理を考  
ふるに幅狭く海の入込たる常々くは勝手よしといふ湊は皆其時津浪來りて  
人家皆々流れたり海の幅廣く常々くは舟のかゝりあしくしかと湊ともいひ  
がたきはどの所は其時津浪高からず人家流るゝはどの事はあらざりしとな  
りされば海幅狭くふかく入こみてつねく舟かゝりよく風のおうれもなし  
といふべき湊は別して大地震の時は用心すべき事にこそ大雨後の洪水又は  
山津浪なども山ちかくの地に多きものにて大坂なごのとき四方皆川々多  
くつねくも水危きやうなる土地には洪水のうれへはかへつてなきものな  
り四方へ水のさばけよきゆへ激怒のいきはひなき成べし大海よりよせ來る  
津浪も亦是に同じと見えたりすべし津浪は一旦沖のかたへ俄に潮引去りて  
後其返し大に登り來るものとぞ寶永の津なみも一たん海水ことの外に引去

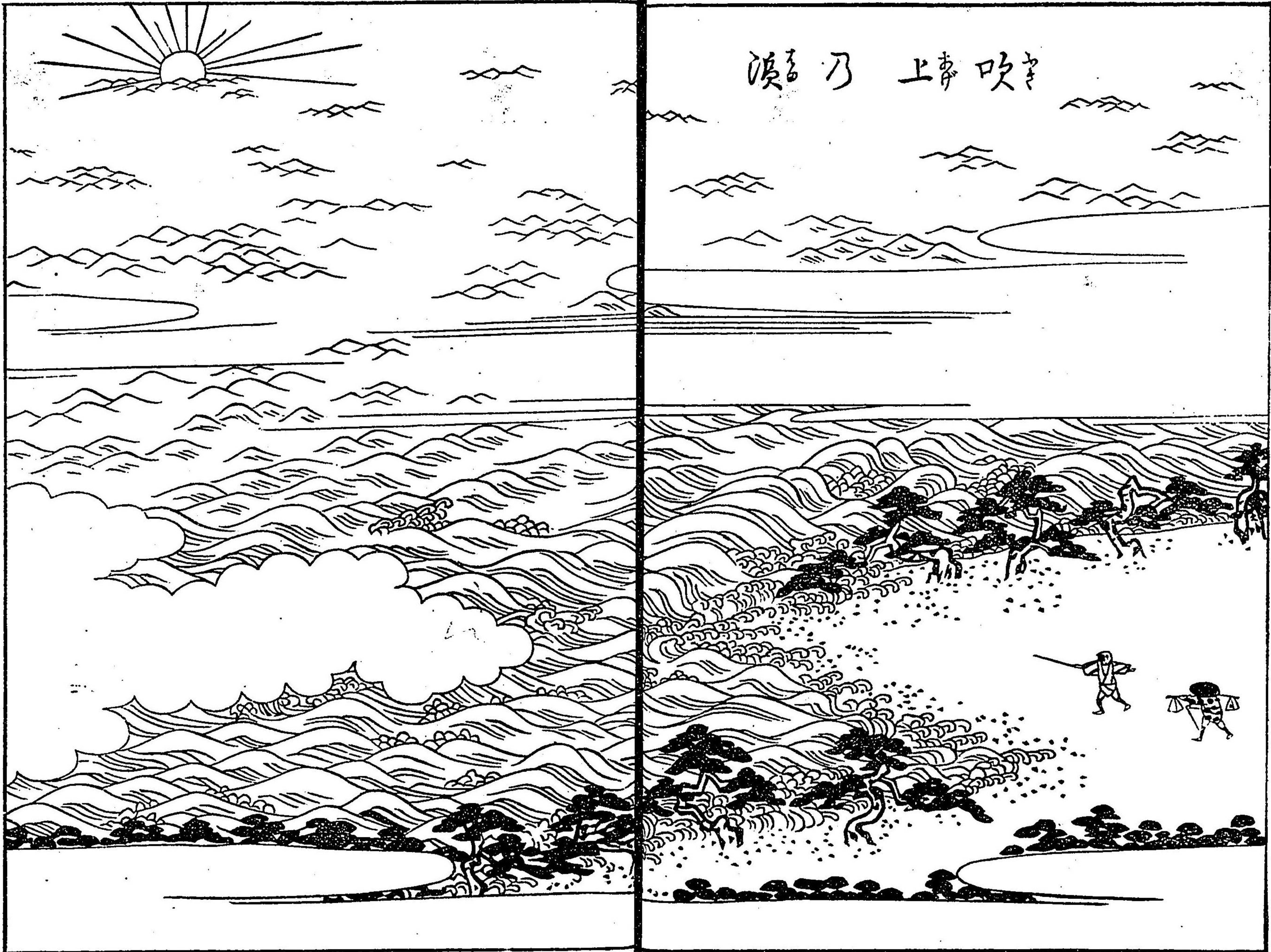
吹上の濱 近く  
吹上 鹿島名  
勝考原 小松村  
有武備志 小松原  
有武備志 小松原  
り海風 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け

吹上の濱 近く  
吹上 鹿島名  
勝考原 小松村  
有武備志 小松原  
有武備志 小松原  
り海風 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け  
り大阜 吹上け

りつねく見へざりつる海底の岩なごまであらはれぬれば海邊のもの皆々  
あな珍らしと見物に出たるにしばらくの間に沖より大浪よせ來りて逃べく  
間もなくして流れらせぬるもの多かりしといへり西國の求麻川にても大雨の  
後川水俄に干て河原となりたるを不思議の事珍らしと見物に出て大水川上  
より俄に押來り流れ死せるとありこれは洪水にて川上の山崩れ川中へ落埋  
りて暫くは川水をせき留けるがやがてせき破れて大水俄に落來りしなりし  
とぞされば海も川も不時にゆへなくして俄に水引去るは跡にて大水必來る  
事ありと用心すべき事なり。

吹上の濱

諸國に吹上の濱といふは數多所あり海風荒く遠淺の濱に白砂を吹上る地を  
いづかたにても吹上と名付るなるべし就中すぐれたるは薩州西南の濱の吹  
上なり其海元より限なき大洋にて風荒ければ白砂をうづ高く吹上又是を吹  
ちらすゆへに其砂の高低さだまらず殊に濱長く數十里を一目に望む潔白の  
海上にて白砂一點の塵もなく風景不變なり此吹上の濱の蛭乙女<sup>むしご</sup>のよめると



浪乃上吹幸





に吹流され、年経てやうく船を得かへり來る船路に、彼青が島へ船かゝりけるに、島中に只九人、是も他國より吹流されて船碎け、歸らんやうなくて、島に留り居けるをたすけのせ歸れりとの沙汰を聞けり。されば船の往來さへ無き遠き島なりとぞ思はる。

古  
朴

繁華の地は人の氣も輕薄にて、年々月々に今様當世の風に移り、家居、器物、髮形、言語等にいたるまで、むかしの風はいづれへか失て、美麗のみに長ずる事なり。邊鄙の地は是に違ひ、何事も質朴にして外を飾らず、古代の風義見るもたのもしげなり。邊國にても城下町家などは都の風にも押移るものなるに、薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風残り、器物も酒の銚子といふものなし、皆錫の徳利なり。膳も宗和などいふ膳は一つも見へず。皆二枚脚の木具なり。扱多くは皆土器類を用ゆ、只京都にて官家に交る心地す。その外元服の儀式、婚姻の禮法甚嚴重にして、古法ある事余などが知らざる事のみ多し。其外にも狩の作法、犬追物の式等は薩摩に残れる事世の人も知る所なり。余彼國に在し時、或

これ去年より背散  
島山荒し島民離散  
するにいたりしそ  
は、三右衛門、し  
引の民を已く島に  
ないり、またたくは  
へし、五百兩の金を  
もて、代官の廳にい  
たし、官の廳にい  
の息銀をたへ、そ  
ケ島の荒地開墾の  
費ふに、より、代官  
江川太左衛門代官  
征、其事聞へあけ  
せられし也、(孝義  
者書上)

○宗和 茶人金縁  
したる好める形な  
り

町家の好みにより、兼好が徒然草を講せし事ありしに、鷹の鳥の付やうの所にいたり、そらにてはしかとおぼへざりしに、座につらなりしもの、大かたは皆覺え居て、余に語り聞せ、猶色く委敷法ありとて、鳥の付様の圖を出して示せり。町家の人だに斯のごとし、誠に恥べきとなりき。其外手近き事は尙更にて、何事も故實に従ひ、人皆かたく守り居て、假初の事にも等閑にはせず。是は此國四方にさびしく關所を居られて、出入易からず、他國の人も入易らず、自然に隔りて繁華の風にも押移されざる故なり。近き年はやうく、に他國の人も往來するやうに成て、器物杯も好事の家には當世の品を調へ持るも間々あり。又下女はしたななどは、今に丸ぐけの帯なれども、妻娘などは帯も幅廣くなり、髮形も漸上方を學ぶ家もあり。

曾  
根  
松

播州曾根は高砂より程ちかし、菅丞相因縁の地ゆへ天満宮を祭れり。宮居の前に年ふるき松の木あり。まことに龍蛇のごとく横さまに臥廣がりて千年の古色あり。其むかし菅公筑紫へ御配流の時、暫く此地にわがらせ給まひ、御手づから

○曾根の松、ハ播  
磨國印南郡曾根神  
社の境内にあり、神  
幹一丈八尺許、手  
づから菅原道真の  
なり、植ゑしもの  
古は樹巨大にして  
枝葉四方に張るこ



曾根の松

新に植ふしものな  
り武隈の松、陸前  
國名取郡岩沼町大  
字岩沼郡岩寺の境  
内名取郡古松より  
有記阿古屋の松、東  
遊記卷四に詳なり  
代國伊勢郡桑折岩  
り藤田郡桑折岩に  
あり、三周の間に  
東四十三間、南が  
十間、北が三間、  
り神路山、伊勢國  
度會郡山ありて太  
神宮の山ありて太  
○伊勢郡の扶桑木  
○本卷後章に詳なり  
○今昔物語に、栗の  
江國栗太郡に大昔  
なる榊樹あり、其  
五朝には丹波國、  
影朝に夕波國、  
の志賀、栗田、甲賀  
三郡の百姓、日當  
木陰の百姓、田當  
をらるる故に、天皇  
かりし由な、宿禰等  
天にこの由な、宿禰等

松を植置せたまひけるに、其後年々に繁茂して其松今に存在するといふ、誠に  
松は諸木に勝れ、齡ひ長くめでたきものと世にいひならはすも、ことばりなり、  
されど老木のゆへにや、身木に朽入りて枯れんとすると度々なるを、神主歎  
き、身木の朽たるうつほの中に、煤古く付たる麥藁を入れて、是を焼て療治を加  
ふるに、其しるしありて枯んとする枝葉再び蘇生り、緑の色恙なく、如此なる  
近年度々なれども、其たひに療治をくはへて、今猶めて度々、諸木とも藥灸  
なせ治方多き中に、松は川を煎じて根に度々灌げば、枯れんとするもの再  
びよみがへるといふ、又常々鐘乳石を細末して、根に埋めば、其松よく榮ふと  
なり、蘇鐵に鐵を根本に入れ、身木にも金釘を多く打てば、甚榮ふかごとく、諸木  
ともうれに相應せる藥種あるへし、灸はいづれの木にもよくきく物なり、煤付  
たる古き麥わらを焼たるも、大なる灸をしたる理なるべし、曾根松などは千年  
の古木なれば、何とぞして長く榮ふる様に願敷ものなり、其外、都ちかさわたり  
にも、幸崎の松、堺の難波屋の庭前の松など、甚見事なる松にて、目を驚せり、され  
どかくべつ古木とは見へず、奥州武隈の松、阿古屋の松などは、むかしの木には  
あらず、追々に後世に植繼しものといふ、其外にも奥州に義經の腰かけ松など

いふ見事なる松あり、熊野には西行の植しとて法師の松といふあり、是等は又  
年新らしければ、其木にもやあらん、其外楠杉などには折々古木あり、隱岐國  
に八百比丘尼の手づから植し杉三本ありしに、近年の大風に壹本折れたるが、  
其木にて一の宮の本社御普請ありしとて、其殘木のきれを彼國の國造余に贈  
られしを、香箱に作りて今に余か家に藏む、八百比丘尼いつの比の人にや、何に  
もあれ千年の古木といふ、伊勢の國多氣山中の大杉谷の杉は格別大木にて、天  
下無雙の物一本ありて、國司の頃より前つかたにや、大杉大明神とこの大木を  
祭り來れるに、近年枯失けるとなり、肥後國阿蘇山の麓にも、神代の杉今にあり  
といへり、余見ずして過ぬ、残り多し、伊勢神路山の杉の古りたるは、皆世の人の  
知る所なり、唐土にも孔子御廟前の聖人御手づから植たまひしといふ、柏樹折  
ふしは枯れ、又折ふしは若芽出て榮へし事、近年新渡の唐紙半枚に石摺にした  
る柏樹の圖記にくはしくみわたる、孔子の時分より今にありといふは二千年  
に餘りて久敷事なるに、不思議のものなり、日本にも伊豫の扶桑木、近江の栗田  
那の栗の木など、今にあらばいと珍らしかりぬべきに、切り倒しぬることは、殘  
念の事なりき。



○此傳一載、扶桑樹の  
傳、本あり、中、寛政の  
刊、本あり、中、寛政の  
我、地、僻、人、實、世、  
未、一、平、客、餘、南、  
遊、一、平、客、餘、南、  
以、一、平、客、餘、南、  
巨、一、平、客、餘、南、  
質、一、平、客、餘、南、  
化、一、平、客、餘、南、  
而、一、平、客、餘、南、  
中、一、平、客、餘、南、  
者、一、平、客、餘、南、  
也、一、平、客、餘、南、  
之、一、平、客、餘、南、  
揭、一、平、客、餘、南、  
頭、一、平、客、餘、南、  
質、一、平、客、餘、南、  
研、一、平、客、餘、南、  
光、一、平、客、餘、南、  
重、一、平、客、餘、南、  
余、一、平、客、餘、南、  
○中、島、廣、足、は、こ、の  
扶、桑、木、畧、記、を、取、  
著、は、せ、り、

○此傳一載、扶桑樹の  
傳、本あり、中、寛政の  
刊、本あり、中、寛政の  
我、地、僻、人、實、世、  
未、一、平、客、餘、南、  
遊、一、平、客、餘、南、  
以、一、平、客、餘、南、  
巨、一、平、客、餘、南、  
質、一、平、客、餘、南、  
化、一、平、客、餘、南、  
而、一、平、客、餘、南、  
中、一、平、客、餘、南、  
者、一、平、客、餘、南、  
也、一、平、客、餘、南、  
之、一、平、客、餘、南、  
揭、一、平、客、餘、南、  
頭、一、平、客、餘、南、  
質、一、平、客、餘、南、  
研、一、平、客、餘、南、  
光、一、平、客、餘、南、  
重、一、平、客、餘、南、  
余、一、平、客、餘、南、  
○中、島、廣、足、は、こ、の  
扶、桑、木、畧、記、を、取、  
著、は、せ、り、

人に聞しに遠はす世にはかゝる珍敷物もありけり古きものゝかぎりといふべし諸書に傳へたる扶桑木の大きき誠とも思はざりしに今更のあたり其根の残り其枝の海底にいちじるしきをみればうらごとともいふべからずむかし能因法師の長柄の橋杭の朽のこれる木の切を珍らしどもてはやしぬるが此扶桑木にくらべぬればものゝ數かは京都にかへりて塘雨主人に此切れを贈りて書遣りしを又こゝにしるす

扶桑木畧記

此色黒き木のされは扶桑樹なり千早ふる神代の御時今のいよの國に大木有て梢は大空を拂ひ根は海山にまたがれり是が故に日出る頃は筑紫をも覆ひ入るときは陸奥の果までもかけろひて年のみのりを妨しかば國民歎きにくみて集り切しかど限りなく大なるか故にどみにもきりはたさず日ふるまには愈あひて其事ならざりしかば終に火もて焼からして後ろ切たはしぬ其後幾千年経て人のしろしめす御代になり景行の帝肥後の熊襲御征伐の時此國の温泉尋させ給ひて豊後へ渡らせ給ふに尙扶桑の朽木海上二三十里程にまたかり倒れたり官軍皆此木の上をわゆみて舟せずして筑紫の地にいたり付

給ひぬ其後の事は書もつたへず此頃古き事好める人出来て其跡たづねしに木のありしといふあたりを掘穿てば其根朽残りてそこ爰より取出しぬ又またがりありしといふ海の底に網を下して探りみるに潮にされ貝なぞ付たるを數多引上ぬ色くの器に作りなして皆人のもてはやせるを乞ひ得て歸りての後の日我にひとしき心の友にはかち贈るとて彼國にて聞しむかしがたり書添るなり

西遊記續篇卷之一終

西遊記續篇卷之二

熊膽

○球摩、人吉のこ  
見ゆ

肥後國球摩に遊びけるに、彼地の高さ人病み給ふことのありて、余に治療を求められけるに、熊膽を用ゆる藥なりければ、請求めて一具を拜領せり。其膽に紙札ありて皆越村新兵衛と書付たり。いかなる事ぞ聞くに、獵師熊を取りたる時は其旨を案内するに、役人來りて見分して其熊を解しめ、其膽に取得たる獵師の名を書付て献せしむる事なり。故に少しも賈物の氣遣ひなきなり。余が得たる膽重さ纒に一兩三分、加賀などより出る膽とは甚だ少し。此地の産は皆小さし。尤眞物の事なれば氣味は甚だ上品にして、賣買にある熊膽とは格別のものなり。委細を尋るに此地に木熊、土熊とて二種あり。土熊は土の穴の中に住て其体大ひなれども鈍し。木熊は枯木のうつろに住、其体小さくして健かなり。よく樹木の上に登る。其故に木熊の膽は小さければ、氣味猛なり。土熊の膽は大にして鈍しといふ。又木熊の膽の中に琥珀手といふ物有、是も又上品なり。京都にて撰む品は加賀の熊膽を最上とす。信濃は少し大なり。蝦夷松前より出るは

格別大ひなり、然れども皆加賀の膽にはおとるといふ。熊も又松前は甚だ大ひにして、就中熊などは殊に大ひにして、よく牛馬を掴裂て喰ふ、人を害する事大かたならず、其猛勢あたるべからずとぞ。彼地より來る熊の皮をみるに毛甚だ深く、皮大にして毛の色金色なるも有、毛至て厚きものは人の手を五つ重ねて猶よく毛の中に隠るゝあり、皮の大きさも、疊三帖を隠すもの有、虎の皮三枚の大さあり、他國にはかゝる熊はたへてなし。都ての獸を考ふるに南國は柔弱にして、北方は猛勢なり。熊にかさらず、狼なほにても、薩州などには土人曾て狼を恐れず。獵犬もよく狼をとると云。中國にては狼を恐るゝ事甚し、其猛惡の勢ひ皆人のよく知る所なり。馬も中國の馬は良もすれば人を咬、九州の馬はいかほと強き馬にても人を咬事なし。又琉球杯には熊狼などのとき、猛獸は生ずる事なしといふ。寒暖によりて万物の違ひありけるに、故に松前邊にては乘馬にても小荷駄馬にても、野外に出て、其山の近きあたりに罷居れば、匂ひを嗅得て、その馬恐れ立すくみて、小便おのづから出て、一步もあゆむ事能はず。斯のどくなれば、武家などの乗馬は、多く南部の馬を用る事とす。奥州地には熊無きゆへ、南部生れの馬は知らざるゆへ、熊を恐れず。初にこれを試るに馬場の真中に、熊

○筑後内藤子  
の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生れの馬は恐れてあゆまず、南部生れの馬は  
皮の上をもよくあゆむなりとぞ。

鷓鴣

九州には珍らしき鳥多し筑後には筑後鳥とて其形ちひよ鳥の少し大なる程  
にて、尾長く羽色眞黒にして羽の下に少し白き處もあり、是誠の鷓鴣成べし、筑後  
に尤多し、肥後にも折節見ゆる、又肥前、肥後邊の海上に脛高く口ばし長く、少し  
鼠色にて翼に白き點紋ある鳥あり、舟人にとへばしやくといふ鳥なりといふ、  
余肥後の隈本にて、ある醫家を訪たりしに、折ふし彼家へ鳥を送り來れり、主持  
出て余に此鳥をしり給ふやととばる、先に此邊の海上にて見し鳥にて、上方に  
ては見侍らざる鳥なりといへば、あると笑ふて此鳥は唐土の南方にありとい  
ふ、鷓鴣なり、船人などは云ひ誤りてしやくと覺えたり、上方の人にはめづらし  
かるべければ料理すべしとて、やがてあつものとなしぬ、其味誠に美にして  
と珍らしかりき、又其翼をこひて歸りしに、旅の日永くて途にて鼠の爲に奪は  
れぬ、此鳥いよく、鷓鴣なりや、唐土にては南國のみにある鳥にて、多く詩に作

りて、皆都遠く離れたる情を述べたり、日本に鷓鴣有事を聞きるとにて、いふかし  
けれど、彼醫家も博物の人なれば、考ふる處もあるにや。

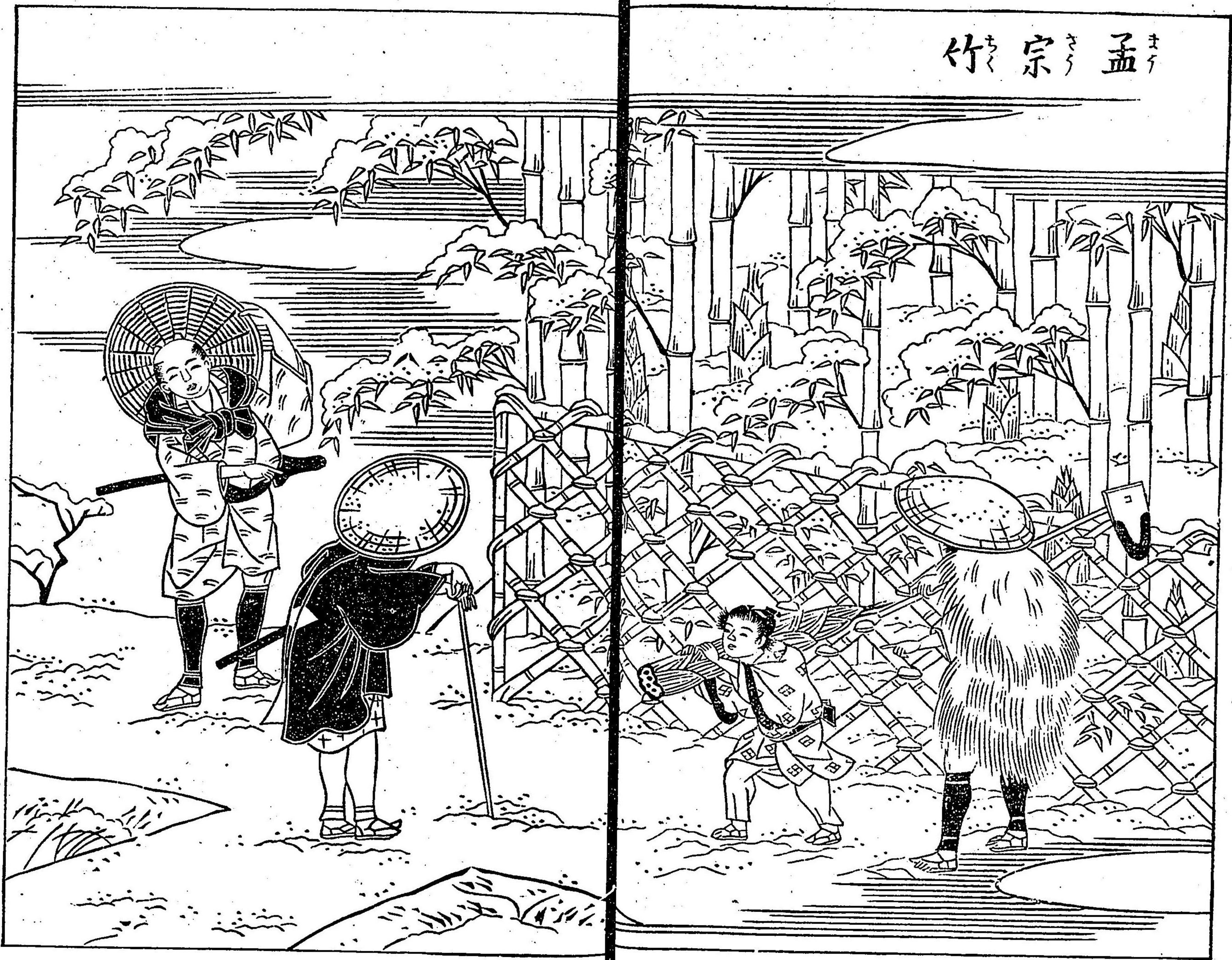
孟宗竹

薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり、人家に多し、常の竹よりは薄く節低く、腹に  
似たり、然れども甚だ太くして大なるものは二尺廻り以上に至る、花生等に用  
ひて甚だ見事なり、此竹冬笋を生ず、味甚だ美なり、寒中にも平皿一はゐるの笋を  
生すると他國にはいまだ見ず、京都にも甚だ細く指ばかりなるは、早春に出し  
て料理に用ゆれども、名斗り珍しくて味は宜しからず、孟宗竹の笋は大ひにし  
て、しかも和らかに、味夏の笋におどらす、若此笋を京都に送り登さば、稀代の珍  
味なるべけれども、道路三四百里を隔てたれば、其事叶はず、おしひべし、風の透  
間のあき様に包みて送れば、漸く長崎までは無事にして届けりといふ、夫よ  
り遠方へは損じて送りがたしとなり、此笋元來常の竹の子よりも格別和らか  
なるゆへ尤損じやすしとなり、孟宗竹の孟宗は古人の名なり、親の爲に冬笋を  
得たる事、廿四孝に見へたり、此笋寒中にも出るゆへに孟宗竹といへり、元來唐

○筑後内藤子  
の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生れの馬は恐れてあゆまず、南部生れの馬は  
皮の上をもよくあゆむなりとぞ。

○筑後内藤子  
の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生れの馬は恐れてあゆまず、南部生れの馬は  
皮の上をもよくあゆむなりとぞ。

竹宗孟











有しや、是等の事に  
しつきて思へば善  
事な稱譽する事だ  
もみだりにしる事  
し人始あらしむる  
事なし、よく終り  
ある事、思ひ合され  
いふも思ひ合され

○熊野浦 紀伊國  
南東兩半、甚那の海  
を總稱す

なられたり。此儒士の心根はいと殊勝にて、君子は人の美をなすといふ心にも  
叶ひ善に感ずる事の深ければこそ、むつかしき世話をもいとはず、文章をも作  
りたるに、人の行ひの始終を全ふする事のかたき事は、昔より同し事にて、名な  
き女子はかくれ行て、儒士のみ人の笑ひ草となれるは歎かしき事にあらずや、  
かくのときをみれば生涯口を閉るより外なけれど、人の善もかたらざれば  
傳らず、しるされば残らず、嗚呼いかゞはせん。

流れ物

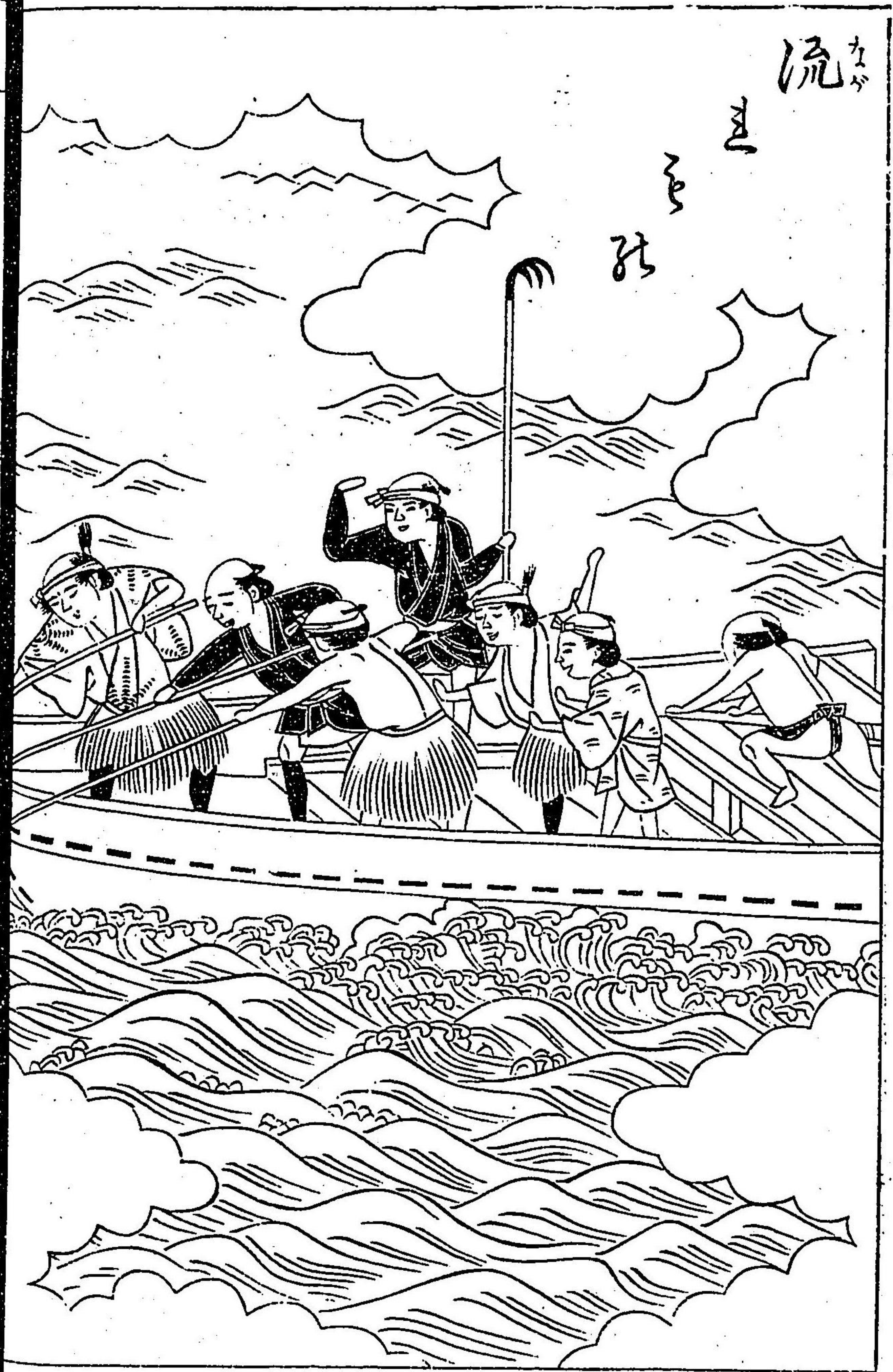
熊野浦は南方へ遠く出たる土地ゆへ、格外暖氣にてのどやかなる所なり。され  
ど南には國もなき大海なれば、波高く風強く磯邊のあらしき事は、中國などの海  
とは格別のものなり。かゝる大海の事なれば折々大風波の後などは、常に見な  
れぬ珍敷もの流れ来る事ありとぞ。椰子の實又は椰子の木杯は毎々波に打上  
るとぞ、何れの國より来る事にや。又近き頃獵師甚八といふもの沖中へ五六里  
ばかりも釣に出つるに、何か波に浮たるものを見付、引上見れば桶なり。悦び取  
歸りて、能く見るに桶高二尺五六寸、わたり一尺五六寸、中ふくらにて太鼓の

胴のごとく、桶がわの木の厚一寸餘、鐵にて輪を作り、八つを入たり、輪の幅一寸  
二三分、甚丈夫にしたる桶なり。胴中に小さき穴あり、小兒の握り拳をやうく入  
入るゝ程なり。チャンにて塗りふさぎたり。桶の小口には松葉の如き文字を彫  
付たり。胴中の穴より見るに、皮に白き粉入りたり。蕎麥粉に似たるものにて、水  
干したるものと見ゆ。取得たる獵師は寶物のやうにいひ居れども、其粉何とも  
知れざるものなれば、誰かくべつに賞玩するにもいたらず、何國より流れ來れ  
る物にや、何國の船より落せしものにや、つゝに何ともしる人なし。

龍鐘を愛す

余が求麻にありし日、ある夕方暴風吹おこり、枝をおり、砂をあぐ、暫時にして空  
晴れ風止たり、所の人龍卷あるべしといふて止ぬ。龍卷とは上方にていふ龍の  
天上すると云ふとなり。其後二三日経て、城下より六里東の方のきのへといふ  
村の者來りかたりけるは、さても過し日の龍卷は、我村にふしぎの事ころ有つ  
れ。十二三歳の男子二人、障子をひらき、手習ひして居たりしに、俄に風雨起りて  
眞黒になりたりしかば、すは龍卷ぞといふころあれ、何とは知らず庭の眞中の

○球麻 二二九頁  
に見ゆ



飛石の上にとふと落ちて微塵に砕けて飛ちりたり、其音の夥敷事たどへんものなし、只大ひなる釣鐘を微塵に打碎きたる様に聞へし、其碎けたる拍子に其虧飛で手習仕居たる机の上に落ちたるを、すかさず拾ひ取ぬ、はや忽ちに空晴、風やみてもの、落たりしと聞へし、跡にも怪敷ものは一つもなし、只残りたる物は子供の拾し物ばかりなり、人々集りて能く見るに、釣鐘のふちの所のかげ残りたるにて、石の如く金の如くなり、ふしきなるものかないかに巻上たりしとて、猶落残れるもあるべしとて、打集りて只其庭を尋ねさがせしかども、夫といふべきものもなく、いかなる事と知る人も候はずといふに、何卒其子供の拾ひしものを一見せば、やと申せしに、則村懸りの役より早速其村の庄屋へ送たり、其物早々城下へ持参すべしと下知ありしに、日を送り、早退役所へ持出たり、余が旅館へ送り來れば、そは珍ら敷ものこそと、これを見るに、小箱に入て幾重も紙に包たり、開き見るに甚だ微少にして、一方は銀色に、一方は栗色の漆にて、金の漆ぬりたるがはげ損じたるにて、とかふ論すべきものにも非ず、興覺て戻しやりぬ、是は彼所より急に申付たるにより、奪はれたる事もやと疑ひて、かくしつゝる事とおしはかりぬ、持來りし者に子供の取得たりし大なるはいかがや

○崇福寺 筑前府  
○那珂郡 筑前府  
○元年僧 崇福寺  
○仁治元年 僧 崇福寺  
○開基にして 崇福寺  
○横谷に於て 崇福寺  
○長政の地 崇福寺  
○寺域二萬五千里  
○餘坪  
○宗暉禪師 龜井  
○南無聖觀音 龜井  
○延三年庚午七月朔  
○日 崇福寺 龜井  
○宗暉、字 龜井  
○庵 崇福寺 龜井  
○岳山 崇福寺 龜井  
○永壽院 崇福寺 龜井  
○月橋院 崇福寺 龜井  
○續近世 崇福寺 龜井  
○道載の條 崇福寺 龜井  
○福徳寺 崇福寺 龜井  
○南無聖觀音 崇福寺 龜井  
○以三才學 崇福寺 龜井  
○曰三五 崇福寺 龜井  
○公其 崇福寺 龜井  
○以鳴る 崇福寺 龜井  
○南に 崇福寺 龜井  
○徠の學 崇福寺 龜井  
○年七十 崇福寺 龜井  
○南無聖觀音 崇福寺 龜井

と問しめぬれば、夫は其節に山かせぎの者來りて、珍敷ものなれば我に得させよ、名を聞糺して又返し與ふべしとて、子供をすかし日向の方へ携へさり候ひぬと答へたり、持來るべき様にいひやり様も有べかりしを残り多き事なりき、又筑前に遊びし時、博多の崇福寺に暫くと、まりて、此あたり一見す、此寺の佛、持は宗暉禪師とて、福岡の龜井道才の肉弟にて、才徳すぐれたる僧なり、余古き交りにて、此度も尋ね訪ひしに、久敷相見ざるには、らくも訪ひ來りし事よと、世にしたしく物せらるるに、思はずも日を移しぬ、此寺は九州の總録なり、京都大徳寺、江戸東海寺ともに、住職の僧、此寺に住する事とそ、筑前の太守の菩提地にて、境内八町四方、名におふ千代の松原の真中にあり、北は海を受けて、誠に清淨無塵の勝地なり、詩を賦し、禪を談せしいと、當國の奇事をとひしに、其座に在る人の曰、此國の海中に鐘あり、其處を鐘か岬といふ、織幅山の良の方、岸を離るゝ事、纔に五町ばかりの所にあり、船にて其處にいたればよく見ゆるよし、里人いふ、是はむかし三韓より撞鐘をふねに積て渡せしに、龍神鐘を望み、此海にいたりて浪風俄に起り、船くつがへりて鐘は終に海底に沈みぬ、其三韓よりわたりし事は古き事にや、万葉集の歌にも、千早振鐘がみささを過れども、我は忘れ

飛石の上にとふと落ちて微塵に砕けて飛ちたり其音の夥敷事たどへんものなし只大ひなる釣鐘を微塵に打碎きたる様に聞へし其砕けたる拍子に其轟飛で手習仕居たる机の上に落たるをすかさず拾ひ取ぬはや忽ちに空晴風やみてものゝ落たりしと聞へし跡にも怪敷ものは一つもなし只残りたる物は子供の拾し物ばかりなり人々集りて能く見るに釣鐘のふちの所のかげ残りたるにて石の如く金の如くなりふしきなるものかないかに巻上たりしとて猶落残れるもあるべしとて打集りて只其庭を尋ねさがせしかども夫といふべきものもなくいかなる事と知る人も候はずといふにや何卒其子供の拾ひしものを一見せばやと申せしに則村懸りの役より早速其村の庄屋へ送送り其物早々城下へ持参すべしと下知ありしに日移さず役所へ持出たり余が旅館へ送り來ればそは珍ら敷ものこそとこれを見るに小箱に入て幾重も紙に包たり開き見るに甚だ微少にして一方は銀色に一方は栗色の漆にて金の物の漆ぬりたるがはげ損じたるにてとかふ論すべきものにも非ず興覺て戻しやりぬ是は彼所より急に申付たるにより奪はれたる事もやと疑ひてかくしつる事とおしはかりぬ持來りし者に子供の取得たりし大なるはいかがや

○崇福寺は筑前にありて禪宗なり仁治元年僧徒の明基にして太宰府横ヶ岳に創建せり慶長七年黒田長政の地に遷せり寺域二萬五千餘坪  
○宗暉禪師龜井南冥の弟なり延三年庚午七月朔日盤榮和尚生る(南冥ノ弟ナリ)名宗暉字盤榮幼庵ト號ス州ノ横岳ト號ス州ノ横岳山禪師寺ニ住ス退隱シテ博多永寧院ニ居ル禪月樓集數卷アリ續近世談語龜井道載の條に云弟宗暉號盤榮住福岡崇福寺有二學徒一名高僧一名南冥盤榮及三千皆以三才學一顯世目曰三五絶云  
○龜井道載名は魯字南冥道載は其號なり筑前延津守の人儒醫を以て鳴る山縣周南の學を唱へり文化十一年歿す年七十一  
○南翁詩集に云

と問しめぬれば夫は其節に山かせぎの者來りて珍敷ものなれば我に得させよ名を聞糺して又返し與ふべしとて子供をすかし日向の方へ携へさり候ひぬと答へたり持來るべき様にいひやり様も有べかりしを残り多き事なりき又筑前に遊びし時博多の崇福寺に暫くとまりて此あたり一見す此寺の住持は宗暉禪師とて福岡の龜井道才の肉弟にて才徳すぐれたる僧なり余古き交りにて此度も尋ね訪ひしに久敷相見ざるにはるゝも訪ひ來りし事よと世にしたしく物せらるるに思はずも日移しぬ此寺は九州の總録なり京都大徳寺江戶東海寺ともに住職の僧此寺に住する事とぞ筑前の太守の菩提地にて境内八町四方名におふ千代の松原の真中にあり北は海を受て誠に清淨無塵の勝地なり詩を賦し禪を談せしいとま當國の奇事をとひしに其座に在る人の曰此國の海中に鐘あり其處を鐘か岬といふ織幅山の良の方岸を離るゝ事纔に五町ばかりの所にあり船にて其處にいたればよく見ゆるよし里人いふ是はむかし三韓より撞鐘をふねに積て渡せしに龍神鐘を望み此海にいたりて浪風俄に起り船くつがへりて鐘は終に海底に沈みぬ其三韓よりわたりにし事は古き事にや万葉集の歌にも千早振鐘がみささを過れども我は忘れ

崇福寺訪登榮禪  
 師探淨地、數里  
 行禪、雲近衣襟  
 訪禪、深履迷、  
 濕苔、外方相坐  
 翠松、四倚各天  
 日、社交似成、  
 北、別流、倚各天  
 一、別流、倚各天  
 浮、別流、倚各天  
 不、別流、倚各天  
 還、別流、倚各天  
 國、別流、倚各天  
 方、別流、倚各天  
 支、別流、倚各天  
 方、別流、倚各天  
 支、別流、倚各天

ず、志賀のすめ神よみ人しらすと出たり又新古今にも白浪の岩打波やひく  
 らん、鐘のみさきの曉の空衣笠内大臣又家の集音に聞く鐘のみさきはつきも  
 せず、なくこそ懇懇くわたりなりけり、俊頼又大名寄に聞あかす鐘の岬のうき枕  
 夢路も浪に幾夜へだてぬなぞ、諸集に見へたり、龍宮のものとして人々恐れ誰か  
 揚んどせし人もなかりしに、いつの代の事にや何がしとかやいへる國の守あ  
 りけるが、菩提寺を取立、いまだほよき鐘もなければ、新たに造り鐘より  
 海中にある鐘こそ名高き鐘なれば引上て、此寺に寄附せんとありしを、諸臣皆  
 此鐘は龍神のおしみ給ふと、古來より申傳へ候へば、今更引上給はん事恐れ有  
 と諫めしに、元來勇將なれば聞入給はずして、我用にて我領内にあるものを取  
 に、龍神とて惜むやうやあるはやくも海より引上よとて、數十艘の船を浮べ、鐘  
 の龍頭に大綱をおびたしくかけ、海より岡に引きつけんとて、千人力を以て  
 ぬい／＼聲を出して引たりしに、其鐘少し動くや否や、大空俄にかき曇り、天地  
 暗夜のごとく成て、大風波起り、まき上んとせし船碎け、綱されて、人も大半潮に  
 溺れて漂ひければ、終に其事とげざりけり、大守猶もいかり給ひしかども、諸臣  
 強て諫め留め申せしかば、止事を得ずして、其儘に捨置給ひぬ、其後三四代目の

大守勇氣殊に勝れ給ひぬるが、此鐘の事をきこし召、何條事や有べき、其日に折  
 あしく風の吹ければこそ、不思議にも思ひつれ、たとひ龍神は申せばとて、領主  
 にいかで敵すべきや、此鐘引上得ざるころ口惜しけれとて、諸臣の諫めを用ひ  
 ず、用意を丈夫にせばやとて、髪を毛を入れて、よりたる大綱をおびたしく鐘の  
 龍頭にまとい、船數艘に大石を數多積入て、船の脚をふかくしづめ、彼鐘の上  
 いたり、鐘に付たる綱を船に嚴敷まとい付て、彼つみたりし石を海中へ擲捨た  
 りしに、船漸く／＼に浮に付て、鐘もやう／＼うごく程こそあれ、案に違はず震動  
 雷電して、風おびた、敷おこりて、雲は墨をときしが如く、大波山を碎けば、な  
 かは以てたまるべき、船も人もみぢんに成、鐘も龍頭くだけてよこさまになり、  
 又海底に沈みたり、夫より大浪岡にあがり、人家田地大に破壊し、人民の歎き大  
 方ならず、ふしぎなるは其潮につれて翁の面一ツ上り來りたり、其面奇代の作  
 にして、中／＼世間のものにあらす、大守には尙も争ひ給ふべき氣色成しかど、  
 人民の歎きなればとて、諸臣諫めしにより、是は龍神より鐘の替りのこゝろに  
 て、希代のものを打上し事なれば、大守にも思ひどまり給ひて、鐘は終に人間  
 の手に入らず、ことに横さまになりて、龍頭さへくだけたれば、ふた／＼び上んた



○宗像の宮、今宗像神社と稱す、筑前國宗像郡田島村にあり、田心姫、瀬津姫、杵島姫を祭る、官幣中社なり、鐘ヶ崎は金ヶ崎なり、越前敦賀郡に屬す、元祿二年八月この地に遊べり

よりもなくなりぬ、面は奇異のものなればとて宗像の宮に納めて、今に彼宮に傳れりとす。鐘は此崇福寺に納るべかりしを斯龍神の愛せると云ふにより、永く海底のものとはなれりと語れり、少しむかし物語めきて仰山には聞ゆれどもさる事も有べし、其外越前の國敦賀のはとりにも鐘か崎といふ所有て、海底に鐘あり、芭蕉翁なども彼所に遊んで、月いづこ鐘はしづめる海の底といふ發句あり、すべて海上を通ふ船の鐘を積とをいひ事なり、鐘は龍神の愛するものなれば、是を積船は必ずくつがへると云傳へて、おろれあへり、是らの事もあれは球摩の事も、龍神の鐘を持かへれるが取落せし成べしと沙汰せり、余も又別に考ふる事あれと、おこがましければ畧しぬ。

西遊記續篇卷之二終

西遊記續篇卷之三

嬉し野

○嬉野は肥前國藤津郡にあり、柄崎驛を去ること三里二十三町五十四間

肥前の國嬉し野を通れるころは、日影もまだ高かりしかど、此里によき温泉ありと聞しかば、先宿りを求めて夫をも心見んと、賤しき伏屋に宿りぬ、都て民屋なれば茅の軒端いといふせし、誠に聞しごとく温泉は勝れたり、都近きに有らば、いかばかり賑はしく繁昌ならんに、斯邊鄙なれば其事もあらず、惜むべし、夜に入ぬれば宵の間より門さし込てふしぬ、けふはいとふもつかれざれば、とみにも眠らず、こしかた行末思ひつゝけたる折節、隣れる家に三味線の音きこゆ、しらべいとよく叶ひ、聲うるはしく調ひすましたるに、耳あらたまりぬる心地して、枕をもたけこれを聞くに、鳥部山といふ歌ひとつ弾て止ぬ、かしましくいたつら弾もせず、心ありげなり、浪花を出て後は、一里にても都遠さかるに付つゝ、殊に拙く聞にくきものは音律のとなり、國々遊里なども多く、其外にも三味線の音はたゆる所もなければ、調子もおほよろにたゞかしましきのみにて哀に靜なるきは絶てなし、心留る所もあざりしに、今宵の音はいかなる人や

彈つらん、筑紫のはての、殊にかゝる片山里に床しくも聞ゆるものかな、今一つとも待居たるに、龍田川邊といふ歌ひとつひきたり、聲うるはしき其姿も見まほしく、起出て宿のあるじに、いかなる女にやとたづねれば、隣家の娘なるが三とせ、四とせ長崎にありて、近き頃かへり來れるなりといふに、扱は長崎も名高きはどの甲斐はありぬ、下の關博多なむかしより其名高き遊里にて、日夜糸竹に遊ぶ地なるに、只其所に至りて目のあたり其聲を聞けば、誠に田舎びて我身の故郷に遠ざかりしを感ずる心のみ起れる。然るに今長崎にて學びたりしといふ音を聞に、都近き心地して耳珍らしく覺ゆるもいと嬉し、やがて長崎に行身なれば彼地に入らば何事も都近き心地やせんと末たのもしくて、今宵は思ひよらざる調べの音に旅のうさをはらしぬ、其後日を経て長崎に入り、またしも糸竹の調べ聞しに難波を出しよりこのかたの音におほくもとならず、嬉し野にて聞しには似もよらず、其女の勝れたるにやありけん、またまなひたる師の難波人にや有けん、又其折のあはれ深きより一しほにおぼぬしにや、亦其後程を経て薩摩に入りしに、琴三味線、鼓弓ともに端歌は此國かくべつにすぐれて、難波にもおさく、劣らず、京の端くよりは今一際まされるやうに覺

ゆ、常の言葉はあく迄訛りありて、怪敷ばかりなるに端歌勝れたるはいか成ゆへにやと、うこれらの人に尋れば、この國は三味線殊にはやりて法師たるものは皆難波に登りて學ぶ事なり、學び得て歸りても四五年も程経れば、また生國の訛り出る故に、又難波にのぼり來りて稽古のさらへする事なりと云。浪花にても名ある法師に學ぶとゆへ、いづれも節調子ともに格別の事にいたる。難波の外にては三味線のとほ薩摩のみなりといふべし、不思議至極のとより、其外の國は極邊土は元よりなり、程近き國ぐにてもいやしく拙き事、耳に觸べくもあらず、是は其國の音聲出て、ふしも調子もあらず、故なるべし、其外横笛、筆、築などの調子も、京都の音には似たる國もあらず、水土によりて音律の替るとはいちじるしきものなり。

鼠 島

○鼠島 何處の島  
な云ふにや、肥後  
國志八代郡の中に  
（鼠島）里俗かく  
れ里と云、鼠多し、  
近年鹿兒島に移る  
と云、船の聲を禁  
すあり、これに

肥後と天草の島との間に海中に小さき島あり、いかなることによ、此島には鼠ばかりしよりたびたしく住ると云、元より小さき島なれば人も住ず、此鼠のみなりといふ、此故に此海を通ふ船にては、三味線をひくとを、船頭かたく留めて赦さ



徐福

